

第78回 北海道社会科教育研究大会札幌大会 第50回 札幌地区社会科教育研究大会 大会成果号

令和5・6・7年度 3か年継続研究
社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成
～見方・考え方を鍛え、確かな社会認識をもとに
未来を志向する社会科の学び～

北海道社会科教育連盟
札幌市社会科教育連盟

北海道社会科教育連盟綱領

社会の正義と平和を維持するためには、人権の尊重が個人および集団のうちに熟成されていなければならない。これの表明と実現と積極的な教育実践と研究を展開し、自主と連帯によって、社会科教育の前進を図ろうとするすべての同士の共通の姿勢としてこの綱領をうたいあう。

○われわれは人間の尊さを自覚し、日本の社会に人権の意識と感覚とを正しくうちたてていく勇気と知性をもとう。

○われわれは現実を正しく認識し、みんなのしあわせのうえに自分のしあわせを築いていく人間を育てることに、希望と創意をもって挺身しよう。

○われわれは北海道に生きる現実の姿を凝視し、社会認識を深め、その進捗改善に資する力を育てて、あい路や障害を切り開いていこう。

○われわれは同士の理解と協力によって、教育実践を積みあげ、他との連携によって、研究の場をつくり深まりと拡がりを求めあていこう。

○われわれは時代の拘束や潮流に対しても、人間尊重の精神をもやしつづけ、正義を愛し平和と自由をうちたてる同士として行動しよう。

目 次

○ 目次	1
○ 大会開催要項	2
○ 御挨拶	
・ 北海道社会科教育連盟委員長	千葉 一 博 4
○ 1 か年目の研究を振り返って	
・ 北海道社会科教育連盟研究部長	河 原 秀 樹 5
・ 札幌市社会科教育連盟小学校研究部長	栗 原 聡太郎 6
・ 札幌市社会科教育連盟中学校研究部長	大 坂 聡 7
○ 各部会の授業記録、分科会記録	
◇ 小学校研究部	
・ 第3学年研究推進委員会	 9
・ 第3学年 責任提案	 13
・ 第4学年研究推進委員会	 19
・ 第4学年 責任提案	 23
・ 第5学年研究推進委員会	 31
・ 第5学年 責任提案	 35
・ 第6学年研究推進委員会	 41
・ 第6学年 責任提案	 45
◇ 中学校研究部	
・ 地理的分野研究推進委員会	 53
・ 地理的分野 責任提案	 57
・ 歴史的分野研究推進委員会	 63
・ 歴史的分野 責任提案	 67
・ 公民的分野研究推進委員会	 71
・ 公民的分野 責任提案	 75
○ 御講演	
・ 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官	小 倉 勝 登 氏 . . 82
○ 大会アンケートより	 84
○ 開催御礼	
・ 北海道社会科教育連盟事務局長	石 川 円 85

開催御案内

令和4年、第60回全国小学校社会科研究協議会研究大会北海道大会において、北海道一丸となって紡いできた研究を、私たちは力強く全国へ発信することができました。しかし、コロナ感染拡大に配慮し、会員が一同に会して授業を観たり、研究について語り合ったりすることは残念ながらできませんでした。今回4年ぶりに、ここ札幌の地に全道の会員が集まり、顔と心を突き合わせて社会科について学び合うことができることを本当に嬉しく思います。

私たちはこれまで、「よりよい社会を目指し創造と貢献を行う具体的な人物の営みを取り上げた教材化」「発想の転換を迫り、子どもの心を揺さぶる問いを生み、その解決を通して多面的・多角的に社会を見る目を養う学習の展開」を大切に、授業を創り上げてきました。新3か年研究ではその土台の上に、子どもたちが「社会参画につながる新たな価値を創造する=未来を志向する」学習を追究します。

未来を生きていく子どもたちのために、我々の研究に対して忌憚のない御意見を頂戴できれば幸いです。本大会の実現のためにお力添えいただいた、授業会場校・北海道教育委員会・札幌市教育委員会・各校長会ははじめ多くの皆様に心から御礼申し上げます。

皆様の御参加を心よりお待ちしております。

北海道社会科教育連盟 委員長 千葉 一博

大会研究主題

北海道社会科教育連盟研究主題・札幌市社会科教育連盟研究主題

「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」

【主催】北海道社会科教育連盟 札幌市社会科教育連盟

【後援】北海道教育委員会 札幌市教育委員会 北海道小学校長会 北海道中学校長会
札幌市小学校長会 札幌市中学校長会

1. 大会日程

【令和5年11月23日（木）】 地区交流会、レセプション

会場 ホテルライフオー・札幌 ライフオー・ホール

〒064-0810 札幌市中央区南10条西1丁目 TEL：011-521-5211

16:30 17:00 18:00 18:15 20:00

受付	地区交流会	休憩	レセプション
----	-------	----	--------

【令和5年11月24日（金）】 全体会、公開授業、責任提案、研究討議

9:15 9:45 11:35 (授業開始時刻は次ページ参照) 14:20※ 14:35※ 16:40※

受付	全体会 開会式 研究提案 講演	昼食 移動	受付	公開授業 (各会場)	休憩	研究討議 責任提案	閉会
----	--------------------	----------	----	---------------	----	--------------	----

※午後の日程は、授業会場ごとに異なります。

全体会場 北海道立道民活動センター「かでる2・7」 かでるアスビックホール

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目 TEL：011-204-5100

◆講演 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 小倉 勝登 氏

2. 授業会場

学年	単元名	授業者	授業会場	授業開始時刻
小学 3年	事故や事件からくらしを守る ～みんなでつくる安全なくらし～	鈴木 悠也	札幌市立北九条小学校 北区北9条西1丁目1	13:35
小学 4年	地震災害からくらしを守る ～冬の災害に備えて～	小沼 明日騎	札幌市立伏見小学校 中央区南18条西15丁目1-1	13:10
小学 5年	これからの食料生産とわたしたち ～未来につなげる食料生産～	工藤 拓海	札幌市立円山小学校 中央区北1条西25丁目1-8	13:35
小学 6年	世界に歩み出した日本 ～民主主義の高まりと主権者としての未来～	黒田 健太	札幌市立緑丘小学校 中央区南10条西22丁目3-1	13:10
中学 地理的分野	世界の諸地域 ～アフリカ州～	秋山 遥	札幌市立中央中学校 中央区北4条東3丁目1-1	13:45
中学 歴史的分野	近代国家の歩みと国際社会 ～近代国家への歩み～	野々川 華奈	札幌市立新琴似中学校 北区新琴似7条4丁目1-1	13:45
中学 公民的分野	私たちの暮らしと経済 ～これからの経済と社会～	川股 直樹	札幌市立羊丘中学校 豊平区福住1条3丁目16-1	13:40

◆各会場で授業開始時刻が異なりますので御確認ください。受付は授業開始15分前からとなります。

◆授業会場への交通手段は、参加者御本人が確認の上、御移動ください。

(緑丘小、伏見小のみ、全体会場からの貸切バス移動が可能です。※要申込)

3. 責任提案

会場	提案地区	単元名
小学校3年 北九条小学校会場	旭川	3年「店ではたらく人」
	上川	3年「店ではたらく人と仕事」
小学校4年 伏見小学校会場	釧路	4年「地域で受けつがれてきたもの」
	札幌	札幌市社会科教育連盟「研修部会」の取組
	札幌	人材育成・組織活性化プロジェクトの取組
小学校5年 円山小学校会場	後志	5年「自然災害とともに生きる」
	函館	5年「水産業のさかんな地域」
小学校6年 緑丘小学校会場	網走	5年「未来を支える食料生産 水産業のさかんな地域」
	渡島	6年「幕府の政治と人々の暮らし」
	札幌	札幌市社会科教育連盟「研修部会」の取組
地理的分野 中央中学校会場	空知	地理「世界の諸地域 ー北アメリカ州ー」
	十勝帯広	地理「世界の諸地域ーアジア州ー急速な都市の成長と変化」
歴史的分野 新琴似中学校会場	胆振	公民「民主政治と政治参加（まちづくりと私たち）」
公民的分野 羊丘中学校会場	旭川	公民「市場のしくみとはたらき」
	釧路	公民「民主政治と日本の政治」



社会科の未来を志向する一日となりました

北海道社会科教育連盟 委員長 千葉 一博

(札幌市立三里塚小学校長)

大きな成果を上げることのできた前4か年研究。そして、私たち北海道社会科教育連盟は研究の歩みを止めることなく、新たな研究主題・副主題である「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成～見方・考え方を鍛え、確かな社会認識をもとに未来を志向する社会科の学び～」を掲げ、3か年研究をスタートしました。その1年次目の研究成果を問う「第78回北海道社会科教育研究大会札幌大会」「第50回札幌地区社会科教育研究大会」を、11月24日（金）札幌市において開催いたしました。

当日は、3か年研究の副主題にもある「社会参画につながっていく未来を志向する学び」とはどのような学びなのかを、「子どもと社会がつながる教材化と単元デザイン」「社会認識を深めるための1時間の設定」「社会参画につながる新たな価値を創造する1時間の設定」の三つを手立てとし、小学校4本中学校3本、合わせて7本の授業を通して提案しました。4年ぶりに内容の全てを会合形式で行いましたが、参加いただいた多くの皆様が、顔、心、よりよい授業を求める気持ちを突き合わせて、社会科について語り合うことのできる、素晴らしい機会にすることができました。授業会場を分散するという今までにない形式で授業公開や各分科会を行い、私もいくつかの会場に伺って様子を観させていただきましたが、どの会場においても主体的に問題解決に取り組む子どもたちの姿、各地区の創造的な実践発表、忌憚なく意見を交わし合う協議などを観ることができました。まさに社会科を通して会員が「未来を志向する」一日となりました。

大会の開会式挨拶において、近年、世界の中で起きている戦争・紛争についてお話をさせていただきました。改めて罪もなく命を失われた方々に心より哀悼の意を表するとともに、辛く悲しい思いをしている全ての方々にお見舞いを申し上げます。社会科の目標は、公民的資質を育成すること…公民的資質の最も大切なものは、平和を希求し、掛け替えのない命を大切にすることと考えます。この資質を身に付けていくためには、「なぜ、このようなことが起きているのか」「自分はどう考えるのか」「できることがあるのであれば行う」…まさに我々が求める正しい社会認識と社会参画を行うことが必要です。

これから、1年目の研究の成果、そして課題をもとに研究をさらに進めていきます。研究大会のバトンは、函館地区、旭川地区とつながれていきます。より良い社会科の授業のため、北海道の子どもたちのために次は何を目指していけばよいのか、各地区が、一人一人の会員がそれぞれしっかりと解釈し考えるという、受け継がれてきた北海道社会科教育連盟の精神を大切に進んでいく所存です。

最後に、末筆ではございますが、講師として御指導を賜った文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 小倉 勝登 様、御助言をいただいた北海道教育委員会、札幌市教育委員会の皆様、授業を公開して下さった札幌市立北九条小学校、伏見小学校、円山小学校、緑丘小学校、中央中学校、新琴似中学校、羊丘中学校の校長先生をはじめ、職員の皆様、御後援をいただいた各校長会に心より御礼申し上げます。有難うございました。

全道の皆さんが集い、新たな挑戦が始まった札幌大会

北海道社会科教育連盟 研究部長 河原 秀樹
(北海道教育大学附属札幌小学校)

令和5(2023)年11月24日、雪が降る寒さの厳しい中、札幌の地において令和元年度以来の完全参加型による「札幌大会」が開催されました。3か年継続研究の1年次として研究主題「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」、研究副主題「見方・考え方を鍛え、確かな社会認識をもとに未来を志向する社会科の学び」を掲げ、全道一丸となって新研究の一步を踏み出しました。

道社連研究部では、新3か年研究を進めるにあたって、全道の皆さんにお示しした3つのキーワードがあります。

○社会とつながる ○価値を創造する ○社会認識と社会参画

これらのキーワードは、前4か年継続研究で大きな成果を上げた社会認識を深めることに加え、「社会参画につながる新たな価値を創造する1時間」を単元デザインの中に位置付ける研究の始まりを意味しています。札幌大会においては、小学校及び中学校の7会場で行われた授業、全道各地区組織からの責任提案を通して、新たな研究を子どもの学びの具体的な姿で検証することができました。

札幌大会を通して見えてきた多くの成果と課題について、以下に記します。

1. 「手立てⅠ～子どもが社会とつながる教材化と単元デザイン」から見えたこと

どの授業も、子どもの生活経験や既習とのつながりを意識し、子ども自身が社会的事象を身近に感じることができ、自分事として考えられるように教材化を図ったことが成果として上げられます。一方、単元デザインについては、単元を貫く学習問題と1単位時間の問いや活動のつながりについての吟味が必要だという議論がなされました。2年次に向けては、子どもの思考のプロセスをより具体的に想定した単元デザインが必要だと言えます。

2. 「手立てⅡ～社会認識を深めるための1時間」から見えたこと

前4か年継続研究でもっとも大切にしてきた単元の中における1単位時間の学びです。社会的事象を創出する人物の営みの意味を考える1時間は、北海道社会科教育連盟の授業づくりの強みと言えるはずです。しかしながら、単元における「社会参画につながる新たな価値を創造する1時間」を意識するあまり、「社会認識を深めるための1時間」の授業設計が弱まっている懸念も出されました。今一度、単元の学びにおける知識と知識が有機的につながる授業場面の重要性を再確認し、人物の営みの意味を考える授業を構築していきたいものです。

3. 「手立てⅢ～社会参画につながる新たな価値を創造する1時間」から見えたこと

手立てⅢは、まさに新3か年継続研究で明らかにしていきたい単元の中の後半場面です。どの授業でも、子どもの社会参画につながる姿をイメージしながら授業づくりを進めてきたことが分かります。それによって、子どもが主体的に未来を志向する姿や発言が見られました。これは1年次の大きな成果です。しかしながら、研究討議においては、学習指導要領の内容の取扱いとの関連性や、学習したことを基にした議論にまでは至っていないというご指摘もありました。社会課題について議論したり、発展について考えたりするための新たな問いの生み方(問題意識の醸成の仕方)が必要だという意見も出されました。新しい授業への挑戦については認め合いつつ、2年次に向けた課題として皆さんで共有し、研究を前に進めていきたいと考えています。

4. 「研究の土台となる手立て～学級経営や教科経営による集団づくり」から見えたこと

札幌地区では、研修部の取組が始まりました。全道各地区組織でも、研究と研修の両輪で地区の研究を盛り上げているという提案もありました。わたしたちは、よりよい社会を創っていく子どもたちを育てているわけですから、学級という小さな社会で学び合う子どもたちには協働的に学ぶよさを味わってほしいと願います。研究の土台として、これからも大切にしていきたい手立てです。

各地区組織の秀逸な教材化と果敢なチャレンジによって、多くの成果を上げることができた1年次でした。単元の学びを通して、「社会認識を深める」子どももいました。そして社会課題について議論したり考えたりする「社会参画につながる価値を創造する」子どもの姿も少しずつ見えてきました。3か年継続研究の2年次に向けて、これから全道各地区組織の皆さんと共に研究の歩みを進めていきたいと思えます。

札幌から未来を志向する社会科の学びを発信する

札幌市社会科教育連盟 研究部長 栗原聡太郎(札幌市立宮の森小学校)

手立て1 社会的価値を明らかにし、社会とのつながりが見える教材化

新研究主題・副主題を掲げ、新3か年研究が札幌からスタートした。札幌市社連では「未来を志向する社会科の学び」の実現に注力し、授業づくりを行った。ここでは、改めて3つの手立ての有用性を振り返り、2年次目の研究の方向性を展望していく。

未来を志向する子どもの姿を生み出すためには、社会的事象と子どもたちの生活との「つながり」に目を向けて教材化することが大切であると考えた。第3学年部会では安全マップを作成する地域の営みとその作成に小学6年生が関わる価値に着目し、教材化を行った。子どもたちは地域を守る一員として自分たちが安全マップづくりに関わることを知り、安全マップづくりを通して地域に貢献することの価値や自分自身の安全意識を向上させることの大切さに気付くことができた。一方、他の学年部会では子どもたちと社会的事象を「つなげる」ことの難しさが指摘された。「つなげる」こと自体が目的化してしまうと教材解釈の妥当性が問われてしまうという教材化する際の留意点も明らかになった。

手立て2 見方・考え方を働かせる手立てを位置付けた単元構成

手立てⅡでは、「見方・考え方」が繰り返し働くように単元を構成した。そのために「問い」を中心に配置し、教師が提示する資料や子どもが行う学習活動が「問い」とどのように関わるのかを明らかにするための単元構想図を作成した。第5学年部会では、子どもたちの学習経験や生活経験を分析し、その認識と社会的事象とのズレが生まれるような資料を提示することで、子どもたち一人一人が食料生産に関わる現代的諸課題を生み出す社会的背景から単元を貫く学習問題を設定することができた。しかし、そのような単元の入り口の場面で躓いてしまう実践も少なくなかった。子どもたちを社会的事象とどのように出合わせ、どのような追究の姿を引き出していくかを詳細にイメージできる授業力を連盟会員一同で一層磨いていかなければならないと痛感した。

手立て3 未来志向に迫る1時間

手立てⅢでは、よりよい社会の在り方やその実現に向けて自分たちがどのように関わるべきかについて考える「未来志向に迫る1時間」の授業場面を構成した。特に、子どもたちの中に「未来志向に向かう問い」をどのように生むのか、手立てを明確にした授業づくりに挑んだ。しかし、どの部会でも手立ての曖昧さや問いの質について課題が挙げられた。子どもから「問い」が生まれていたのか、学習活動は子どもが主体的に問題解決に向かうために適切であったのか、未来志向に向かい子どもが思考するための十分な時間が確保されていたか等、様々な意見が分科会で出た。

今、再び問われる「授業力」

子どもが未来を志向する姿は発達段階や学習内容によって様々である。「未来を志向する姿」を各学年部会がどこまで詳細に思い描けるかが2年目の鍵になる。まさに連盟会員一人一人の「授業力」が今、問われているのだと考える。

令和5(2023)年度 中学校研究部 初年度研究の振り返り

札幌市社会科教育連盟 中学校研究部 令和5・6・7年度 3か年継続研究主題

主 題 社会と自分のつながりを知り、よりよい社会づくりに参画する子の育成

副主題 見方・考え方を鍛え、子ども一人一人が、学ぶことに価値を見出す社会科の学び

授業実践の振り返り(○…成果 ▲…課題 □…次年度に向けて)

手立て1 子どもが、社会とのつながりを実感できる教材化

- 各分野で、子どもたちにとってつながりが見えやすい社会的事象を取り上げ、その価値を「再認識」できるような教材化や、世界と自分たちのつながりに「気付く」ことを重視した教材化を進めることができた。
- 小学校段階の学習内容の詳細な確認や、子どもたちに社会的事象に関わる意識調査を行うなど、子どもたちの実態の把握に努めながら教材化を進めた。
- ▲ 本時で扱う社会的事象と子どもたちとのつながりを重視した結果、本時の学習問題の解決と単元の学習問題の解決のつながりが見出しづらくなる場合もある。

・子どもたちの実態を踏まえ、扱う社会的事象と自分たちのつながりに「気付く」「再認識する」ことができるよう教材化の工夫を継続する。

・「本時への理解を深めるための単元」から「単元の理解を深めるための本時」という意識を一層重視する。そのために単元で扱う事象や知識への理解をより深め、知識や事象の構造と、単元と本時のつながりをより明確にして、単元や本時の学習構成の工夫につなげる。

手立て2 子どもが、社会認識を深める学習構成の工夫

- 地理的分野の「単元の『問い』の構造」の作成や、歴史的分野の社会認識の段階（「事実」「関係」「価値」）を重視した単元の学習内容の捉え直し、公民的分野の小単元をつなげた単元構成など、各分野で様々な学習構成の工夫が行われた。
- ▲ 単元・本時ともに、子どもたちが学習問題の解決に向かう際に、見通しをもって進むことができているかが少しわかりづらい。

・各学習の「問い」を吟味し、学習ごとに社会認識が深まるような学習構成の工夫を継続する。

・単元・本時ともに、問題解決の見通し(どのようなことがわかれば解決するのか、どのような見方・考え方を活用すべきなのかなど)をもつための活動の充実を図る。

手立て3 子どもが、学びをつなげ深めるための教師の関わり

- 各分野、これまでの研究の成果を生かしながら、単元や本時の問いを子どもたちの疑問と近づけるための工夫が行われた。
- 根拠となる資料の準備や ICT 機器の活用、板書の構成を吟味しながら、子どもたちの思考をつなげたり深めたりする工夫が行われていた。特に、各分野ともに既習の記録が子どもにもわかりやすい状態であった。
- ▲ 本時の学習活動における子どもたちへの声かけや、学習活動後に本時の学習をより深める（社会参画意識の向上につなげる）ための教師の関わりのさらなる工夫が必要。

・授業作りにおける、本時の学習活動の内容や進め方、まとめ方を検討するための時間を確保する。

・育みたい社会参画意識の種類や段階を再整理し、授業後半（問題解決の場面）で社会参画意識の向上につながるよう、学習活動や教師の関わりを工夫する。

小学校研究部

各学年 授業記録

分科会記録

責任提案

責任提案分科会記録



第3学年研究推進委員会 授業記録（10／11時間）

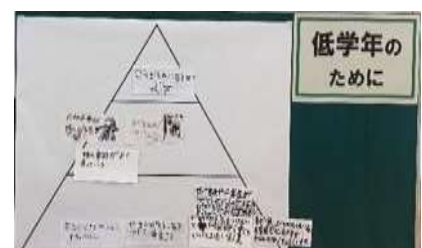
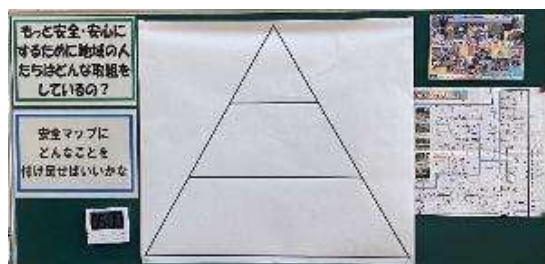
単元名 「事故や事件からくらしを守る～みんなでつくる安全なくらし～」

授業者 鈴木 悠也（札幌市立北九条小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	○前時までの学習の確認をする。 ・みなさん、今日は何を作る時間ですか。	・安全マップだよ。
1	○本時の学習問題・活動の流れを確認する。 安全マップにどんなことを付け足せばいいのかな。 ・低学年、高学年、大人（運転する人）、高齢者・お年寄りのために安全マップに付け足す内容を考えるグループに分かれます。 ・マップにスペースの余裕がないので、グループで付け足す内容は1個です。 ・1個を決めないといけないので、1個を決めるには？ ・ピラミッドの上になったものをマップに載せます。話し合っってピラミッドの一番上にあげていきます。今まで勉強してきたことの中から内容を決めます。	 ・じゃんけん ・ピラミッド ・多数決
3	 	○各グループで、安全マップに付け足す内容を考える。 ○高齢者グループ ・お年寄りには特に目が見えない人もいるから、曲がり角があるところは車が曲がる時は危険。点字ブロックがあるから安心だよ。 ・多数決で決めていこう。いっせーの一で。 ○低学年グループ ・塾に行く時に、車が急発進するところがある。特に低学年は、背が低いから危ない。 ・スクールガードがいることを低学年のみんなに知らせるといいね。 ○大人グループ ・路駐は子どもが飛び出してくることがあるから危険。 ・自転車に乗る時にお話をしたり、手に何も持たない。 ・投票していこう。「いっせーので」で指を指して。 ○高学年グループ ・交差点に気を付けるといいね。 ・自転車事故に注意するところがあるよ。 ・これを上に上げた方がいいと思う人？
3 5	○全体で、各グループで決めた内容を確認する。 ・低学年チームで「交差点に気を付けて」と書いたけど、どうしてかな。	・地図に交差点の事が書いていないし、警察の人も「交差点に気を付けてください。」と言っていたから。

4 5	・高学年チーム「自転車に乗る時にお話しない、手に何も持たずに」は？ ・大事なんだね。大人のところに入れてもいいんだね。 ・大人チーム「路駐は子どもが飛び出してくるから危険」は大事なの？ ・路駐のことを低学年のところに貼るのは変かな。 ・高齢者チーム「信号がすぐに点滅したり、赤信号に変わったりするところがある」これはどうして書いたの？ ・安全マップにもう載っているから書かなくてもいいんじゃないという人もいる、2 回も書かなくていいんじゃないかな？ ・信号のカードを高学年のところに貼るのはおかしい？ ・4 つ決まりました。これで北九条小の通学路は完全に安全安心です。 ・みんなは何を気をつけないといけないの？ ・自分が気を付けようと思わないとダメなんだね。自分たちも交差点も信号も路駐も自転車も気を付けないとダメなんだね。みんなが気を付けないと安全安心にならないんだね。	・横を向いて自転車を漕いでしまうから、車の視界や車の目の前に入った時に、何も見えなくて轢かれてしまうから危険。 ・片手で傘を持ちながら自転車に乗っている人がいるから入れてもいい。 ・あった方がいいよ。 ・大事だよ。 ・変ではないよ。 ・音が鳴らなかったら、耳が聞こえにくい人だったら危ないし、すぐに点滅したら、足が悪い人が渡れないから。 ・書くこと自体おかしくない。 ・高齢者のためでもあるし、もっと注意することができるよ。 ・変 ・変じゃない ・高学年の人だって、すぐ点滅する信号も気を付けて渡らないといけないから変ではない。 ・そうではない。 ・悪い人がいるから、そうではない。 ・使っている人が全員とは限らない。 ・みんな同じじゃない？ ・低学年も高学年も自分で気を付けなければいけないことは人それぞれだけど、言われていることは昔言われていて今もこうやって気を付けないとなと思っっている人は高学年の人の中にもいるかもしれないから、基本的にみんな同じ。
-----	---	--

<板書>



第3学年研究推進委員会 授業分科会記録と実践の振り返り

司会者 中田 充（札幌市立山鼻小学校 教諭）
授業者 鈴木 悠也（札幌市立北九条小学校 教諭）

助言者 三浦 聡（札幌市立琴似小学校 校長）
米谷 広美（北海道教育庁学校教育局義務教育課 主任指導主事）
記録者 染谷 惇志（札幌市立篠路西小学校 教諭）



手立て1
安全マップに付け足す
その必要性は？

「子ども安全マップ」は、小学生と地域の人とのつながりが見える素材である。子どもたちが未来志向する素材として可能性を秘めている。また、「子ども安全マップ」に付け足すことを考えることも、地域の安全を守ることに繋がる手立てだ。しかし、6年生で取り組むマップ作りを、3年生の社会科の学習で行う必要があったか、児童にとって必要感があったかは疑問の余地がある。

手立て2
既習を生かした学習
多角的に考える

児童は、既習を生かして安全マップに付け足すことを考えようとしていた。ゲストティーチャーから学んだことや校区探検で撮った写真を根拠に考えている児童がいた。また、「低学年」「高学年」「大人」「お年寄り」の4つの立場を自分で選択・判断して、付け足すことを考える姿も見られた。しかし、児童はそれぞれの立場の人たちにどれだけ寄り添って考えていたのだろうか。それぞれの立場の人がどのような人なのか、単元や本時の授業の中で確認しておく、グループ内の児童が同じ視点で考え、話し合えたはずだ。

今回の授業では、授業者が立場を指定して付け足すことを考えさせたが、立場を児童から生む手立ての方が未来志向に繋がるのではないかと。児童自身が様々な立場の人のことを思い浮かべて考えることが、社会参画に繋がる。また、児童全員で様々な立場で考えることで、児童同士が考えを交流しやすくなる。さらに、児童から出た考えの中から共通点を探す活動を取り入れることで、後の自分の安全意識を高める行動を考えることに繋がる。

手立て3
発達段階にあった
課題だったか？
付け足すことを絞る
必要性は？

本時の課題は「安全マップにどんなことを付け足せばいいかな。」だったが、3年生の発達段階を考えると難しい課題だった。課題が「安全マップの『どこに』付け足せばいいかな。」だと、児童は課題解決しやすかったのではないかと。「どこに」を考えることで、既習や生活経験を基に考えることができる。そのことによって、グループ内の話し合いでは児童同士の視点が同じになり、議論し合いながら付け足すことを1つに絞ることができるのではないかと。

グループ内で付け足すことを1つに絞るとき、「ピラミッド」を用いながら話し合う学習活動は参考になる手立てだった。たくさんの意見の中からよりよいものを選ぶときに有効な手立てである。しかし、本時の授業で必要だったのか、そもそも1つに絞る必要があったかは再考すべきである。今回の授業で児童が既習を生かして考えたことは、安全マップに付け足すこととしてはどれも大切なことである。その大切な考えに優劣をつけるのではなく、誰にとって必要なことなのかを分類したり、共通点を見出したりすることが、この授業で有効な手立てだったのではないかと。また、本時のように、グループに分かれて話し合いをした後、全体で考えをまとめることは難しい。全体で考えを交流する前に、再度本時の課題を確認する必要がある。

<米谷 広美 主任指導主事>

既習を関連付け、社会的な見方・考え方を働かせながら学習していた児童がいた。児童がさらに見方・考え方を働かせるためには、児童にどのような視点で、どのように考えてほしいのかを評価規準レベルで具体的にしておくことが大切である。

児童が見方・考え方を働かせるためには、前時までの学習も大切である。本時では、付け足すことを考えることで精一杯になっていた児童がいたので、前時までの学習が調べるだけになっていたのではないかと感じた。社会科では、情報を収集して、整理・分析して、まとめるという過程があるが、単元の中で繰り返すことが大切だ。前時までにこのような学習を積み重ねると、見方・考え方をさらに働かせる児童が増えたのではないかな。

授業の導入で授業者が「今まで勉強したことの中から考えよう。」と、児童に意識づけていたところは、単元を通した学びを生かそうとしていて素晴らしかった。しかし、児童自身が地域の安全にどのように関わっていくかを選択・判断するときに、「立場を分けて付け足すことを考える。」「付け足すことをグループで1つに絞る。」という学習活動が児童に合っていたのかはもう一度考える必要がある。児童が地域の安全にどのように関わっていくかを考え、その根拠を交流するという展開も良かったのではないかな。

<三浦 聡 校長>

単元や本時の学習を通して、だれが、どのように地域の安全に関わっているかが教材化されていた。社会科を学び始めた3年生が、地域の人たちの営みを知るということは大切である。一方で、3年生が6年生の取組に参加するという意識を本時までに高めて授業に臨んでいたかは疑問の余地がある。

本時の課題「安全マップにどんなことを付け足せばいいかな。」だったが、児童が具体的に考えにくい課題だったため、イメージで語っている児童が多かった。しかし、中には「高齢者は体が動かしにくいから……。」という視点をもっている児童がいたので、「貢献」に近い姿が見られた。単元を通して、「校区の安全を自分たちが守る。」という意識をもつきっかけとなった一時間になった。

授業では、付け足すことはグループで1つに絞って考えさせていたが、児童は付け足すことを絞った理由を明確にするところまでに至らなかった。3年生にとって付け足すことを1つに絞ることは難しかったかもしれない。そして、未来志向するためには、地域をどのように捉えるかはっきりしていなければならない。3年生なりの地域の捉え方を明確にすることで、児童はどのようなことを付け足せばいいのか深く考えることができたのではないかな。

実践の振り返り 授業者 鈴木 悠也（札幌市立北九条小学校）

本実践は社会参画かつ未来志向の1時間ということで、挑戦的な内容となり、私自身非常に勉強になりました。成果としては、本時場面で子どもたちが単元の学びを生かしマップに付け足す内容について意見を述べる姿が見られたことだと思います。単元で様々な種をまいていたことに効果を感じました。授業者として感じた課題は、単元の導入・交通事故という事象との出会わせ方にありました。単元全体を通して、子どもたちの「交通事故0を目指そう」「事故・事件は絶対に起きてはならない」といった意識が弱いように感じました。「安全なまちを目指す」という意識がもっと強ければ、マップに付け足す内容を考える活動ももっと熱を帯びたと思います。また、多くの先生方から付け足す内容の1位を決める活動についてご意見をいただきました。子どもたちが学習を生かし、地域の人を思い浮かべ、付け足す内容を考えることが出来ていたのに、それを取捨選択する活動になったのは、勿体無いと自分自身も感じました。いずれにしても、お忙しいところ本実践を見に来ていただいた多くの先生たちに何かしらの形で、少しでも刺激になる実践だったことを願います。

第3学年分科会 責任提案

旭川地区 単元名「店ではたらく人」

提案者 河野 翼（旭川市立朝日小学校）

授業者 七条 京汰（旭川市立豊岡小学校）



（１） 提言の主張点

今年度、旭川地区では研究主題「7年間の学びを通して、様々な立場・広い視野で世界を見ることができる子供の育成」を設定した。小中7年間の学びが連続するよう発達段階に応じた見方・考え方を精査し、社会とつながり多面的・多角的に身の回りの「世界」を見続けようとする子どもの育成に取り組んでいる。今年度は、学習過程の「まとめる」「生かす」を切り口に、問題解決学習の充実と、指導と評価の一体化の充実を重点に研究を進めた。

（２） 研究の概要

【研究の柱1 「まとめる」「生かす」段階の充実】

今年度の旭川地区における重点は、「まとめる」「生かす」段階の充実である。そこで、本実践では「まとめる」段階において、社会について多面的に捉えたり、これまでの思考をより深化させたりすることができるように、次のような2時間を構成した。

1時間目は、学習問題のまとめである。ここでは、調べてきたことを整理し、関連付けることで「販売店で働く人々は、お客さんの様々な願いを踏まえて、売り上げを高める工夫や努力をしている」ことを理解させることができるようにした。

2時間目は、まとめをさらに「深める」段階として、児童がより社会的事象への理解を深められることをねらいとした。そこで、+1の資料として、スーパーマーケットにおける「200%保証」を教材として取り上げた。

200%保証とは、消費者が購入した商品に期限切れや品いたみがあつた場合には、代金の返金に加え、商品も新しいものと取り替えるというスーパーマーケットの対応である。

200%保証を行うことは、一見すると店側の利益の損失に繋がる。これは、前時における学習問題のまとめと反する内容である。そこで、「売上を高める工夫や努力をしているはずなのに、なぜ200%保証を行うのか」という問いを設定することで、既習内容とのずれを生み出し、児童が追究心をもって主体的に学習に向かっていけるようにした。

【研究の柱2 指導と評価の一体化】

「指導と評価の一体化」の観点から、学習評価の目的を大きく2つに括り、「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」を区別して単元の中に評価場面を設定した。

児童に資質・能力を確実に育むために「指導に生かす評価」を重視し、授業の中で繰り返し評価場面を設定した。授業中に行う即時のフィードバックと、授業後に児童の成果物を見取り、次時の中で足りなかった部分を補うことで、評価を指導に生かすことができるようにした。

「記録に残す評価」については、「指導に生かす評価」の結果を踏まえながら、どの時間において何を見取るかを整理した。本時においては、【思考・判断・表現②】を重点として設定した。本時の目標「販売の仕事の工夫について、消費者と販売者の双方の視点に立って考え、そのよさについて多角的に捉えることができる。」を踏まえ、まとめにおいて「消費者と販売者の視点から200%保証を行う意味やよさについて記述できている」ものを「おおむね満足できる」状況と判断されるものとした。

(3) 成果と課題

①成果

- ・今回、+ONE の資料として取り上げた「200%保証」は、児童に既習内容とのずれや疑問を生み出す効果的な題材であった。
- ・3年生部会では、本実践の「まとめる」段階を2時間構成とした。学習問題に対する答えをしっかりとまとめておくことが、本時における理解の深まりにつながった。学年の発達段階的にも、「まとめる」段階を2時間扱いにすることは適切だった。

②課題

- ・本時の思考・判断・表現の評価規準は「②地域に見られる販売の仕事と地域の人々の生活との関連を考え、適切に表現している。」であった。本時の評価は、これを見取るのに最適な場面であったか。教科書等の学習計画にない実践を加えて行うのであれば、評価規準もそれに照らして設定したり、具体化したりするなど、検討が必要であった。
- ・目標未達成の児童についていかなる手立てを打つか、指導案上などに位置付けておく。

(4) 本時の指導案

過程	児童の学習活動	教師の関わり	★研究との関連 ※学習評価
問いをもつ 10分	1 前時「まとめる」のふり返り お店の人は、多くの人々に買い物をしてもらうために、お客さんのことを考えたさまざまな工夫をし、売上を高めている。 2 「200%保証」について知る。 3 本時の問いの把握 「商品も交換して、お金も返したら、売り上げが減っちゃうよ」「どうして売り上げが減るようなことをしているのだろう」 【問い】お店はそんなしずなのに、なぜ200%ほしうするのだろう？	学習問題に対するまとめを想起させる。 教材の提示 「200%保証」 「売り上げを伸ばすために」という部分に揺さぶりをかける。	
学び合う 25分	4 お客さんの視点から200%保証の良いところを見付ける。 「お客さんは安心して買い物ができる」 「お店を信頼できる」 5 お店側の視点に立って、200%保証の良さを予想する。 「申し訳ない気持ち」 「また来てもらえるように」 6 インタビュー動画から、お店側の視点から200%保証の良いところを見付ける。 「いい対応で喜んでもらったら、お客さんはまた来てくれるかもしれない」 「お店の人は気を付けてチェックしようと思うのではないか」 7 お客さん側の良いところとお店側の良いところがつながっていることを確認する。 「信頼を得ることで、また来てくれるお客さんが増えるんだ」 「未来の売上を高めているんだ」	資料提示 「お客さんの声」(インタビュー・黒板掲示) 資料提示 「店長さんへのインタビュー動画」	旭社「まとめる・生かす」の充実
振り返る 10分	8 本時の問いに対する自分のまとめ 【まとめ】(例) 200%保証は、お客さんの願いとお店のことを考えて、未来の売上を高めている。 9 学習の振り返り 振り返りの視点 ・自分がお店の人だったら・驚いたこと・もっと知りたいこと		★道社子どもの変容を生む単元構成 旭社「まとめる・生かす」の充実 ※屈(ノート)

第3学年分科会 責任提案

上川地区 単元名「店ではたらく人と仕事」

提案者・提案者 吉澤 康伸（比布町立比布中央学校）



（１）提言の主張点

上川地区社会科教育連盟では、「社会とつながり、自ら考える子どもの育成」を研究主題として設定し、「子どもたちにどのような力を育むべきか」「私たち社会科教師は、どのような授業をするべきか」について、授業を通した実践的な研究を進めている。本実践では、「自ら考える子どもの育成」を「主体的に学びを進める子どもの育成」と捉え、子どもが主体的に学習を進めることができることを重視した。本提言では、本連盟の研究副主題「見方・考え方を豊かにし、子ども主体の単元をデザインする社会科授業」について、①単元の学習問題の設定、②子どもたちの学び方、③選択・判断し、自分の考えをもつ場面、④社会的事象の意味をつなぐ場面、以上4点を意識した授業づくりについて紹介する。

（２）研究の概要

【研究の柱１ 単元の学習問題の設定】

家の人の買い物アンケートを行うことにより、よく行くお店、なぜそのお店に行くのか、お店を選ぶポイントは何かなど、買い物の仕方について気付くことができた。比布町の人口が減っていることと、町内のダマルシェというスーパーが売り上げを伸ばしていることを確認したところで、子どもたちから疑問の声が多く上がった。そこで、子どもたちの疑問の声をもとにして「比布の人口は減っているのに、なぜダマルシェは売り上げを伸ばしているのだろうか」という問いを設定した。

【研究の柱２ 子どもたちの学び方】

見通しをもって学ぶことができるように、学びを確認、実感できたり、学びのつながりに気付いたりすることができるように、子どもたちに大まかな単元の流れを示した。見通しをもたせることにより、ふり返りで学びを確認・実感させること、学びのつながりに気付かせることができた。

【研究の柱３ 選択・判断し、自分の考えをもつ場面】

自分で学びを進められる子どもの育成に向けた手立てとして、追究場面での学習の複線化を図り、子どもが自分の考えをもつ場面を設定した。１回目のお店見学では、これから調べてみたいお店の工夫を個人で見付けた。その後、全体で交流することで、他にはどのような視点があるのかを確認した。２回目の見学は、調べたお店の工夫の意味が正しいのかを確認するために行った。こちらから視点を与えるのではなく、子ども自身が家の人のアンケート結果や自分の考えをもとにしながら、調べてみたい工夫を決めて、その工夫の意味を考えることができた。

【研究の柱４ 社会的事象の意味をつなぐ場面】

子ども自身が学びを確認できることや学びを実感できること、他の人や単元全体と、さらには自分の生活と学びのつながりを意識できることを大切にしたい。お客さんの願いとお店がしている工夫をつなげて考えることで、売り上げを上げる工夫はお客さんの願いに応えていることに気付くことができた。また、友達の考えも加えることで、より説得力のあるまとめを書くことができた。

(3) 成果と課題

成果 ①研究の柱を意識した授業づくりを進めることにより、自分で学びを進められる子どもの育成に向けた授業づくりを進めることができた。

課題 ①子どもたちの知りたい、調べたいという気持ちと、身に付けさせるべき資質・能力のバランスのとり方を考えることが必要である。

②単元のまとめで、学んだことをどのように結び付けて表現できるのかが大切である。そのためにも、単元の見通しをもたせて学びを進めることが重要であると考える。

(4) 本時の指導案

[illegible]

ダマルシェの売り上げを上げるための工夫をまとめてよう！

●棚物ごとにならべてあるものは
目で見て購買ののりもある
し、さわって確かめたいとある
ようなしずくはやはりあるのだ
ベクトルと力の大きさのしずくも
あるからいっぱい買うときに
すこくべんりだし選べるから
でいいし

えらべてべんり
さすか！ダマルシェ

①ダマルシェの工夫をまとめて
わかったこと、感じたこと
お客さん願いをダマルシェは、全部
取りそろえているだから人口は、
へっているのに売り上げは、上がっ
ているんじゃないかな

[illegible]

1人ぐらしの生活おこしくなり
すい牛のやうにのびやか



第3学年 責任提案 分科会 記録

司会者 中田 充（札幌市立山鼻小学校 教諭）
提言者 旭川市教育研究会社会科学研究部
河野 翼（旭川市立朝日小学校 教諭）
七条 京汰（旭川市立豊岡小学校 教諭）
上川地区社会科教育連盟
吉澤 康信（比布町立比布中央学校 教諭）
助言者 三浦 聡（札幌市立琴似小学校 校長）
米谷 広美（北海道教育庁学校教育局義務教育課 主任指導主事）
記録者 市川 恭史（札幌市立太平小学校 教諭）



<討議の柱>

「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」を実現するために、どのような授業づくりを行ったのか

2 地区の実践から

旭川地区は第3学年「店で働く人」の実践である。単元のはじめである「つかむ」段階では、「家の人は、どのような店で買い物しているのだろう。」と問うことで、消費者の視点に着目できるようにした。子どもたちは家族へのインタビュー活動を通して、消費者が買い物をするときにはどんなことを望んでいるのか、その願いに気付くことができた。それを踏まえ、今度は「お店の人は、お客さんに来てもらうために何かしているのかな。」と問い、販売者の視点について考えを促すことで「スーパーマーケットで働く人は、多くの人々に買い物をしてもらうために、どのような工夫をしているのだろうか。」という単元の学習問題を設定した。「まとめる」段階では、スーパーマーケットで行われている200%保証という取組を教材化した。200%保証を行うことは、一見すると店側の利益の損失に繋がる。ここに前時までのズレが生まれ、「売上を高める工夫や努力をしているはずなのに、なぜ200%保証を行うのか？」という問いが生まれると考えた。解決の段階では消費者と販売者の双方の視点から考えるようにし、予想の空中戦にならないように既習までの積み上げを意識して、確かな社会認識をもとに社会的事象の意味を考える一単位時間の設定を工夫していた。参会者からも単元での学びを活用しながら未来を志向する学びの価値についての意見が出され、確かな社会認識をもとに未来を志向することの重要性が確認された。

上川地区も同学年同単元での実践である。上川地区にあるダマルシェというスーパーマーケットの取組を学習の中心に置き、学びを進めていった。子どもたちは家庭での買い物アンケートを通して、ダマルシェを普段あまり利用していないことに気付く。また、比布の人口が減ってきていること、その反面ダマルシェは売り上げを伸ばしていることも併せて提示することで、「自分たちはあまり行かないし、比布の人口も減ってきているのに、なぜダマルシェは売り上げを伸ばしているのだろう？」という問いを設定した。さらに単元の中では、学びを自分事とすることを重視するため、お店見学を2回行うという学習展開を設定した。これは社会とつながる、という研究主題を意識した取組であると考えられる。実際に子どもたちは、お店で見たり聞いたりした調べる活動により、消費者の願いとお店の工夫を繋げて考え、売り上げを上げるための工夫について考えをもつ姿が見られた。これらのことから、分科会の中でもお店の2回見学は有効な手立てであったという議論が行われていた。

<旭川地区>

まず、第一に「200%保証」というスーパーの取組を教材化したことに価値がある。「お店は損するはずなのに…」と子どもたちは考え、問いの追究に向かい、お客様第一主義という考えに行き着くのではないかと考える。また、「様々な立場・広い視野で」考えることができる授業であった。今まではお客様に還元するという一面的な捉えで終わりがちな教材化も、時間軸で未来を見ていくという新たな視点に気付くことができる価値のある教材化であったと考える。

その反面、このお店はよいけれど他のお店は…となってしまうのが懸念事項である。そうならないように単元の最後に「ラルズは～だけど、他ではどのような取組をしているのか。」を考える場面があるとよい。そうすることで、「やっぱりいろいろなお店で未来のために工夫しているんだね。」というふうに来志向の考えにもつながり、一般化することもできるのではないかと考える。

<上川地区>

旭川と同じく、教材化が素晴らしい。ダマルシェというスーパーの魅力が十分に発揮されていた授業だった。単元の計画が綿密に成されているからこそ子どもたちは、見通しをもって学習に取り組むことができたのではないかと考える。また、子どもが追究の仕方を選ぶ学び方は、社会科1年生である3年生という発達段階においてもできるということが上川地区の実践からうかがえる。

しかしながら、自分の問いを追究したときに他の人の問いに興味がなくなってしまうことも考えられる。これは個別最適ではない。ここをどうしていくかが今後の研究の課題でもあるのではないかと考える。

<米谷 広美 主任指導主事>

旭川地区に関して

「調べる」では視点を明確にして資料を読んだり、見学に行ったりと多様な方法で情報収集しており、「まとめる」では調べたことを通して得た事実と事実を関連付けて考えるようにしているのが素晴らしい。ただ、「生かす」では何を生かすのかが疑問。得た知識を生かすのか、学び方を生かしたいのか、ここをはっきりさせていくとよりよい研究になる。

上川地区に関して

どんな見方・考え方で考えさせるのかを意識して単元構成を作られているのが素晴らしい。また、社会科という面においても学習活動の複線化というのも有効であったと考える。子どもたちのまとめに甘いと思う所はあるが、教員の発問であったり子どもたち同士がまとめを見合ったりすることで、よりよいものになっていくのではないかと考える。

<三浦 聡 校長>

旭川地区に関して

小学校4年間、中学校3年間の7年間でどのような授業をしていくのが共通理解されているのが旭川の強みと言える。本単元の200%保証は子どもたちにとって魅力のある教材ではあるが、この取組だけでなく、他のお店の良さにも触れているのも素晴らしい。200%保証が、お店が商品にもっている自信ということに気付き、お店の販売の工夫に繋がっていけばよりよいのではないかと考える。

上川地区に関して

子どもの興味・関心を繋ぎ合わせて授業を作っていくという素晴らしい実践である。人口減少という北海道の様々な地域が直面していく社会的課題にも繋がる、面白い取り入れ方だと感じた。どちらの提案も子どもの問いや思考の流れを大切にしたい授業であった。見方・考え方を働かせて資質・能力を育むという基本的な考え方を単元の中に取り入れている実践がより広まって、交流できればよいと考える。

第4学年研究推進委員会 授業記録（6／7時間）

単元名 「地震災害からくらしを守る」

授業者 小沼 明日騎（札幌市立伏見小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	○緊急地震速報の音を流し、家にいるときの行動を確認する。 ・ どうする？ どう行動する？	・ 多くの子が机に隠れる。一部の子は頭を守る。 ・ 「防災センターの人が頭を守るって言ってた。」
23	○冬を想定した地震の条件を伝える。 ・ 震度6強 ・ 午後3時 ・ 水道× 電気× ガス× ・ 2024年1月10日 ○前時までの防災バッグで避難できるか問いかける。 ・ でもSさんは大丈夫なんだよね？ ・ Aさんは逃げられる？ ・ 他の人たちは大丈夫？ みんな、逃げられるんだよね？ ・ みんなは寒い日への対策はバッチリ？ ・ じゃあ、どうしたい？ ・ 今までやってきたみんなの3つの備えをなくして、どれか変えるでいい？ ・ どうしたい？ ・ じゃあプラス2しようか。	・ 「うわー。」 ・ 「冬？」 「雪じゃん。」 「寒い。」 「やだ。」 「これだと体が冷えちゃうよ。」 「う〜ん…。」 「寒すぎて凍死しちゃうかも。」 「-5度だから簡単には死なないんじゃない？」 「でも地震起きたら電気使わずに温めるしかない。」 「いや」 「冬用の防災バッグをつくればいいんじゃない？」 「防災バッグの中身を変えたい。」 「足りないものが出ちゃう。」 「なんで3つなの？」 「増やしたい！」 「10個にしたい！」 「全部で5個！」
寒い日に地震発生！どうする防災バッグ？		
10	○防災バッグの変えた中身を全体で交流する。 ・ 増やしたものの、変えたものを教えてください。	・ 冬に備えた防災バッグの中身を考える 「湯沸しボックス。お湯を沸かすことができる。」 「小林さんのアルミ保温シート。」 「抱き枕。いつも使っているからよく眠れる。」 「寝袋」「発電機」「包丁。食べるときに使える。」 「ゆたんぼ」「カイロ」「ペルチェ素子」「手回し発電機」 「お湯。温かくてカップ麺に使える。」 「温かい食料」 「黒い袋。光が当たると温くなるから。」 「ライター」 「ガスバーナー」「スマホ。情報を集められる。」
20	○備蓄庫の中身とみんなの防災バッグの中身を照らし合わせる。 ・ いっぱい言ってくれたんだけど、これ（黒板にかかれたもの）いらなそうです。 ・ だって、（備蓄庫に）寝袋、あるじゃん。	「え？」 「なんでそんなこと言うの？」 「でもさ、それは全員使えるってわけじゃない。」 「例えば寝袋は妊婦さんやお年寄りとかは、自分で持ってくるのが大変だから、そういう人に優先される、」 「札幌市にはたくさんの方がいるから、自分たちはもらえないかもしれない。」

	・札幌市には何人ぐらいいるんだっけ？ ・315 個が自分のものじゃないかもしれないんだ ・たくさんの人ってどんな人？ ・自分たちのものは自分たちで備えることで？ ・君らが妊婦さんがもらえるかもしれない寝袋を「僕の」ってとったら？ ○夏と冬の被害者の数を紹介する。 ・前ちょっと話したんだけど、札幌市の夏と冬の予想被害者数が出ています。 夏⇒死者 1789 人、避難者 8 万人 ・冬はどれくらいいると思う？ 冬⇒死者 8234 人、避難者 20 万人 ・さっき「え～」って言ったけど、どういうこと？ ○自分の家の備えが十分か問いかける。 ・さっき「自分たち」って言っていたけど、自分たちのおうちの備え、大丈夫？ ・今、外見たら、雪降っている。こんなときに逃げろってなったら、大丈夫？ ・S さんはどう？大丈夫そう？ ・H さんは？	「197 万人。」「たくさんの人。」 「備蓄庫には 315 個しかない。伏見小に避難するのは 600 人以上いるから、300 人がお年寄りや妊婦さんだったら…」 「自分たちが使える確率は少ないから、できる限り自分たちで持って行った方が自分たちでなんとかできる。」 「大人」「障がい者」「赤ちゃん」 ・周りの人が用意されているものを使えるし、自分は自分のものを使える。 「ダメ」「妊婦さんの分がなくなる。」 「でも自分のものを自分で持ってきたら、自分のものを使えばいいから、他の人が使える。」 「ストーブとかも、周りに人が集まっていたら…」 「絶対冬の方が多いよ。」 「死者は 2000 人くらい？」「5000 人」 「え～」 「1 ケタから 2 ケタに上がって、多くなって思った。」 「大丈夫じゃない」「どうしよう」「寝袋しかない」 「うーん」「家がない。」 「地震の備えだったら、親が買ってくれそう。」 「アウトドア用品はあるけど、いざ逃げるとなると…」 「家にはあると思うけど、どこにあるかわからない。」 自分の命を守るために、寒さを想定して対策することが必要だね。また、自分たちで準備をすると、妊婦さんや高齢者など他の人が優先して使うことができるんだね。 ○学習の振り返りを聞く ・今日の学習を振り返る。 「寒さで被害者が増えることがわかった。一人一人が用意しないといけないと思った。」 「冬になると被害者も増える。もし今大地震が起きたら、用意はしていても冬に対しては十分じゃないから不安。できる限り寒さへの対策をしたほうがいい。」 「今余裕があるから考えられるけど、急に来たらなんにもできないんじゃないかと思った。」
4 0		
4 5		

<板書>



第4学年研究推進委員会 授業分科会記録と実践の振り返り

司会者 土岐 友哉 (札幌市立緑丘小学校 教諭)
 授業者 小沼 明日騎 (札幌市立伏見小学校 教諭)
 助言者 青柳 吉乗 (札幌市立北野平小学校 校長)
 吉田 卓矢 (札幌市教育委員会 指導主事)
 記録者 奥泉 峻 (札幌市立真駒内桜山小学校 教諭)



防災バッグの教材化について

防災バッグを教材化するのは社会参画につながっていたのか。具体的なシミュレーションで考えていくのはよかった。数だけではなく、重さを考える必要もあるのではないかな。実際に持たせて、数を子どもに決めさせる方法もあったのではないかな。また、なんのためという目的意識や誰のためという相手意識を話し合うことができれば、自助、共助、公助といった既習を生かして根拠を話し合うことができ、よかったのではないかな。

寒い日の災害の教材化について

寒い日というシチュエーションを子どもたちが考えられていたのか。スキーウェアを着ないと凍え死んでしまうというような状況を理解できていない様子だった。また、夏の死者数と比べて4倍になっている事実を先に提示するともっと冬に向いたのかもしれない。

また、暖房器具での火災もあるため、温かい物の備えだけでよかったのか。

未来志向に迫る一時間

自助を考えることで、社会参画につながっていた。共助につながる発言があってよかった。また、子どもの振り返りを見ると、冬に向けて備えて行きたいとあった。ただ、抑えるところは自助、共助、公助だと思うが、何をもって、社会参画で価値創造なのかわからなかった。

中身を考えるときに、大事なものは、なんのため？誰のため？と考えることではないかな。今日は寒いときどうする？なんのために考えれば、理由を話し合う。暑いときにどうする？しかも、減らすわけにはいかないから、誰かのために用意できれば親切で社会参画に関わっていけるのではないかな。そういう部分が自分事に関わってくると考える。

助言者より

<吉田 卓矢 指導主事>

未来志向に向かう子どもの姿を狙ったのではないかと思います。学習指導要領にもあるので、今日の活動については、一つの重要なピースだった。しかし、重要なのは、学習したことをもとに選択判断すること。この單元だと、関係機関の相互の連携、公助と共助、そのような視点をもった上で選択判断をしていかなければいけないと感じる。このように考えると防災バッグの中身でよかったのか考えていく必要がある。また、今 ICT を活用しているので、ICT で書いたことを見ているのであれば、なんで寝袋なのって聞いたときに、「いや、避難所へ行けばあるのだけど、全員分ないから、みんなが使えるように自分は寝袋入れるんだ」など、自助、共助、公助の視点で考えた理由が出たり、自助で考えた理由が出たりし、それが位置づいてくると、いろいろなものが出たときにその視点でまた見られるのかなと思う。

この單元で一体どんな姿を狙っていたのかと考えると、途中で防災グッズを選ぶような活動も、本当に繋がった流れになっているのかと見直していく必要があると感じている。学習を基に選択判断するためには、社会認識を深めていくことが非常に重要。防災バッグって何のために、いつ、どう持

っていくのか全然違う。それから避難することの意味、あの防災バッグ持ってあの子たちどこに行こうとしているのか、一步一步シミュレーションの状況を設定するってことはすごくいいかもしれないが、難しさもあるので、しっかり押さえていくことは重要なのかなと思う。

＜青柳 吉乗 校長＞

本時の中核、実際に今の自分たちの備えはどうだったんだろうっていうところが、未来志向に迫るものとして意図的に設定したものである。この言葉の文言を言い換えると、本当にこれで大丈夫かという妥当性を問うていた場面だったと思う。もう大丈夫だと思ったのに、これで安心だと思ったのに、本当にこれで大丈夫なのかっていったものだったと思った。しかし、自分たちの蓄えは大丈夫、どうするという投げかけになっていて、ぼんやりしてはっきりしなかった。そこをシャープなものにするためにはどうしたらいいのかと思った。先ほど命を守るためには、一番大切なものは何だろうかっていう問いかけもあっただろうし、または小林さんが今日いっちゃうのであれば、直接ここで子どもの追究の方向性を示唆していただくことも考えられた。

今回の単元の流れは、順接的な流れだった。矛盾とか、対立、葛藤とかジレンマ、予想との大きなギャップがあって、逆説的な問い、展開が連続するわけではない。でも、切実な問題意識から自分の予想を元に調べて計画を立てて進めていく順接的な流れの中で丁寧に事実認識を積み重ねていた。子どもの発言では、自分の家の蓄えを振り返って5つを取捨選択する姿や小林さんのアルミシートっていう発言もあった。「ほら、小林さんのあのときの話をちょっと思い起こしてみよう」ということで事実認識をまた確かなものにするという方法もあった。

後半、たくさんの人とか妊婦さん、お年寄り、大人、赤ちゃんって言った立場を明確にして交通整理していた。視点だけではなくて立場も明確にしながら構造化を図ろうとしていた授業であったと思う。これは、多角的な捉え方に繋がる姿だと思うし、5年生で求められる多角的に考える姿にも繋がっていたと思う。

実践の振り返り 授業者 小沼 明日騎（札幌市立伏見小学校）

未来志向をテーマに、今年から新しい研究がスタートしました。どのような授業が未来志向へと繋がるのか、今までの授業のスタイルでよいのかといった様々な葛藤や悩みを抱えつつ授業作りを進めてきました。

結論から申し上げますと、今回の授業を行ったことは大変自分にとって勉強になりましたし、有意義なものになりました。自分がこのような研究の1年目に授業者として授業をさせていただいたことにとっても感謝しています。なぜなら、この防災の授業が「社会参画」を通して「社会認識」を深められる実践であったからです。これまでの杜連の授業として「～のはずなのに、なぜ」という発問からスタートするというものがありましたが、それにプラスできうる授業の構造の可能性のある実践でした。今までの授業の在り方を変えるという大きな決断で、「本当によいのか？」と何度も話し合い、迷いましたが、今ではとてもよかったと感じています。

また、改めて単元の大切さを学んだ実践となりました。観てもらう時間は本時の1時間ですが、それまでどう既習を積み上げていくのか、何を習得しておくことで本時に生き生きとした子どもたちの姿を見せられるのかといったことを考えてきました。まだまだ不十分な点が多々ありますが、本時の中で子どもたちが盛り上がる瞬間もあり、それは既習を生かすことができたからだと感じています。教師の関わりでは未熟な点をたくさんご指摘していただいたので、今後に生かし精進していきたいです。

第4学年分科会 責任提案

釧路地区 単元名「地域で受けつがれてきたもの」

提案者 今野 諒（釧路市立釧路小学校）

授業者 幾島 佑哉（釧路市立釧路小学校）



（１）提言の主張点

釧路地区小学校部会では、道社連新3か年の研究提案を受け、「価値ある追究を生む、意味のある『教材化』」「使える知識が結びつく『単元構成』」「協働的で、理解が深まる『本時の授業』」の3つの視点で研究を進めている。視点においては、前年度までの研究から大きな変更はせず、「地域における具体的人物の営みや企業等の取組など、社会への貢献や新たな価値の創造等が見られる教材の開発」、

「問いの質の向上と単元構想図を活用した、確かな社会認識を育む単元構成」、「『社会認識を深める1時間』と『社会参画につながる新たな価値を創造する1時間』の分析」に重点をおき実践を行った。

（２）研究の概要

【研究の柱1 価値ある追究を生む、意味のある「教材化」】

釧路地区では、地域における具体的人物の営みや企業の取組など、社会的事象の意味の先に、社会への貢献や新たな価値の創造等が見られる地域教材の開発に力を入れてきた。今回は、実践校の校区内にあり、220年以上の歴史がある釧路巖島神社夏季例大祭の教材化を行った。教材化においては、祭りの担い手不足、協力者の高齢化などの様々な課題がある中、伝統を大切にしながらも時代に合せて新たな取組を行っている権禰宜の菊池吉史さん、警備を中心に祭りを支えている釧路あすなろクラブの方々の営みを取り上げた。

【研究の柱2 使える知識が結びつく「単元構成」】

単元において、学習問題の質の向上（事実的知識を求める問い→概念的知識を求める問い→価値的知識を求める問い）を図ることで、理解の質を高め確かな認識へとつなげること、また「見方・考え方の活用」「獲得する知識」「問題意識や思考の流れ」「学習問題の位置付けや深まり」などの関連を明確にするため単元構想図を作成している。今回は、単元を3部構成とし、確かな知識・技能を習得する序盤、学習問題を多面・多角的に捉え自分事として捉えなおす中盤、課題解決の手立てを意思決定していく中で社会参画につながる終盤と設定した。事実追究を通して確かな知識を積み重ね、既習の事実認識とずれを生む発問から論理追究の時間を設定し、自分にできることを選択・判断し意思決定する単元構成とした。

【研究の柱3 協働的で、理解が深まる「本時の授業」】

釧路地区では、「協働思考の必要性を生む『問い』」、「集団での学びを深める教師の関わり」、「個による学びの再構成」を視点におき、本時の授業づくりに取り組んでいる。事実追究や論理追究を通して、「夏季例大祭をこれからも残したい」という思いが高まった児童は、自分たちにできることとして「願いを伝える」ことを設定した。本時においては、「例大祭を続けるためには、どの願いを大切にすればよいのだろう」と課題設定し、子どもたちが伝えたい願いを明確にもつことをねらいとし活動を行った。

(3) 成果と課題

魅力ある地域人材との交流や校区内という身近な神社の伝統行事を学ぶことを通して、自分事として例大祭を残すための方法を考え発信する姿が見られた。学びに向かう姿勢や意欲の高まり、児童の作成物等から社会参画の基礎となる部分は養われたのではないかと考える。

課題としては、「願いを伝える」ことを設定したことで、児童が価値創造をする際の幅を狭めてしまったのではないかと考える。今後も、「社会参画につながる新たな価値を創造する1時間」における研究を進めていきたい。

(4) 本時の指導案

本時の目標

夏季例大祭をこれからも続けていくために、自分が伝えたい願いとその理由を交流を通して選択・判断し、明確に
もつことができる。【思・判・表】

本時の展開（9/12）

過程

主な学習活動

- ①前時を振り返り、新たな学習問題に気付く。

問題 これからも夏季例大祭を続けていくために、
自分たちには何ができるだろう。

- ②単元計画を振り返り、本時の課題をもつ。

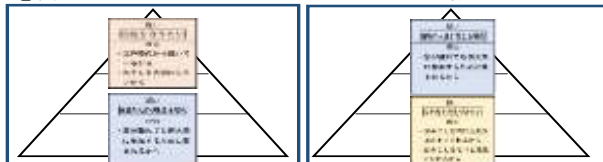
課題 夏季例大祭を続けていくために、どの願いを大切にすればいいだろう。

- ③夏季例大祭に込められていた願いを確認し、自分が大切に
にしたい願いとその理由を決める。

- ・安心、安全、大漁の願い
- ・人や町を元気づけたいという願い
- ・伝統を守りたいという願い
- ・地域の人達が集まる場所を残したいという願い
- ・楽しめ残したいという願い

願い
伝統を守りたい
理由
・江戸時代から続
いているから
・れきしを大切に
したいから

- ④交流活動を通して、自分が大切にしたい願いを決める。



- ⑤同じ願いでグループを作り、大切にしたい理由を話し合う。



- ⑥それぞれの願いに対する理由を菊池さんに発表する。

- ⑦本時を振り返り、次時への見通しをもつ。

誰に(相手意識) **何を(願い)** どのように(具体的手段)

作る→伝える

教師のかかわり◇評価

- ・前時の板書を振り返り、新たな学習問題を立てたことに気付かせる。

- ・単元計画を振り返る中で、前時に出た「願いを伝える」という言葉に着目させることで、本時の課題に気付かせる。

- ・ゴールの姿を提示することで、自分が伝えたい願いを明確にもつ必要性に気付かせ、本時の活動へ意欲をもたせる。

- ・例を提示して、活動の見通しをもたせる。
- ・これまで学習で活用してきた写真資料や板書を参照させ、自分なりの理由をもたせる。

- ・机間巡視を行い、活動に困り感のある児童には助言や例示を行う。

- ・ピラミッドチャートを活用することで様々な情報の中から、自分の中で大切にしたい願いを整理させる。また、思考の変容が分かるように、完成したチャートをロイロの提出箱に出させる。

- ・交流活動では、自分のカードを相手に送らせることで、自分の意見を深めたり、広げたりできるようにする。

- ・交流を通して最終的に自分が大切にしたい願いを選択・判断させる。

- ・同じ願い同士が一つのクラゲチャートを使用することで、自身の理由を深められるようにする。

- ・神主の菊池さんに机間巡視をしていただき、適宜助言をもらうことで、大切にしたい願いを理由をより深める

- ◇夏季例大祭をこれからも続けていくために、自分が伝えたい願いとその理由を交流を通して選択・判断し、明確にしている。
【思・判・表】(発言・タブレット・ノート)
・最終決定したピラミッドチャートと本時の振り返りをロイロで提出させることで、本時の振り返りを視覚化する。
- ・単元計画に立ち戻り、今後の見通しをもたせることで、次時への意欲につなげる。

第4・6学年分科会 責任提案

札幌地区 「研修部会の取組について」

6年提案者 似内 心悟（札幌市立太平南小学校）

4年提案者 木田 孝紀（札幌市立桑園小学校）



（1）提言の主張点

令和5年度より、札幌市社連の研究組織に『研修部会』が位置付いた。部会発足のきっかけとなったキーワードが、「若手会員の減少」「持続可能な社連」である。私たち札幌市社連は、10年後、20年後も今と変わらずいるために、変わり続けようと考えた。研修部会発足のねらいには、「育てる」側面と「広める」側面がある。「育てる」と言っても、誰かに育ててもらおうという受け身の姿勢ではなく、自ら主体的に学んでいく社連伝統の姿を大切に、未来の社連を支える人材を育てる研修を目指している。また、「広める」側面では、研修で培った成果をフィードバックし、社連会員としての自覚をもってセミナー等で発表を行う。社連会員外の先生にも広めることで新規会員獲得もねらっている。

（2）研修の概要

【研修テーマ1 板書型指導案の検討・作成と活用法】

板書型指導案は、道連研究出版部が作成の中心となっているが、今年度は研修部会とコラボして活動することを承諾していただいた。書籍版だった指導案も電子版となり、札幌市社会科教育連盟 HP よりダウンロードが可能となった。スピード感をもって「広められる」こと、そして受け取った側が自由に編集し、指導案を「育てる」ことができるのも電子版への変更の大きな魅力となっている。毎回の研修部会では、研究出版部員が提出したたたき台の指導案について、研修部員と検討をしたり、活用法を考えたりしてきた。仕事の効率化と各自のスキルアップが期待できる研修である。

【研修テーマ2 研究の土台の強化】

道連研究部長の河原先生の提言にもあったように、我々が目指す研究には、それを支える土台が必要不可欠である。学級風土や学びのルール、教師の授業力、研究の進め方、他にも挙げればきりがないだろう。授業づくり部会は、決められた時間の中で教材研究をし、教材化し、提案準備をし・・・となかなか土台の部分に時間をかけて語り合うことは難しい。そこで研修部会では、若手部員を中心に研究の土台に関わる悩みについて、先輩部員と一緒に研修を深めてきた。先輩部員も「自分なら」と案を出すことで自分を磨き、若手部員はそれを吸収しながら「自分も試す」ことを続けてきた。これからの社連を支える人材を育てるという命題のもと、先輩も若手も育つことが期待できる研修である。

【研修テーマ3 新しい授業の創造】

第1回研修部会の際、「どんな研修をしていきたいか」を部員と話し合った。その時に部員から出たのが、「新しい授業の形を創っていきたい」という熱い思いである。様々なことが目まぐるしく変容していく今、常に授業も新しい形に、これまでの伝統を生かしながら進化させていきたいという思いで始まった。仮説を立て、実際に自分の学級で実践し、データとしてまとめ、成果と課題を見つめ、次に生かしていく。それを続けてきた研修部員は、まさに自分を「育て」、それを「広める」努力をしてきた。いつも時代と子どものことを一番に考えてきた社連らしい研修である。

（３）成果と課題

11月24日に行われた北海道大会の責任提案の場でも伝えさせていただいたが、研修部会のこの1年の取組は非常に大きな成果を得たと考える。「育てる」側面と、「広める」側面から見ていくと、「育てる」側面では、部員一人一人が受け身ではなく、自らを鍛え、研修から多くのことを学んだ。そして学んだことは、しっかりと子どもたちに還元されていると言える。「広める」側面では、下記にあるセミナーにて、研修部会の取組を発表し、会員のみなさんと研修部の考えを共有することができた。参加した会員からは、「参加して良かった」「とても勉強になった」との声をいただいた。課題を挙げるなら、今年度は「会員」への呼びかけに留まったため、「会員外」への広まりには至らなかった。会員新規獲得の命題を考えると、来年度は会員外への呼びかけも自信をもって行いたい。

（４）12月13日に行われた研修部会セミナーの様子

【研修テーマ1 板書型指導案の検討・作成と活用法】

セミナー参加の会員に、電子版板書型指導案「明治の国づくりを進めた人々」・「火事からくらしを守る」の紹介と、活用法について発表した。Word形式の指導案データは、自由に編集ができるので学級の実態や教材研究に合わせてカスタムしていったほしいことを伝えた。板書型指導案のフォーマットが使えるので、自校の研究や参観授業の指導案、研修などにも役立てていけるものである。来年度も研究出版部とのコラボをお願いし、板書型指導案と一緒に作成する研修を充実していく。



【研修テーマ2 研究の土台の強化】

資料の読みとりや全体交流の進め方、毎時間の振り返りのさせ方に悩みをもっていた若手部員が、研修部会で学んだことを学級で実践し、どんどん児童が変容していく様子を発表した。児童の変容だけではなく、教師自身も変容していったんだということに気付かせてくれるのも発表のよさである。悩みや四苦八苦は教師にとって必要なことで、たくさんを経験し、経験の質を高めていくことが、研究の土台を強化する上で重要であることを学んだ。

【研修テーマ3 新しい授業の創造】

「ICTの効果的な活用」と「個別最適な学びと協働的な学びの一体」を意識した授業実践を発表した。自分の学級で進めた取組を丁寧にデータとして整理し分析することで、たくさんのよさが見えた。「個の追究」をさせるときの注意点や、「個の追究を発揮する一時間の問い」の吟味については、参加した会員から多くの反響をいただいた。札幌市では来年度よりAARサイクルを意識した課題探究的な学びを推進していくため、今回の研修内容は継続して研鑽していきたいと考える。



第4学年分科会 責任提案

札幌地区 「人材育成・組織活性化プロジェクト」

提案者 菅野 智広（札幌市立星置東小学校）

提案者 野崎 猛（札幌市立八軒小学校）



（１）提言の主張点

～「継承」と「貢献」をコンセプトに、これからの教育を担う人材を育てる～

これからの教育を担う人材育成のため、また、学校組織の活性化に求められる資質・能力の向上を目指し、札幌市社会科教育連盟では、「人材育成・組織活性化プロジェクト」を立ち上げている。

これまで本連盟が担ってきた人材育成、人づくり、関係づくりを「継承」とともに、これからの次代、未来を思い描き、今後の教育、学校を担う人を育てることに「貢献」することをねらいとしている。本連盟が紡いできた歴史と伝統を受け継ぎ、謙虚で情熱にあふれた人材を育てることを目指している。

（２）提言の概要

【今年度の本プロジェクトのメンバー】

リーダー１名（校長）、サブリーダー２名（教頭）、メンバー４８名（教頭２２名、主幹教諭７名、担任外および担任１９名のプロジェクト）の合計５１名により構成されている。

【本プロジェクトの目的およびコンセプト】

管理職の担い手不足が喫緊の課題となっている今日において、これからの学校教育を担う人材育成のため、また、学校組織の活性化に求められる資質・能力の向上を目指している。上記の主張点のとおりに、「継承」と「貢献」をコンセプトに、これまで本連盟が担ってきた人づくり、関係づくりを継承し、今後の教育、学校を担う人を育てることに貢献することを目指している。

【今年度の具体的な取組】

①本連盟役員による提言および質疑応答

管理職としての経験が豊富な本連盟役員から提言をいただき、「自分ならどうするか」事例研究の形式により質疑応答を行う。講義によるインプット形式ではなく、事例研究形式に質疑応答を加えることにより、参加者がより主体的に事例を捉えることをねらいとしている。

②参加者が抱える学校課題に向けたアイディアの交流

参加者それぞれが抱える学校課題の解決につながるヒントが得られるよう、意図的に小グループを組織し、交流する時間を設定する。解決が難しい課題に対しても、解決に近付くための様々な視点からのアプローチの方法についてディスカッションすることをねらっている。

③個別サポート、懇親会による関係づくり

コロナ禍による会員同士の関係の希薄さを解消することを目指している。直接的な会話による温かい関係づくりにより、本連盟への所属意識を高めることを目指している。

(3) 成果と課題

今年度は、令和5年9月23日(土)に札幌市中央区民センターにて、第1回本プロジェクトを開催した。講師に松尾則明氏(本連盟副委員長・札幌市立清田南小学校校長)をお招きし、「自分ならどうする～ピンチをどう乗り切るか～これからの管理職に期待すること」をテーマに提言をいただいた。

15名の参加があり、経験豊富な松尾氏の話から、充実した事例研究と質疑応答を行うことができた。自分ならどう判断するかを熟考する機会になり、参会者からは、「根拠をもって決断することの大切さを学んだ」「管理職としての責任と覚悟の重みを学んだ」などの声が聞かれた。

また、危機管理とその対応について学ぶことにより、あらためて、問題解決的な学習の大切さを再認識することにつながった。現在、学校課題も複雑化、多様化し、対応に苦慮する、または、解決策がなかなか見つからないということがあるが、本連盟が大切に紡いできた問題解決的な学習による思考手段は、このような時代だからこそ、私たちにも求められていることを実感している。問題の本質(主訴)を的確に捉え、物事を多面的・多角的に考え、チームで最善の解を創出し、誠意をもって対応することが大切である。今後も、子どものことを最優先に考えて行動できる、謙虚で情熱にあふれた人材を育てるべく、本プロジェクトの活動を進めてまいりたい。

第2回は、令和5年12月9日に前回同様、札幌市中央区民センターで開催する。講師に山本秀夫氏(本連盟副委員長・札幌市立真栄小学校校長)をお招きし、「授業づくりを軸とした人材育成・組織の活性化の取組」と題し、提言をいただく予定である。

(4) 本プロジェクトの開催の様子



(第1回プロジェクトの様子)

第4学年 責任提案 分科会 記録

司会者 土岐 友哉（札幌市立緑丘小学校 教諭）
提言者 釧路地方社会科教育研究会
幾島 佑哉（釧路市立釧路小学校 教諭）
今野 諒（釧路市立釧路小学校 教諭）
札幌市社会科教育連盟 研修部会
木田 孝紀（札幌市立桑園小学校 教諭）
札幌市社会科教育連盟人材育成・組織活性化プロジェクト
菅野 智広（札幌市立星置東小学校 校長）
野崎 猛（札幌市立八軒小学校 教頭）
助言者 青柳 吉乗（札幌市立北野平小学校 校長）
吉田 卓矢（札幌市教育委員会学校教育部 指導主事）
記録者 高田 雄平（札幌市立八軒西小学校 教諭）



<討議の柱>

「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」を実現するために、どのような授業づくりを行ったのか

釧路地区の実践から

釧路地区は第4学年「地域で受けつがれてきたもの」の実践を基にして研究提案を行った。本実践では、釧路厳島神社夏季例大祭を取り上げた。220年間続く例大祭は、児童にとって身近な祭りである。新型感染症や、参加者の減少、釧路市の現状といった様々な問題に直面する中で、未来へ伝統を守り受け継いでいくための宮司さんの活動や、60年間、祭りを支えている団体の会長さんの営みに目を向けることで、社会認識のみならず、社会参画の視点をもち学習に取り組む子どもたちの姿が見られた。釧路地区の行事について調べ、予想をする中で醸成された「なぜ、厳島神社例大祭が220年も続いてきたのだろうか？」という単元の学習問題について、子どもたちは「昔の様子」「祭りの起源」「神輿について」「祭りに参加することの意義」といった疑問をもった。子どもたちの主体的な問題解決を重視する視点から、それらの疑問を学習計画に位置付けて実践を進めた。「なぜ・どうして」を大切に、確かな社会認識を育む「社会認識を深めるための1時間」と「どのように・どちらが・どうすれば」を大切に、社会参画の視点を育む「社会参画につながる新たな価値を創造する1時間」を設定した。夏季例大祭が抱える課題を児童と確認し、「なぜ、宮司さんたちは祭りを続けていく努力をしているのか。」ということについて追究することで、社会認識を深めた。その後、子どもたちに、自分たちができる取組について考える時間を保証した。その結果、「例大祭に込められた願いを伝えていく」という視点が育まれ、具体的にどのような願いをどのように発信していけばよいかということに思いを馳せる子どもたちの姿が見られた。

札幌地区研修部会の取組から

今年度から発足した新しい部会である。研修部には、大きく2つのねらいがあり、1つ目は、学級経営や授業づくりの方法について共有し、これからの社連を背負う人材を「育てる」ことである。2つ目は、研修部員自身が学んだことをセミナーで発表し、自らを鍛えるとともに新しい社会科の学びについて「広める」ことである。このセミナーに会員外の先生方を呼ぶことで新規会員の獲得にもつなげていく。今年度は3つの活動を行った。板書型指導案の作成、研究の土台強化としての若手の先生方を交えた研修会、新しい授業の創造である。今回の提案では、新しい授業の創造について説明する。発足1年目ということで、単元の大まかなデザインを考えることに注力して活動を行った。研修

人材育成・活性化
プロジェクトから

部会の中で大切にしているポイントは3点ある。1点目は個別の学習計画を立てること。2つ目は、個別の学習計画に沿った個の追究時間を確保すること。3つ目は、個の追究を生かし、学級全体で1つの問いについて考える、個の追究を発揮する1時間の設定である。

本プロジェクトでは、管理職の担い手不足を背景とした管理職の人材育成、学校組織の活性化に求められる資質能力の向上を目的としている。具体的な取組として、1つ目は、自分ならどうするといった視点を持ち事例検討を通じた社連役員による提言および質疑応答を行うこと。2つ目は、グループで討議を行い、アイデアを出し合うことで参加者が抱える学校課題の解決に向けた交流を行うこと。そしてこれまで社連が大切にしてきた個別のサポートと、懇親会による関係作りの4つである。今年度実際に行われた提言の内容としては、2018年9月6日に起きた胆振東部地震の日に、修学旅行に引率していた校長先生の事例を参考に、自分の学校だったらどのような対応をするか、そのような際の危機管理を学校組織としてどう考えておくのかということについて具体的に話し合った。15名の参加があった。担任、管理職と立場が変わったとしても、目の前の課題について自分なりに考え、答えを出すということ、問題解決的な学習の大切さは変わらない。

助言者より

〈吉田 卓矢 指導主事〉

釧路地区に関して

社会科は、単元の学習問題が設定され、子どもが見通しをもつことが大切である。それがなければ主体的な学びは生まれない。単元を通して、事実認識を積み上げることが必要。そうすると子どもたちは自分の立ち位置が見えてくる。単元後半の学習で無茶を言うということは事実認識が甘いということになる。

研修部に関して

個別最適な学びと協働的な学び、キーワードがたくさんある。しかし求めていることは方法論ではなく、資質・能力を身に付けることである。研修部と授業づくり部会が協力していくことが大切であると感じた。

人材育成プロジェクトに関して

学校現場の課題がよく見える。大切なことは問題がどこにあるかと、それを解決するための計画がどれだけ出せるかということ。教育観のアップデートが大切。日々それにチャレンジする社連の先生方が素晴らしい。

〈青柳 吉乗 校長〉

釧路地区に関して

魅力ある具体的な人物、価値ある教材の発掘をされていると感じる。社会参画のきっかけになるような提案性のある実践であった。「なぜ、宮司さんたちは祭りを続けていく努力をしているのか。」という問いを醸成する場面では、より具体的な人物の苦労に焦点を当てていくと、子どもたちの中に問いが醸成されたと感じた。

研修部について

常に変化する世の中に対応する素晴らしい取組である。会議の中で、参加者が主体的・計画的に参加していると感じた。新しい授業の形について、大切なのは個の追究を発揮するときに、一人一人が比較・関連・総合させて考えられるかであり、教師がその場を保証することである。

人材育成プロジェクトに関して

社連の役員の経験豊富な知識を広めていき、学ばせていただく機会として大変貴重である。研修内容や研修方法も工夫されていて素晴らしいと感じた。

第5学年研究推進委員会 授業記録（4／7時間）

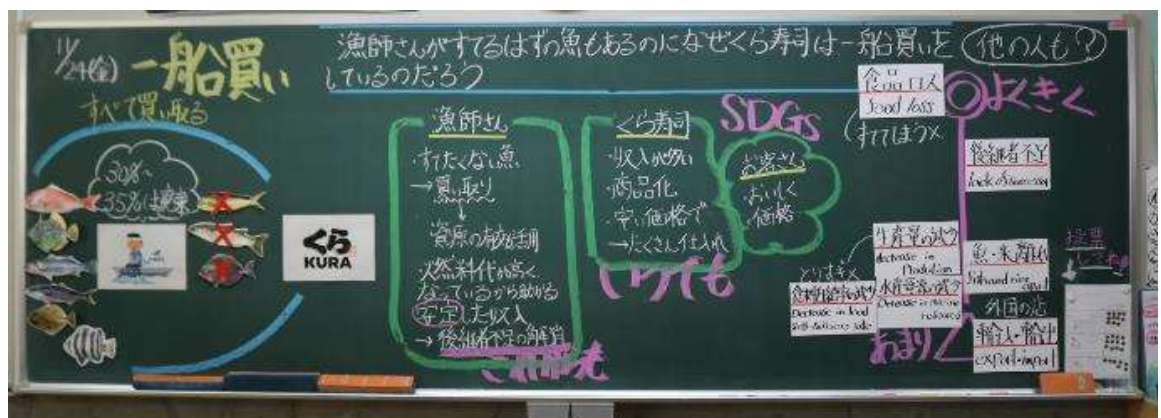
単元名 「これからの食料生産とわたしたち」

授業者 工藤 拓海（札幌市立円山小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	○前時までの学習を想起させ、漁師が約35%の魚を捨てていることを子どもたちと確認する。 ・「シイラは？」「ブリは？」「・・・」 ・この魚たちももったいないよね。	・「これは、もったいない。」 ・「あ～残念だ。」 ・「食べさせてください。」
5	○未利用魚も含めた全ての魚を買い取っているという新たな取組を提示する。 ・この捨てた魚を解決しようとして取り組んでいる人たちがいるんです。 ・くら寿司は漁師さんがとった魚を全部買い取っています。 ・一つの船で全て取れたものだから「一船買い」と言います。 ・すぐくない？くら寿司。 ・でもすぐ捨てるやつだから ・なんでやっているんだろう。 ・やる意味はあるのかな？	 ・「もったいない。」 ・「地球のことを考えている。」
8	漁師さんがすてるはずの魚もあるのに、なぜくら寿司は「一船買い」をしているのだろう。	
10	○子どもたちが考えやすくなるよう誰にとってよいことがあるのか立場を明確にする。 ・ちなみに「一船買い」をしたら誰に得がありそう？	・「漁師さん。」 ・「くら寿司も得しているかもしれない。」
13	○資料配付	
22	○資料や既習を活用しながら、自分の考えをもつように促し、ノートに書かせる。 ○個々の考えを交流させる。	・漁師側の捨てたくない魚も活用される。 ・くら寿司側も収入が多くなる。 ・SDGs にも関係している。 ・漁師側からすると船を出航させると、燃料代などがかかる。全てを買い取ってくれば、資源の有効活用につながる。 ・寿司ネタが増えたり、新たな商品が生まれたりする。 ・市場に左右されずに安定した収入を得ることができる。 ・漁師さんが安定した収入が手に入るから、後継者不足の解決にもつながる。 ・くら寿司もお客さんに安い価格で提供できる。

	・ちなみになんで安い価格になるのか想像つく？ ・「漁師」「くら寿司」「お客さん」にもよいことがあるんだね。 ○「未来志向の問い」につなげていく。 ・この間の学習みたいに「日本の水産業がダメになるかもしれない。」って言うていたけど、それに関係してくるのかもしれない。 ・くら寿司さんさえいれば食料生産の課題は完璧にクリアできるんじゃない。	・たくさん仕入れることができるから。 ・たくさん種類の魚を仕入れることができたなら、珍しい魚をお客さんも「食べてみたい。」と思うから。  ・完璧じゃないと思う。 ・全ての店がしているわけではないから。 ・お寿司屋さんだけではだめ。 ・お魚だけではだめ。
34	・くら寿司の「一船買い」は食料生産の課題のどこに効き目があると思う？ ・生産量の減少 ・魚米離れ ・後継者不足 ・輸入輸出 ・水産資源の減少 ・自給率の減少 ・食品ロス 効き目があるものに拍手をさせる。拍手をした理由を問う。 ○振り返りを書かせる。	食料問題のどこに貢献しているのか、スクールタクトで操作する。  ・生産量の減少は、魚の取りすぎも原因の一つだから、あまり効き目はないと思う。 ・魚や米不足は、珍しい魚だったらお客さんも食べるかもしれないから効き目はあると思う。 ・外国に輸出することではないから効き目はないと思う。
45	「一船買い」をすることで漁師さんの収入が安定し、くら寿司の仕入れも安定する。また、食料問題の解決にも繋がっていくんだね。	

<板書>



第5学年研究推進委員会 授業分科会記録と実践の振り返り

司会者 内藤 広大（札幌市立幌南小学校 教諭）
授業者 工藤 拓海（札幌市立円山小学校 教諭）
助言者 相馬 慎司（札幌市立しらかば台小学校 校長）
新栄 裕（北海道教育庁後志教育局
教育支援課義務教育指導班 主査）
記録者 荒川 恵（札幌市立西宮の沢小学校 教諭）



今日的な課題に繋が
り、未来は明るいと思
わせる社会的価値の
ある教材化

くら寿司の「さかな 100%プロジェクト」や「一船買い」などの取組が食料問題に果たす役割を考え、その限定性から他の取組について調べていくという流れの教材化が凄い。子どもたちが身近に感じて考えやすく、もっともっと知りたいという姿が見られたというご意見をいただいた。

一方、くら寿司は教科書から離れているが、進め方や評価などはどうなっているのかという質問も出された。くら寿司は、確かに教科書から離れているが、それを窓口として、教科書で扱っている食料問題に切り込んでいく構成であり、学習問題や学習計画を立てたり、調べ学習をしたりする中で教科書を使用しているため、問題ないという話になった。産業が抱える今日的な課題は多く複雑化しているが、くら寿司の取組は、子どもたちに他の取組も知りたい、他企業の取組も調べたいなど、「未来は明るい」と思わせる事例であり、次に繋がっていくよい伏線となる教材発掘だったというご意見を多数いただいた。

食料生産が抱える今
日的課題の背景に目
を向け、学びを深めて
いく単元構成

今日的な課題について、どのように考えていくのかが分かった上での本時だったため、みんなが未来志向の土台に乗ることができていた。できれば、次時の「食料問題のどこに貢献しているのか、効き目はあるのか。」という未来志向に迫る問いから生まれた個々の選択課題に対して、子どもが調べたこと、どこに貢献しているのかを考え、表現している場面を見たかった。社会参画、未来志向の姿に繋がる場面なので、本時の学びを生かして調べる学習の時間はもっと多い方がよかったのではないか、というご意見もいただいた。

一方、くら寿司の取組から食料問題に繋げるのは、少し無理がある。水産業でなら分かるが、食料問題の学習なのに、もう一度、水産業をもってきたような印象をもってしまったというご意見があった。他方、くら寿司の取組の限定性から、他の取組へと視点を広げることはできていた。水産業の終末や食料問題の導入で扱う構成もあったのではないかというご意見もいただいた。

未来志向に迫る教師
の関わり

多くの参会者から、本時では未来志向に迫る姿が十二分に見られたという評価をいただいた。ただ、本時前半のくら寿司が一船買いをしているのはなぜかを考える場面より、後半の「一船買いは食料問題のどこに貢献しているのか。」を考える場面が本時の核だったのではないかと。前時想起を短くしたり、配付資料の内容を前時までに学習したりしておくなど、資料を読み込んだり話し合ったりする時間を短縮して、後半部分を多くするとよかったのではないかというご意見をいただいた。

また、「どうして漁師の収入が安定するのか。」や「後継者不足に貢献している。」など、既習を基に考えた子どもの言葉から、課題に結び付いていったのがよかった。

食料問題のどこに貢献しているのか、今日的課題に「○・△・×」を付けてクロームブックでお互いの考えを交流しているのがよかった。自分の考えを記入してから友達のことを見て、また自分の考えに戻って修正している姿もあっ

た。その考えが変容する姿を授業の中で取り上げ、交流している場面も見なかった。もっと友達同士で話し合う姿が見られれば、更に深まったのではないかというご意見もいただいた。

助言者より

＜新栄 裕 主査＞

今回の授業は、魚を保護するために植林している漁師が、獲った魚を廃棄していることからズレを生み、くら寿司の一船買いを取り上げて、食料問題に目を向けさせるという流れだった。くら寿司の取組を通して、食料問題に目を向け、自分事として他の取組についても考えていく教材化がよい。単元の学習問題をつくり、解決の見通しをもつ中で、未来に向けてどうしていくのか、未来のイメージや問題の背景を考え、社会参画に向けた意識を醸成していく構成がよかった。また、単元の最後ではなく、見通しで意識化し、中盤で未来志向に迫る、という新しい形がよかった。評価についても更に考えていくとよい。

また、食料問題のどこに貢献しているのか、その理由も取り上げるとよい。友達の評価の理由を知りたいと思うことも未来志向へのきっかけとなる。地域に貢献する魅力的な人物の営みを通して、自分も役に立ちたいと考える子どもの姿は生涯学習に繋がり、未来志向を高め、発信し、考え続ける子を育成する。

＜相馬 慎司 校長＞

一船買いは、とてもよい教材化だった。コロナ禍で相次ぐ廃業の中、利益を追求する企業が、将来を見据えて顧客を満足させることを第一に、水産業全体のことも考え、後継者問題や漁師の収入の安定に繋がる取組をしている。くら寿司の営みを通して、他の企業や産業の取組、今後の食料生産の未来に向けた取組に目を向けることができる。

本時の最後の場面が大事。もう少し時間をかけて考えを取り上げてよかった。未来志向に迫る問いのメリットは出たが、デメリットはどうだったのか。食料問題のどこに貢献しているのかの判断に迷っている子もいた。主体的・対話的で深い学びに繋げることを意識すると、更に魅力ある単元、教材となる。子どもの考えを価値付けることはできていた。子どもたちの見方・考え方がこの授業でどう高まったのか、振り返る場がもう少し必要だった。今回の授業は、提案性も高く、教材性のある、未来を見据える授業の第一歩であった。

実践の振り返り 授業者 工藤 拓海（札幌市立円山小学校）

本単元では、日本の食料生産が抱える課題について、その背景や解決に向けた取組に着目することで、食料生産が抱える課題の複雑さの実感や、よりよい未来に向けた食料生産の在り方を具体的に考えるきっかけとなるような単元構成を目指した。単元の前半では、食料生産の課題について、その原因となる社会的背景についてもしっかりと調べ共有していくことで、食料生産の課題についてクラス全体で理解を深めることができた。そのことが単元後半の食料生産のよりよい未来を考え続ける子どもたちの姿につながったように思う。

本時では、くら寿司の取組について、「漁師」「くら寿司」「消費者」の3つの視点からの意見と、これまで学習してきた食料生産の課題をつなげることで、取組の価値と限定性について考えることをねらいとした。分科会の中では、未来志向に迫る場面について多くの意見をいただいた。ほとんどの児童が未来志向に迫っていた一方で、未来への思いを抱いた子どもたちが、どのように取組について調べ、食料生産の未来を具体的に描いていくのか、その姿を見てみたかった。そこにこそ、より未来志向が現れるのではないかと意見を多くいただいた。今後未来志向に迫る場面を本時でどのように扱うのか、どの場面がより色濃く現れるのか、精選していく必要がある。

今回の授業を通し、真剣に考え活動する子どもたちの素敵さを改めて感じた。今回の5年生部会で作り上げた授業の成果と課題を生かし、素敵な姿を多く生み出せるようにしていきたい。

第5学年分科会 責任提案

後志地区 単元名「国土の自然とともに生きる」

提案者 寺下 剛史（小樽市立花園小学校）

野島 隆史（古平町立古平小学校）

授業者 井波 義幸（留寿都村立留寿都小学校）



（１）提言の主張点

後志社会研究協議会では、指導者自身が実社会への関心を高め、大人なりの課題意識と考えをもつことをベースとした授業づくりを行った。単元を計画する際には、子どもが会う社会的事象の背後に、どのような社会課題があるのかを浮き彫りにし、指導者が自分なりの立ち位置を見いだすことから研究を進めた。単元の学習を進める中で子どもたちも、現段階での自分なりの立ち位置を見出し、現実社会を考えるきっかけとなる社会科の学びの場を創ることが研究主題の具現化につながると考えた。

（２）研究の概要

【 研究の柱１ 教材化と単元デザイン 】

防災単元の教材化にあたって、既習事項と新たに習得する事項との系統性を意識した教材化を目指した。本実践を行った留寿都村は、スキーリゾートとしても広く知られた地域である。そのため、４年生では、地域の自然条件を鑑みて雪害に備えるまちづくりについて学んだ。この地域における防災学習での経験をベースに、今回の教材化をすすめた。４年生までの相違点は、「国土全体における様々な自然災害の状況について」を扱う点である。そのため単元の構成は、教科書の構成に則りつつ、防災の専門家に学んだ知識を単元後半に活用することで、防災に関する社会的認識を深め、社会参画へとつなげる展開を考えた。

【 研究の柱２ 社会認識を深める１時間 】

本単元では社会認識を深めるために、地域防災マネージャーの中島さんに学ぶ機会を設けた。東日本大震災後の復興に関わってきた専門家の視点から、防災計画の概要や津波被害の対策、復興の流れを学んだ。豊富な経験をもつ中島さんが留寿都村で勤める経緯を知る中で、防災と子どもたちとの距離を近づけ、社会参画につなげる価値創造について、自然災害への備えに価値を見いだすことを意図した。ゲストティーチャーを活用した授業では、事前に想定する１時間のタイムマネジメントが鍵となる。ゲスト任せにせず、打ち合わせで十分調整をすることで、必要な情報を精選することができ、育みたい「確かな社会認識」を深めることができると考えた。

【 研究の柱３ 社会参画につなげる価値創造の１時間 】

この１時間には、「もし全国の〇〇に住むことになったら」という仮の立場を設定した。児童は既習から自然条件と全国各地の災害を関連付け、想定される対策を考えた。これらを通して、一地域に止まらず、主体的に防災に関わる機運を高め、将来いつ、どこにいても、自然災害に備えることに価値を見いだす北国の子を育成することをねらった。「もし全国の〇〇に住むことになったら」の〇〇を①北海道黒松内町、②滋賀県大津市、③鹿児島県鹿児島市３つの立場を与えられることで、子どもたちは、より主体的な調べ活動や他者との対話が必要になる。この学びの姿こそがやがて社会参画へとつながり価値創造することになると考えた。

(3) 成果と課題

授業づくりにおいて、指導者は自分なりの課題意識をもち、ゲストティーチャーと十分な打ち合わせを重ねた結果、児童は自然災害について実感をもって学ぶことができた。単元前半から中盤で確かな社会認識を育むことを意図した結果、子どもたちは、単元後半に「もし全国の〇〇に住むことになったら」という発展的な課題に対しても、既習を生かして試行錯誤する中で十分思考を働かせることができた。本時では1時間内にする活動が多かったため、今後取り組む際にはさらに時間を確保するよう改善したい。また、この学習プランは、他の市町村でも構成可能な汎用性のある指導計画になるよう意識した。本実践が一般化され、他地域でも活用されると幸いである。

(4) 本時の指導案

	子どもの主な活動	教師の具体的な手立て
導入 (3分)	津波と地震に対する対策の基を考えているのはどこだった？ ・前時までに学んだことを振り返りながら、津波と地震が発生する可能性のある地域に防災計画が作られていることを知る。 ・単元の1時間目に出た、津波と地震以外の災害を確認する。	・前時までの既習内容を想起できるようにまとめられた表を掲示する。
展開① (10分)	・スライドの説明を聞きながら、各災害への対策をノートやジャムボードなどに整理しまとめていく。 ・それぞれの災害がどのような自然条件で発生するかを確かめる。 その土地に住むことになったと想定して、自然条件から対策が必要な災害を見付け、順位をつけよう。	・風水害・雪害・火山災害・土砂災害への対策を、スライドを使って説明する。
展開② (27分)	◎留寿都の地形を見ながら、発生する可能性のある災害を確認し、順位付けの仕方を知る。 (1)「もしここに住むことになったら(場所)」と「自然条件シート」を見ながら、グループで地図で場所を確認して自然条件シートを埋めて発生する災害を予測する。 (2)順位をつける基準は、「過去に発生した回数・被害の大きさ・頻度」などを参考として順位をつける(その順位にした理由となる)。 (3)グループごとに作成した順位を資料などで理由をつけながら発表していく。 例「鹿児島県は、地図帳を見ると桜島があり、調べるとよく噴火をしているらしいので優先順位1位は火山災害にしました。」 ◎市町村もその地域の自然条件をみて必要な対策を考えていることを捉える。	・災害は自然条件と関連していることを既習の学習から想起させる。 ・留寿都を活動の例として取り上げ、全体で確認し、活動への見通しをもたせる。 ・これまでの学習をもとに、自分で考え、選択・判断して必要な備えを考えることができる【思判表】 ・話し合いが停滞していたら、一度作業を止めて途中経過(地図帳をどのように見ていたか、調べる参考になった資料)を報告し合い、解決の糸口をつかむ。
まとめ (5分)	自然災害は自然条件と関連しているので、その土地にあった備えを自ら考えて行うことが大切である。 ふり返りをフォームで送信する。	・各地域が自分の地域の自然状況を見て、地域防災計画を作成していることを捉える。

第5学年分科会 責任提案

函館地区 単元名「水産業のさかんな地域」

提案者 松浦 真木子（函館市立赤川小学校）

授業者 新田 優大（函館市立駒場小学校）



（１）提言の主張点

函館小社研では、研究主題を『社会的な見方や考え方を高め、未来に生きる力・価値を創る社会科の学び』と設定した。未来では、持続発展を考えることが難しい社会的問題をどう考えるか、更に予測が困難な世の中になる。変動や不可能と考えられていることに対して、冷静に事実を見つめ正しく掴む力、選択・判断に根拠をもって考える力、不可能と思われることから価値を見だし広げる・行動する力が必要とされる。先人が困難やマイナスの事象からプラスを生み出してきたように、温故知新から持続可能な社会の実現を願い、参画しようとするバイタリティを学び、自分の力に変換することを目指した教材化と単元構成づくりに今年度は重点を置いた。

（２）研究の概要

【研究の柱１ 社会的事象を正しく捉え、社会と未来につながるための価値に気付く教材】

1. 社会的な見方や考え方を鍛える教材であるか
2. 子どもが習得すべき社会的事象と意味（知識）を明確に位置づけた教材であるか
3. 自ら社会参画・社会貢献したくなる教材であるか

この3点から教材化を求めていった。函館にとって「海水温の上昇と魚種交代」「水産業人口の減少・高齢化」「外国との関わり・協調」は喫緊の課題であり「持続可能な水産業」を考える必要性が高い。函館市国際海洋研究センターが中心になり産官学共同「函館マリカルチャープロジェクト」では、キングサーモンとマコムの完全養殖実現をめざし、地域カーボンニュートラルに挑む計画が令和3年にスタートした。地域全体で問題解決し、持続可能水産業を開発する。「函館ブリリアントアクション」は、海の未来を考える・行動を広める活動である。これらを題材に、社会的事象に自ら問いかけ、人の営みから価値を見出す教材化を図った。

【研究の柱２ 社会的事象の意味から社会認識を深め、次の社会を創る価値を考える単元構成】

「日本の水産業はこれからどうしていくといいか」という単元を貫く共有課題を設定した。「これからどうすれば」という型の学習課題にすることにより、追究の方向が未来指向であること、持続可能方向に向けて全員で考えていくことを確認した。

実現が難しいことに、発想を変えて取り組む人々のバイタリティーから学び、この課題解決に向け議論する中で、自らの選択・判断、社会認識が確かなものに高まる実感を味わえる1時間にする。そのために確実な知識・社会的事象と意味（価値）が積み上がる単元構成を目指した。

【研究の柱３ 今の自分と社会のつながりから、次の持続可能社会へ、価値を追求する協働的な学び】

これまでの学びを総合的に俯瞰し、根拠として思考・判断・選択する場面を、個と協働的な学びの往還で持続させる。解決が難しいと思われる社会的事象にも問い続け、学び続けながら社会生活を営む。他者と考えや価値観を比較・統合・取捨選択を繰り返すプロセスこそ社会科の学びである。

(3) 成果と課題

- ・本時（単元最終時）までに、確実に水産業について知識の積み上げができていたのが見えた。学習で積み上げた知識を根拠にする単元構成となっていた。
- ・未来に向けて、自分で選択判断し、課題解決を考え得るにたる教材であった。また、課題解決が想像や思いつきのものではなく、既習を生かした現実的なものとなっていた。
- ・難しい点を考える際、一生懸命考えたことをもう一度否定的意見を出すよりは、教師が資料等を提示したり、問い直す形にしたりの方が本時を最後まで考え抜く意欲につながるのではないかと。

(4) 本時の指導案

問いに向き合う場

多様な考えをつなぐ場

確かにする場

本時・単元の課題

日本の水産業は、これからどうしていくとよいか。

○これまで追究してきた課題について考えを交流する。

課題1 海水温の上昇と魚種交代

課題2 世界の水産物消費量の増加と、水産資源の減少

課題3 水産業に携わる人の、減少と高齢化

選択の視点「20年後も持続可能・発展・水産業の安定収入」

地球環境を保護する取組	環境の変化を知り環境を守る	味や鮮度を保つ技術を高める	海や資源についてもっと知る
資源は世界全体の物と考え守る	資源の量を守るとりすぎない	栽培漁業で安定収入にする	とれる水産物をおいしく活用
世界全体でルールを決め、守る	漁業者・研究者地域全体が協力	誰でも水産業ができるITや機械技術の開発	国産の水産物を大切に食べる

選んだ理由と大切だと思う解決策

海の環境をもっと知ってもらえれば、環境を守ることが増えるのでは。魚がもっととれるようになるかな

世界全体でルールを守ったら水産資源は守られ、未来も魚が食べられる。食べると漁業者も・・・

漁業に携わる人がいないと持続できない。栽培漁業やIT漁業で増やせればいい

問題点・難しい点⇔問題解決に向かう意見

回復・発展に長い時間がかかりそう・・・

ルールを破る国や、対立する国の問題

栽培漁業だけでは成り立たない

常に環境について知り、未来の子ども、社会に伝え続けたい

世界全体で現状や危機感を共通理解できる話し合いを続ける

栽培漁業を大規模にする。IT機器レンタル、費用を下げる

予測できない環境変化や、国際関係の中で、函館市のチャレンジは始まったばかり。成功するかも分からない。でも・・・。

交流したことを基に、水産業が続いていくために、これから考えていくことをまとめよう

○個人でノートに考えを書き、交流する。

◇これまで調べてきた人達の工夫と努力が分かる資料と、自分がまとめた思考ツールを見直しながら考えるように促す。

◇持続可能な水産業のために大切なことをこれまで追究してきた課題から3つの視点で多角的に考察できるようにする。その際、調べた事実から分かったことを根拠に表現・議論できるように促す。

【思・判・表】水産業に関わる人々の工夫と努力をまとめ、品質・安全への配慮や、持続可能な水産業の課題への対応などを考え、適切に表現している。

【主体的態度】既習を生かし安全で質の高い水産物をこれからも生産し続けられるために大切なことについて考えをまとめようとしている。

◇未来について考え、難しい社会の問題にチャレンジする人々のバイタリティーに触れ、学べたことが社会参画の始まりであることを共有したい。

第5学年 責任提案 分科会 記録

司会者 内藤 広大（札幌市立幌南小学校 教諭）

提言者 後志社会科研究協議会

寺下 剛史（小樽市立花園小学校 教諭）

野島 隆史（古平町立古平小学校 教諭）

函館市小学校社会科教育研究会

松浦 真木子（函館市立赤川小学校 教諭）

新田 優大（函館市立駒場小学校 教諭）

助言者 相馬 慎司（札幌市立しらかば台小学校 校長）

新栄 裕（北海道教育庁後志教育局教育支援課義務教育指導班 主査）

記録者 小松 薫（札幌市立新陵東小学校 教諭）



<討議の柱>

「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」を実現するために、どのような授業づくりを行ったのか

2 地区の実践から

後志地区は第5学年「国土の自然とともに生きる～自然災害とともに生きる」の実践である。4学年での既習を生かし、5学年としての学びを深めるために、学年の学習目標の違いを明確に意識した。単元のはじめでは、日本の国土と地形に応じて生じてきた様々な災害を確かめ、「災害の被害を減らし、自分たちの暮らしを守るために、どこがどのような対策をしているのか。」という学習問題を設定した。単元の中では、ゲストティーチャーを活用し、津波を例に社会的事象の意味を学んだ。実際に対策している役場の方の話から、どのような対策・工夫があるのかを学び、確かな社会認識を深めた。本時では、津波や地震の対策を国や都道府県が防災計画を立てて行っていることを学んできた子どもたちが、「〇〇市町村に住むことになったと想定して、自然条件から対策が必要な災害を見付け、順位をつける」という課題を設定した。国や都道府県から、市町村に視点を切り替えることにより、国、都道府県との連携の必要性や市町村は自分たちの地域に必要な防災を考えているということをつまみとらえられることと考へた。自分たちに身近な地域や行ったことのない市町村、一見すると自然災害の少なそうな市町村の3つのまちを取り上げ、その地で暮らす人々の立場に立たせることで、社会的事象の見方・考え方を働かせることができた。

函館地区は第5学年「食料生産を支える人々～水産業のさかんな地域」の実践である。子どもたちが自分事として捉えられるよう、函館のイカとブリの魚種交代の実態や単元を通して核となる資料から水産業の課題について考え、「日本の水産業はこれからどうしていくとよいのだろう。」という単元を貫く学習問題を設定した。「これからどうすれば」という型の課題にすることで、未来志向、持続可能性を念頭に置いて学習が進められると考へた。課題を解決するために、日本を代表する漁港である根室港のサンマ漁、函館市の「マリカルチャープロジェクト」「北海道ブリリアントアクション」の取組を学習し、新しい技術や人々の努力が持続可能な水産業につながっていることを学んだ。それぞれの取組において、水産業に携わる人以外にも、他業種、大学が一体となって、人と産業とまちを育てることが大切であることを学ぶことで、自分たちも課題の解決に関わっていくのだという認識につながったと考へている。本時では、様々な課題のうち、自分が最も解決すべきだと思う課題とその解決策を話し合った。単元の学びを生かした現実的なものとなった。また、その解決策の問題点・難しい点にも触れることで考えを再考し、社会的事象の見方・考え方を働かせることにつながったと考へている。

確かな社会認識をもと
に未来を志向する姿と
は

<後志地区>

「自分たちの住んでいる留寿都村では災害が少ない。」「しかし、将来留寿都村に住んでいるとは限らない。」という子どもたちの思考の流れから、3つの地域の災害対策を考えさせることには価値があった。地理的な条件と自然災害を関連付けられるように練られた単元計画、ゲストティーチャーを活用して得た具体的な情報があったからこそ、子どもたちは減災への課題意識をもつことができた。

本時の課題である「必要な課題に順位をつける」活動には一考の余地がある。確かに、子どもたちが考えやすい課題となっはいるが、学習指導要領との関連、本時で本当に思考・判断・表現を見取れるのかが懸念事項である。

<函館地区>

函館にしかない教材の魅力があった。単元の導入として提示した学校給食に出されているブリカツや子どもたちに身近な回転寿司の一番人気であるサーモンが、単元の学習として出てくるのが素晴らしい。また、実際に教師が足を運んで得た写真やゲストティーチャーの生の声を聞くことで人々の営みや努力が将来的に大切なことを実感できる単元になっている。

ただ、良い教材なだけに情報量が子どもたちにとって適切であったか、子どもの問題意識とのズレがなかったか考える必要がある。「日本の水産業はこれからどうしていくとよいのだろう。」という未来志向の問いを生んだあとに、「魚の取り方」「店に届くまで」と学習するのではつながりが薄いのではないか。

助言者より

<新栄 裕 主査>

後志地区に関して

「もし〇〇に住むことになったら」という問いは子どもを自分事に引き込むことのできる課題だった。振り返りを読んでみると国や都道府県、市町村という言葉が見られ、どこが対策しているのかについて、教師のねらっている目標に近付いていた。学習指導要領との関わりは検証が必要である。

函館地区に関して

「持続可能な水産業は函館の未来だ。」というゲストティーチャーの言葉が印象的。学習指導要領にある通り、輸送・販売に関わる人、他業種など、様々な人が水産業の課題解決のために関わっていることを学べる素晴らしい教材化となっている。ただ、未来のことを考えるためにはこれまでのことを分かっていなくてはならないという課題意識が子どもたちにあったかについては疑問が残った。

<相馬 慎司 校長>

後志地区に関して

自分たちの地域から始まり、他地域の自然条件と対策に広がっていく授業の流れに提案性があった。自分事にしていくことが難しい災害の単元においてゲストティーチャーとの出会いが子どもたちの知的好奇心を高めることにつながっている。ゲストティーチャーは綿密な計画と打ち合わせの必要性が伝わってきた。

函館地区に関して

子どもたちと同じように「なぜ水産物がたくさん獲れるはずの函館が養殖をしているのか。」という疑問が出てきた。まち全体が水産業の課題解決に関わらなくてはならないという認識が、時代とともにそれが当たり前になってきたという価値観に迫っていく授業になっている。

第6学年研究推進委員会 授業記録（5／6時間）

単元名 「世界に歩みだした日本～民主主義の高まりと主権者としての未来～」

授業者 黒田 健太（札幌市立緑丘小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	○単元の学習問題を確認する。 ・1番最初に立てた学習問題を確認しましょう。	・「不平等条約改正を目指して日本の立場や国民生活はどのように変わったの？」
3	○当時の国民生活について資料を提示、当時の状況を予想させ、確認する。 ・共通していることって何かわかる。 ・よく思わない立場の人もあるよね。 ・ただ、この人たちは政府が弾圧するって知ってたけど、みんな権利を主張していた。	・「権利を訴えている。」 ・「政府だ。」 ・「なんで弾圧されるってわかっていたのに、ずっと権利を主張していたの。」
なぜ人々は弾圧されると分かっているのに自分たちの権利を主張したの。		
21	○「女性」「差別」「労働者」の3つの立場から考察させ、交流する。 ・女性の人からちょっと聞いてもいい。 ・男子と同じ立場で選挙権を欲しいっていう願いがあったんだね。では差別を受けていた人たちに聞いてみたいな。 ・山田少年はどんなことを考えて喋っていたんだろう。 ・労働者の話も聞いてみたいな。 ・有権者が全然いないというのはどういうこと。 ・それぞれが権利がほしい、でも、例えば、女性で一人が喋っていても変わらないですか。 ・広がったら何かいいことあるのかな。	・ノートに自分の考えを書く。 ・「女性に男性より低い存在って感じになってたからそこに不平等を感じていた。」 ・「選挙権は25歳以上の男性の納税額が15円以上っている制限条件があったから選挙権がないのは差別。」 ・「身分制度が改められて、結婚していない人とか仕事がない人は人とちょっと違うっていうだけで差別されていた。」 ・「山田少年が思っていたことは、差別を打ち破りましょう、そして、新しい世の中にしましょうみたいなことを。」 ・「最初はヨーロッパで大きな戦争が始まって、時代が変わって戦争になった。その戦争の終わりに物の値段が急激に高くなって。それで、自分たちの生活を守るために運動を開始した。」 ・「国民全体で政治をしていきたい。民主主義の意識が高まって、普通選挙権を求める運動が展開された。」 ・「労働運動っていうのが起こったらしくて。労働者たちの地位の向上と労働条件の改善を求めて、政府に地位向上させろって訴えていた。」 ・「選挙権っていつでも全然制限があって、1920年の時だったら有権者の割合が総人口の5.5%になっているから、国民全員からしたら、有権者が全然いなかった。」 ・「国民の願いがほぼ叶えられない。」 ・「一部の人の願いしか叶えられない。」 ・「一番近い人たちが、もっとみんなに広めていく。」 ・「最初の女性が喋った、聞いている人が10人で、また広めていって、どんどん広がっていく。その思いが政府とか聞いてない人にも届くから。」 ・「話を聞いている人がどんどん増えていったら、女性にも権利をあげようかなってだんだん思っていく。」 ・「周りに広げた方が、周りも納得してどんどん広がっ

	・結局、女性とか差別された人、労働者の人たちは皆で何をしたの。 ・平和な世の中を作っていきたいということ。	ていくじゃないですか。ちょっと良くないかもしれないけど、政府を追い詰める。」 ・「そもそも差別がない、みんなで作っていききたい、成長していきたい。」 ・「今みたいに全員平等で全員平和で性別関係なしで、平等が一番いいじゃないですか。ただ、昔は違って、やっぱり国民は平和に過ごしたいって思いがあった。」 ・「それがゴール」
3 9	○学習をまとめる。 ・今日の学習をまとめるとどうなる。自分でまとめを作ってみようかな。	・「みんなが平等に過ごし、平和な世の中を作りたいから、自分たちの権利を主張したんだと思います。」 ・「平和で平等な世の中を皆で作るために権利を主張した。」
4 3	○選挙率の推移を提示し、現在の状況について考えさせる。 ・実はこの民主主義の思いが高まってきたことがある。 ・これ身に覚えある？ (投票用紙を提示) ・普通選挙が変わり始めます。1928 年は納税ゼロで、男子だけなんですけど、この時の投票率は 80.3%。 ・1946 年、女性も投票、この時の投票率は 72.58% ・最後、現代、2018 年。この時の投票率は何%だと思う。53.68%。 ・この 1 票をつかみ取るために、当時の人は弾圧を受けながら歴史を繋いできた。今みんながもらえている権利を生かしていると思う。 ・自分たちがもらえている権利をどう生かしますか。最後、振り返りに書いてみて。 ・前回の政治の勉強で、選挙に参加したいって言ってたけど、今日の勉強はちょっと違う？	・「ああ、身に覚えある。」「覚えている。」 ・「めっちゃ多い。」 ・「ちょっと落ちた。」「何で。」 ・「18 歳以上の男女。」「高校生が含まれる。」 ・「何で減っているの。」「倍ぐらい減っている。」 ・「いや。」「生かせていない。」「私は生かせている。」 ・「昔の人の思いを受け継ぎたいと思った。」 ・「今は 18 歳以上の人は当たり前のように選挙ができているけど、それは昔の人が苦しい思いをされながらようやくできるようになった選挙なのに。ちょっとでもやっている人を多くするために僕は参加したい。」 ・「前回の選挙の時は、どういう風になっているだったけど、今回は昔の人の思いがあって、選挙権が欲しくて弾圧されながらもやってきた人たちがいるから、その人たちの思いを受け継ぎたい。」

<板書>



第6学年研究推進委員会 授業分科会記録と実践の振り返り

司会者 宮崎 世司（札幌市立八軒西小学校 教諭）
授業者 黒田 健太（札幌市立緑丘小学校 教諭）
助言者 石川 篤司（札幌市立札幌苗緑小学校 校長）
高島 護（札幌市教育委員会 指導主事）
記録者 吉野 貴宏（札幌市立栄西小学校 教諭）



教材化をする上での 単元のつながりの重 要性

今回の授業は、大単元のつながりや小単元の学びの積み上げが重要だった。未来志向につなげるために、歴史単元で過去を学び、現代の自分たちの生活や政治単元と比較して考えていくことで、未来志向が生まれると考えて教材化をしてきた。本時の子どもたちの考えを聞き、意識して取り組まれていたことは見て取れたが、やや弱い部分もあったという意見もあった。特に、明治・江戸時代などの前の時代と常に比較していくことで、世の中の情勢や変化などを詳しく読み取り、本時にも生かすことができたのではという意見があった。また、他の地域でも歴史単元における未来志向の取組は、挑戦されていることから、今回の主張については、共感される部分も多かった。

未来志向に迫る一時 間と単元構成とをつ なぐ“立場”

単元の導入にて、日本と外国の立場の違いを読み取らせるために資料を提示した。この2つの立場を軸に、様々な視点から日本の国際的地位向上が図られたことを学んでいく単元を構成した。学習指導要領の内容としては問題ないと思うが、未来志向に迫る1時間で“権利”をキーワードとして学習問題を醸成していくには、やや唐突なのではという意見があった。単元の中心的内容が国際的地位の向上だったため、国力の向上や国内の様子の変化については、扱いがやや少ないということなどが要因であるという考えもあった。それを改善するためにも、前単元から国内の情勢や政府と国民の関係性を追っていくこと、つまり、二つの立場で歴史単元を学んでいくことが大切であるといえる。

子どもの思考から吟 味する学習問題の再 構築

本時の学習問題について、学習問題として醸成するまでのアプローチの難しさを部会でも吟味し続けてきた。それと合わせて、学習問題の文言が適切であったかも意見としてあげられた。「なぜ人々は弾圧されるとわかっているのに権利を主張したの」という学習問題の中で、「弾圧されるとわかっている」ではなくて「弾圧されても勝ち取ろう」としたときに、子どもたちが主体的に考えていったのではないかと。今までの歴史でも少しずつ権利を勝ち取ってきたと思うので、勝ち取ろうという言葉にするともっと子どもたちが主体的に当時の国民の意識や政治への関心という視点で考えることができたのではないかと。様々なアプローチがある中で、提示する資料をしっかりと読み取り、それらに関連させながら学習問題を醸成しようとする丁寧な教師の関わりを実行した授業者の意図も、子どもの思考から導き出された学習問題として有効だったと考えることもできる。

助言者より

<高島 護 指導主事>

主権者教育という昨今注目されているところを進めていくという点で、大変価値のある実践だったと思う。歴史という単元の中に政治を盛り込むというのは、素晴らしく提案性がある。授業では先生がまとめて、子どもの意見を協働的にまとめていくのかなと思っていましたが、授業の終盤、時間もない中、先生が子ども自身にまとめさせていて、子ども一人一人が価値を作る時間が担保され

ていたと思う。さらにその価値を深めるといった視点で、政治単元での投票率の扱いについて、先生が「これからの未来にどう生かしていく?」「歴史がつかないできた権利をどう生かす?」と投げかけていた。であれば、投票率をパーセンテージで表した資料について話題に上がっていたが、そこが果たして子どもの文脈に沿った問いだったのかということは、また検討していく必要があると感じた。投票率が下がったというところに対して問題意識がすでにあった状態で、子どもは「重みが違う」と言っていたので、この権利獲得に向けた活動により選挙権の幅が広がっていったということを見て、子どもの方から「なのになんで(投票率が)少ないんだろう」と仮にできてきた場合、どう繋げるか仕組みが必要だと思う。その仕掛けがあると、単元を超えて繋がった時、深い学びの実現はもとより、新たな価値を子どもが自分で創造し、歴史の学習をしながら、公民単元と繋げることができると思う。

<石川 篤司 校長>

授業者と部会の主張がしっかり現れていた授業。今日の授業の中に当たる部分では、国民の中の様々な立場の人、というところに子どもたちが視点を定め、内側に入って考えていき、終末では、個人の中で政治単元と絡め、投票率と政治に参加する個人の中での自分の昔と今日の授業を受けた時の立場で考える、授業者のねらいに沿ったように考えることができたのではないかなと思う。この単元においては、資本主義の発展によって主権回復、国力の回復や資本主義の発展によって格差が生まれた。日本は地位を確立していったが、格差により弱者が生まれた。それが民主主義のエネルギーとして高まっていった。そして、民主主義を制度化するための大きな柱が選挙であり、選挙制度の確立に結び付いていくのではないかなと思う。今日の授業の中では「弾圧」という言葉もあったが、この時代では米騒動が起きて、米騒動の目的は達成されたが、持続はしなかった。となると、運動の組織化と組織的に民主主義について訴えていく方向に流れていったのではないかなと思う。デモ行進だとか演説だとか、6年生なりに民主主義の広がり、組織化の意味についておさえられていたのではないかなと思う。未来志向に迫る1時間ということで、後半部分、投票率に目を向けていったが、もう少し時間をかけて見たかった。当時民意を反映させる唯一の手段が「投票率」だったが、現在は選挙だけではなく、民意を反映させるのは、SNSがあったり、様々な媒体があったりして、たくさん手段がある。子どもたちが考える中では、投票率だけが民意を表すものではないということ踏まえて考えていかなければならないと思う。主権者教育の繋がりや、歴史と政治判断を繋げていくというところでは、十分な主張であった。

実践の振り返り 授業者 黒田 健太(札幌市立緑丘小学校)

本実践では子どもたち自身が本単元を通して未来志向に向かうために、選挙権を取り上げた。政治単元の学習を生かし、自分たちとのつながりをより深く実感できると考えたからである。歴史学習ではその選挙権を勝ち取るまでの過程と当時の人々の思いを学ぶことで、より18歳からもつ選挙権の重みや価値を実感でき、よりよい未来に向けて自分が行動できることを考えることができていた。しかし本時における新しい情報量の多さは課題である。単元構成をより工夫し、学びの積み重ねから本時のねらいに迫れるような授業展開が必要であった。また未来を志向し自分の思いを表現するための時間の確保も必要であったと考える。

第6学年分科会 責任提案

網走地区 単元名「水産業のさかんな地域」

提案者 鈴木 航（斜里町立知床ウトロ学校）

授業者 田中 邦博（網走市立中央小学校）



（１）提言の主張点

網走地区では、学習のあらゆる場面で自分の考えを決める『自己決定』を大切にした授業づくりを意識している。自分たちで「問いを立てる」「学習計画を立てる」「学習方法を考える」ことを自己決定していくことが「自己指導能力」を育成することにつながる。そして、自己指導能力を高めていくことが「自分はこうしたい」という自己実現、さらには社会参画につながっていくと考える。そこで、単元や本時でどのような自己決定ができるか授業実践を試みた。

（２）研究の概要

【研究の柱１ 子どもが社会的事象とつながる「学習計画」】

本単元では、教材として網走市の「ほたて」を扱った。教科書には、児童にとって身近であるオホーツク地方で、ほたてがたくさん獲れることがわかる地図が掲載されている。また、前単元で学んだ「農業協同組合」と関連させ「漁業協同組合」はどのような仕事をしているのか興味をもつだろうと予想した。教科書の記述や前単元との関わりを大切にすることで、子どもたちの「調べたい」「考えたい」という意欲を高めることができると考え、教材化を図った。

単元全体を見通すにあたって、「米づくりのさかんな地域」を想起させた。子どもたちは追究の視点を「漁の工夫」「魚の流通経路」と自己決定することができ、視点に沿って事実の追究を積み重ねた。また、GTとして漁業協同組合の方に授業をしていただいた。「養殖にも改善点がある」ことを話していただくことで、子どもたち自身が、「水産業の課題を解決するためにどんな取組が必要か」と、さらなる問いをもつことができ、単元後半の事実追究の視点につながった。そして、調べた事実をJamboardに積み重ねていくことで、単元の最後にどの取組が大切か選択・判断する際の根拠として活用することができた。

【研究の柱２ 自分の考えを整理し、自己決定する「１時間」】

自分の考えを整理し、自己決定するために１時間の中に３つの場を設定した。「自分の考えをもつ場」では、子ども自身が自分に合った資料を決め、自分の意見を書いたり考えたりする時間を設定した。自分の興味・関心や資料分析の力に応じて、教科書・図書・インターネットなどを選択し、考えをまとめることができた。

「多様な考えに触れる場」では、児童が多角的に考えることができるよう意見を交流する時間を設定した。自分と同じ立場の児童との交流では共通点や相違点に着目することができ、自分の立場と違う児童との交流では新たな考えを知ることができた。

「自分の学びを振り返る場」では、「学習内容」と「学習方法」の２つの視点でノートに振り返りを書く時間を設定した。学習内容の振り返りでは、自分がこの単元で学んだこと、これから行動していきたいことに着目できた。学習方法の振り返りでは、次の単元でどう学んだらよいかなどこれからの学びにつながることに着目できた。

(3) 成果と課題

【成果】多様な学習方法があることで、子どもたちが意欲的に取り組むことや、様々な考えをまとめることができた。また、自分の考えを Jamboard に積み重ね共有していたことで、選択・判断がしやすかった。

【課題】自分の考えの交流のみで終わるのではなく、学習の深まりが感じられるような交流の仕方や、より自分事として捉えさせるしかけが必要であった。

(4) 本時の再構成案

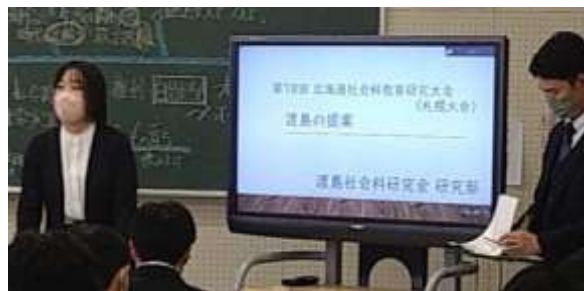
	学習活動	評価
問いを生む場	○前時までに学んだ、水産業の課題と解決するための取組をふり返し、立場ごとに分ける。 (課題) ・生産量が減っている (安定しない) ・日本の消費量の減少 生産者 ・魚をとりすぎない ・水産物のおいしさを知ってもらう 消費者 ・ごみを捨てない ・たくさん食べる ・ラベルを見て買う 水産業の課題を解決するために、誰がどのような取組をすることが大切だろう？	取組と立場の振り分けを同時に行い、問いを生む場の時間を短縮することをねらう。
自分の考えをもつ場 多様な価値に触れる場	○今まで学んだ取組や自分で調べた取組をもとに、どの取組が大切か自分の考えを書く。 ・立場を明確にする ・複数の意見を書いてよい ・同じ立場なら友達と協力して活動してもよい ・理由を明記する ○座標軸を用い全体で自分が考えた取組の交流を行う。 【すぐにはできるかどうか】【効果が高いかどうか】の視点を設定し、児童が考えた取組がどこにあたるか理由とともに交流し、学習を深めることをねらう。	□今まで学んできたことを生かし、消費者・または生産者の立場を決め、水産業の発展のためにどんなことが考えられるか文章で表現している。 【思判表】
自分の学びを振り返る場	○友達の考えを聞き、自分が考えた取組を振り返る。 ・〇〇さんの考える取組も大切だと思った。 ・△△という考えがなかったから、自分の考えにつけたしたい。 ・自分が考えた取組が一番大切だと思った。なぜなら… ・今回は教科書の資料を扱ったから本からも情報を集めたい。	□水産業の課題を解決するためにいろいろな取組があり、その取組の意味を知ることができるようになったことに気付いている。【態】

第6学年分科会 責任提案

渡島地区 単元名「幕府の政治と人々の暮らし」

提案者 石井 望（北斗市立浜分小学校）

授業者 白鳥 佑一（北斗市立大野小学校）



（１）提言の主張点

渡島ではこの数年間、発達段階を意識した「積み上げ」と「応用」を適正化した問題解決型の学習展開を主軸として、授業研究を行ってきた。単元を通した学習課題の解決をゴールとして最初に提示することで、児童は毎時間、主体的に自分の考えや新たな問いを積み重ね、知識や技能を高めていく。ゴールでは、学習課題の解決に加え、児童が新たな価値に気づき、学習成果が一般化されるような仕掛けを行う。この「積み上げ型の単元構成」が、北海道社会科教育連盟の新3か年研究の目的や達成のための手立てと大いにつながりがあると考え、ブラッシュアップを図りながら研究を進めた。

（２）研究の概要

【研究の柱1 学び方を積み上げる】

まずは「社会科の学び方」を学級全員に習得させることで、児童一人一人に学びに向かう意欲をもたせることを目指した。基本は教科書を使い、必要に応じて厳選した追加資料を提示すること、そして毎時間の学習内容を自分でまとめさせることを積み上げてきた。本時では、どの子も自主的に資料を選択し、課題に沿った本時のまとめを作成することができた。また、授業の最後に社会的用語を使用して表現する学習スタイルの変化により、児童は授業を漫然と受けるのではなく、これまでの学習をつなげ考え議論するように変容した。「江戸幕府はどのようにして全国を治めていったのだろう」という単元を貫く問いに対しても、自ら表現してきた「まとめ」を活用して考えを述べることができた。

【研究の柱2 知識・技能を積み上げる】

積み上げられた知識・技能は、児童と社会的事象の距離を近づける基となり、社会科の見方・考え方を働かせた主体的な追究が生まれることが期待される。

本単元では、これまで取り組んできた「社会科の学び方」の定着により安心して学ぶ環境が構築されたことが、江戸幕府に係る確実な知識を身に付け調査方法等の技能を高める基となった。また、毎時間の地図帳や白地図の活用を通して、地理的な知識・技能の積み上げだけではなく、なかなか日本の歴史の中に出てこない私たちのふるさと「北海道」の登場について心待ちにする言動が増えてきた。本時では、満を持して登場した「北海道」に歓声が上がり、これまで身に付けた地図の見方・考え方を働かせて、「出島」「参勤交代」等の語句を活用した議論が行われた。

【研究の柱3 積み上がった自信をもとに、議論し追究する1時間】

本時における協働的な学びは、積み上げた知識・技能を発揮し、全員が確実に参加できる方法として、敢えてアナログな議論を選択した。個別最適な学びでは、一人一台端末を活用し、「ノートをとる時間」を無くすことで生まれた時間により、本時のまとめや更なる追究が行われた。毎時間の丁寧なまとめが、単元の最後における「江戸幕府は〇〇だが……」「武士にとっては……農民には……」という多面的・多角的な追究と新たな価値の創造につながった。

「社会科の学び方」を土台として、知識や技能を確実に積み上げ、個別最適な学びと協働的な学びについて本時のねらいに即した最適な手段を選択することで、児童一人一人が社会認識を深める授業が生まれる。そのような1時間1時間の積み上げが、社会的事象を多面的・多角的に深く考えることにつながった。今回使用した資料「ウイマム」のような追加資料や社会的用語（語句）については、その目的や必要性、提示の仕方など、学習指導要領をベースに小学校・中学校のつながりを意識しながら、更なる精査・研究を行う必要があると考える。

展開	■学習活動 (○発問・予想される児童の反応)	指導上の留意点 ◆評価規準②評価方法
つかむ 10分	■ウォーミングアップ ■①鎖国によって、外国との交流はどうなったのかを予想する。 ・鎖国だから交流できないんじゃないか ・交流していたと思う。 ■課題を提示する。	・地図帳を活用して、ウォーミングアップをする。
	鎖国のもとで、外国との交流はどのように行われたのだろう。	
深める 25分	■白地図(資料1)から鎖国の取り締まりが厳しそうなエリアを予想させる(グループ) ○外国に近いところはどこだろう？ ・海の近く・江戸幕府の端っここのほう・北海道 ■対馬・薩摩・松前を窓口として、ほかの国や地域と交流が行われていたことを調べる。 ■鎖国のもとで、日本がほかの国や地域とどのような関係で結ばれていたのかをまとめる。 ○幕府はどうして鎖国をしたのにも関わらず、交流しているのかな？ ・その国を占領するため・幕府の力を示すため ■ウイマム(資料2)を見せる ①どんなことに気が付くかな(グループ) ・手をつないでいる外国人がいる・奥に武士がいる ・蛙や昆布がある・もしかしてアイヌ人じゃないか ②この絵は誰がかいたのだろう？ 江戸時代の後期、小玉 貞良(こだま ていりょう)という松前藩の絵師が描いた絵 ・やっぱりアイヌの人だったんだ ③松前藩はどうしてこの絵をかかせたのだろう？ ・アイヌ民族のことを幕府に知らせるため ・アイヌ民族と交流したいから ・アイヌの人たちも幕府に支配されている様子を出したい	◆外国との接点を予想している(発言) ★位置や空間的な広がりを ◆アイヌ民族との交流の意味を考えている(発言) ★事象や人々の相互関係を
振り返る 10分	■まとめるをする。 長崎以外でも、松前藩、薩摩藩、対馬藩を通じて幕府の支配を広げる政策のもと、政治を安定させようとしていた。 ■本時の学習を振り返る。	◆本時のキーワードや課題こどだけせまれているか(発表ノート) ・次回は、幕府による様々な政策についてまとめることについて予告する。

第6学年 責任提案 分科会 記録

司会者 宮崎 世司（札幌市立八軒西小学校 教諭）
提言者 網走地区社会科教育研究会 小学校部会
田中 邦博（網走市立中央小学校 教諭）
鈴木 航（斜里町立知床ウトロ学校 教諭）
渡島社会科教育研究会
白鳥 佑一（北斗市立大野小学校 教諭）
石井 望（北斗市立浜分小学校 教諭）
札幌市社会科教育連盟 研修部会
似内 心悟（札幌市立大平南小学校 教諭）
助言者 石川 篤司（札幌市立札幌緑小学校 校長）
高畠 護（札幌市教育委員会学校教育部 指導主事）
記録者 河原 秀樹（北海道教育大学附属札幌小学校 主幹教諭）



<討議の柱>

「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」を実現するために、どのような授業づくりを行ったのか

網走地区の実践から

網走地区からは、第5学年「未来を支える食料生産 水産業のさかんな地域」の実践を通じた研究提案が行われた。研究のキーワードとして「自己決定」を大切にしながら、子どもたちの学びを見つめる提案であった。単元における問いや見方・考え方を整理しながら単元デザインを行うとともに、子どもたちが自分の考えをもつ場、多様な考えに触れる場、自分の学びを振り返る場を設定するという提案がなされた。その手立てによって、子どもたちが確かな社会認識を深めるとともに、学習したことを基に単元の後半で社会参画につながる新たな価値を創造する1時間に向かっていけるという提案であった。網走のほたて養殖の事例を教材化することで子どもが社会とつながり、学ぶ価値を感じられるようにする手立てを講じる工夫等とともに、子どもの自己決定を大切にすることで、子どもが自ら進んで主体的に学べるようにするために価値のある取組であると、参会者からも声が上がった。

渡島地区の実践から

渡島地区からは、第6学年「幕府の政治と人々の暮らし」の実践を通じた研究提案が行われた。その中で、積み上げ型の単元構成について提案がなされた。

1つ目は、学び方を積み上げることである。どの子どもも安心して学べるようにするとともに、社会科嫌いな子どもたちにも社会科好きになってもらえるための手立てである。ノートではなく、一人一台端末を活用してまとめていく方法によって、板書を共有したり、自分たちでまとめをつくったりしていくことができた。単元の学習問題を意識しながら単元を学ぶことで、社会的事象と子どもの距離を近付けることができ、社会とつながる子どもの姿を具現化することができた。2つ目は、知識・技能の積み上げである。毎時間、地図帳と白地図の活用を行った。歴史の中でも地名をしっかりと地図帳で調べるなどの手立てが効果を上げた。3つ目は、積み上げを生かして議論する時間である。これは、「社会参画につながる新たな価値を創造する1時間」を実現するための時間でもある。「江戸幕府はなぜ265年も続いたのか？どのように全国を治めていったのだろうか？」という単元の学習問題と「鎖国のもとで、外国との交流はどのように行われたのだろうか？」という本時の問いのつながりを大切にして研究が進められていることが見えてきた。

新3か年研究の手立てを意識した取組

網走地区と渡島地区の研究提案からは、北海道社会科教育連盟が目指している新3か年研究の3つの手立てを工夫していることが明らかとなった。「手立

札幌地区研修部会の
取組から

てⅠ社会とつながる教材化と単元デザイン」については、両地区ともに、社会的事象をどのように子どもに身近に感じられるかということが意識された実践であることが成果として挙げられる。また、「自己決定する」「積み上げる」という2地区のキーワードを大切に単元デザインにも価値があった。「手立てⅡ社会認識を深める1時間」については、両地区で単元の学びの積み上げをどのように行っていくのかを考えており、子どもの視点に立ってどのような思考プロセスをたどっていくのかを見取りながら確かな社会認識を深めていた。「手立てⅢ社会参画につながる新たな価値を創造する1時間」については、学習したことを基に議論するために、どのような新たな問いを生むことが大切なのかという議論がなされた。単元の後半に生まれる新たな問いについては、今後各地区でそれぞれ深めていきたい部分である。

札幌地区では、今年度から研修部会を発足させた。若手会員の獲得と、持続可能な組織運営のための新しい部会である。研修部会では、学級経営や授業づくりの方法について共有し、これからの社連を背負う人材を「育てる」ことに加え、研修部自身が学んだことをセミナーで発表し、新しい社会科の学びについて「広める」ことを目指している。セミナーには会員外の先生方を呼ぶことで新規会員の獲得にもつなげていこうとしている。

今年度は大きく3つの活動を行った。1つ目は板書型指導案の作成、2つ目は研究の土台強化としての若手の先生方を交えた研修会、3つ目は新しい授業の創造である。個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を目指す中で、どのような学びが必要なのか、形式に捉われることなく研修し、検討することができたという報告があった。

分科会においては、各地区の会員確保や仲間づくりの視点からも意見交流が行われた。各地区では、研修の要素も取り入れながら、学び合える楽しさを味わう機会を創出し、若手会員を増やすべくアイデアを出し合うことができた。札幌地区の研修部会の発表は、新3か年研究において「研究の土台となる手立て」に位置付く取組であり、今後も期待されるものである。

〈高畠 護 指導主事〉

全道各地区が新研究主題及び研究副主題をしっかりと持ち帰り、具現化しようとしている。渡島地区では学び方による価値を提案されていた。OECDが述べているラーニングコンパスの中ではエージェンシーとして新たな価値を創造する力が大切にされている。どのようにしてエージェンシーを発揮するのかを考え続けていくことが大切である。札幌市では、AARサイクル（見通し—行動—振り返り）を大切に教育活動を推進している。網走地区や渡島地区の振り返りの視点を意識したりキーワードを用いたりするリフレクションもこのAARサイクルとつながっている。札幌地区の研修部の取組においても、一人一人の子どもにどのように見通しをもたせながら学べるようにするかが考えられている。

〈石川 篤司 校長〉

各地区でしっかりと研究主題及び研究副主題を具現化するための手立てが示されている。また、単元の中における見方・考え方を意識して実践が行われていることも素晴らしい。20代の若い先生が多くなり、教育現場はもがき続けている。新3か年研究においては、研究の土台となる手立てが位置付けられたことはとても大切なことである。全道の各地区でも板書型指導案などが有効に活用されている。札幌地区の研修部会のように広める取組を今後も大切にしてほしい。研究主題で目指す子どもを育てていくためには、複雑な社会情勢の中、未来志向を迫る授業は大切であるし、北海道社会科教育連盟の使命でもある。今後も研究を深めてほしい。

助言者より

大会スナップ



中学校研究部

各分野 授業記録

分科会記録

責任提案

責任提案分科会記録



地理的分野研究推進委員会 授業記録（5／5時間）

単元名 「世界の諸地域 アフリカ州～貧困と発展～」

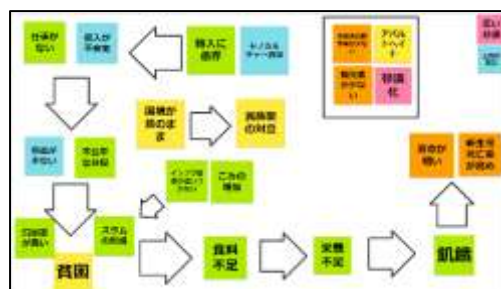
授業者 秋山 遥（札幌市立中央中学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	○アフリカ州の課題を振り返る。 ・アフリカ州の課題についてジャムボードにまとめてきました。どんな課題がありましたか？	・「砂漠化」 ・「民族紛争」 ・「モノカルチャー経済」 ・「貧困」
2	○ナイジェリアの様子を確認する。 ・ナイジェリアを通してアフリカの課題を考えます。まず、ナイジェリアはどこかな？ ・ギニア湾ですね。人口は世界で何番目に多いと思いますか？ ・輸出品は原油と天然ガスです。これはグラフを見ましたね。 原油がたくさんとれる国はアジアにもありますね。 ・アラブ首長国連邦は原油の輸出でお金持ちになりましたね。では、ナイジェリアもお金があるのかな？	・「(地図を指さして)そこ、下の方」 ・「海に面している」
6	○ナイジェリアの写真を提示する。 ・資源が豊富で経済発展を感じる街並みもあるけれどスラムもある。この課題はナイジェリアだけではなくアフリカ全体で共通していますよね。	・「4」「5」「7番目」 ・「モノカルチャー経済」
10	○単元の学習問題を確認する ・ナイジェリアもアフリカも生活に苦しむ人がたくさんいます。生活が豊かになるために解決しなければならない課題は何でしょうか？	・「アラブ首長国連邦」 ・「どうだろう？」 ・「高層ビルなどで発展している」「お金持ち」 ・「変な建物がある」「人が多い」「スラムがある」 ・「ナイジェリアにも課題がある」 ・「資源が豊富なのに、なぜ生活に苦しむ人が多いのか」
ナイジェリアで最も解決すべき課題は何だろうか		
25	○資料を基に学習活動を説明する ①作成してきたウェビング図をナイジェリア版に置き換えましょう。ナイジェリアに当てはまるものとそうでないものに分けましょう。 ②新たにナイジェリアの課題があれば追加しましょう。 ③ウェビング図を構造化しましょう。 ○机間観察をしながら、子どもの活動を支援する。	 
	ウェビング図にある課題で、何を優先して解決すればよいのか	
	○解決すべき課題を追究する。 ・整理したウェビング図の中で、どの課題を解決すると、その課題の周りの矢印の先も変化していくのでしょうか？最	

も優先して解決すべき課題を1つ選んで、その選んだ理由も書きましょう。

3 0

- ・豊かな生活をするためにウェビングの中でどれを解決するとその課題の矢印の先も変化していくのか。課題と理由を発表しましょう。



- ・「最も解決すべき課題は、輸入に依存することと考えた。理由は、新しい工場や農園をつくることで自給率が上がり、輸入に頼らなくなると考えた。また、そうすることで、新たな仕事を生み出すことで命も助かると思った。」



- ・「最も解決すべき課題は、人口増加と考えた。人口が増加することで、人々の仕事がなくなり、食料不足となり、スラムが形成され、栄養不足や病気で亡くなる人が発生するからです。」

- ・「最も解決すべき課題は、対立や紛争を解決することと考えました。理由は、様々な課題の原因となっているからです。例えば、貧富の差がなくなれば、飢餓や食糧不足が少なくなり、寿命が延びて、国が豊かになると考えました。」



4 0

○JICA の方の話を聞く

- ・ナイジェリアの実態について教えてもらいましょう。

○次時に向けて

- ・みんなから出なかった課題もありました。私たちが思っている以上に課題があります。みんなは、アフリカの単元を通してアフリカについて知り、今日はじっくり考えることができました。ここに意味があります。今後も様々な課題について考え続けられるようになりたいですね。

4 5

【JICA 職員の話】

ナイジェリアのおよそ半分の人は農業に従事しているが、農業では稼げない状況です。市場で何が売れているかなどの情報がないことが理由です。みなさんの発表ではなかったが、教育も課題です。教育を受けて英語が話せるようになると、よりいい仕事に就きやすくなり収入を得て貧困から抜け出すことができます。しかし、貧富の差や地域の実情により、学校に行けていない子ども、学校に行けても学べない子どもがいる。お金持ちは、高い学費を払って進学や留学をします。そのような貧富の差があるのがナイジェリアという国です。

今日は皆さんに何を最初に解決すべきかを考えてもらいましたが、大人である私もわかりません。しかし、皆さんに考えてもらったことに意義があると思います。わからないことがあっても、これからも考え続けていってほしいと思います。

<板書>

課題 ナイジェリアで最も解決すべき課題は何だろうか

ナイジェリアはギニア湾に面しており、人口＝2億1千万人と世界で7番目に多く、アフリカ州では1番目に多い(2021年)。多くの資源を有しており、輸出品のほとんどが原油と天然ガスであり、モノカルチャー経済の国である。多民族国家で、250以上の民族があり、言語も500以上存在している。

- ・輸入に依存
- ・人口の増加
- ・対立紛争

地理的分野研究推進委員会 授業分科会記録と実践の振り返り

司会者 渡辺 智広（札幌市立開成中等教育学校学校 教諭）

提言者 阿部 晋也（札幌市立手稲中学校 主幹教諭）

札幌市社会科教育連盟 地理的分野研究推進委員会

助言者 東海林 裕子（札幌市立北陽中学校 校長）

関口 祐太郎（北海道教育庁石狩教育局 指導主事）

記録者 今 直道（札幌市立信濃中学校 教諭）



<討議の柱>

子どもたちが未来を志向していたのか / 研究主題や副主題に迫る授業であったか

手立て1

子どもが、社会とのつながりを実感できる教材化

アフリカ州を取り上げたねらいは、子ども自身がアフリカ州の諸課題と日本とのつながりに気付く、自分の生活とアフリカ州との関わりを「知る」ことであった。本単元の学習では、子どもがアフリカ州の諸課題の要因や背景、関連性についてウェビング図を活用しながら考え、整理していくことで、課題のつながりや関連性を捉えられるような工夫を図ったと説明がされた。

単元のまとめとして、ナイジェリアに焦点を当て、人々の生活がより豊かになるために必要なことを考察する学習を位置付けた。参会者からは、ナイジェリアを取り上げた是非に関していくつか意見が出た。それに対して、教科書の本文やグラフに掲載されており、サッカーなどのスポーツにおいて比較的イメージしやすいこと、また、今後発展の可能性が見込まれ、先進国からも支援を受け、新たなビジネスチャンスがある国を取り上げることで今後の学習とのつながりが生み出せるという意図も説明された。

手立て2

子どもが、社会認識を深める学習構成の工夫

本単元は、アフリカ州の「貧困と発展」を主題とし、各時間で着目する視点を明確にした問いを設定し、考察を進めていく学習構成とした。授業が進むにつれて、子どもはアフリカ州が抱える諸課題を知るとともに、日本や私たちとのつながりにも目を向けられる単元構成となっている。

参会者からは、一般的な単元構成は具体から抽象に迫るものだが、今回は抽象から具体という手順をとった意図はどこにあるのかという質問があった。それに対して、アフリカ州は今まで学習したアジア州やヨーロッパ州と比較して物理的・心理的距離が遠く、イメージしにくい地域であるため、少しでも子どもたちがイメージしやすいように人々の生活を焦点化し、子どもたちのイメージが膨らむように具体化したと説明があった。また、単元の学習問題の「生活に苦しむ」という文言をどのように子どもたちと共有していたのかという質問に対しては、貧困率の資料などを提示することで、課題の共有を図ったと回答した。

手立て3

子どもが、学びをつなげ深める教師の関わり

本時では、平均寿命や乳幼児の死亡率、危険度などナイジェリアに関する資料を基に、「石油のある国＝豊かな国」と学習してきた子どもの思考を揺さぶり、ナイジェリアの課題を解決するために、最も優先させるべきことは何かという学習問題を子どもと共に設定し、考えていくことを目指した。参会者からは、「最も解決すべき課題は…」といくつか挙げられた課題の中から、1つを選択することにした意図について質問や意見が出された。「最も」や「一番」という言葉を設定することによって、他の課題が軽く見えてしまうことへの懸念や、課題同士の関係性への理解が深まらないのではという指摘もあった。それに対して、子どもたちにとって課題を一つに絞った方がゴールは

見えやすいこと、グループで意見の対立を引き出しながら思考に揺さぶりをかけられることをねらいとしたという説明があった。子ども同士のやりとりを通して、協働的な学習を大事にしたかったという願いが授業者からも説明された。

また、ナイジェリアで勤務していた JICA の方にナイジェリアの実情や将来性について話を聞き、自分たちの考えと比較することを通してより学びを深めていけるような場面が設定されていた。参会者から、ゲストティーチャーが話をしていた教育の部分について、子どもたちから学習活動の中で出してほしかった、教育は、よりよい社会を築くうえでの土台であり、そこに子どもたちと授業者側の感覚のずれがあった等の指摘もあった。ゲストティーチャーの活用や多面的・多角的に考察をさせていくアプローチの方法などについても意見が交わされた。

助言者より

〈関口 祐太郎 指導主事〉

単元のまとめとして、前時までの学習を基に、課題の背景や要因について解決しようとする子どもの姿が見られた。アフリカ州の一般課題とナイジェリアという地域特有の課題を捉えさせるところがポイントであった。そこで、日本とのつながりを意識できる資料の提示があると、社会とのつながりをより実感できたのではないかと思う。学習構成の工夫に関しては、歴史的背景や産業構造を主体的に追究する子どもの姿が見られた。州規模でアフリカ全体の特色を明らかにしたうえで、ナイジェリアを取り上げる流れは効果的であった。生徒にどのような視点で、どのように考察させるかを明確にしたうえで単元を構成していたことが素晴らしい。先生の説明の時間は 15 分ほどで、グループの活動が最も多くの時間を占めた。資料提示の順番や手立ての工夫があると、すべての子どもが目標の達成に迫れるのではないかと思う。

〈東海林 裕子 校長〉

I C T 教育と従来型の授業スタイルの融合が求められてくると感じている。手を挙げて発言することに躊躇する生徒が、I C T を活用することでグループの一員として話し合いに参加することができ、その効果が表れた授業であった。次年度の全国大会に向けて、勢いをつける役割を見事に果たしてくれた。授業するごとに成長を遂げている姿や意欲、伝えたいという思いを感じることができた。公民的分野で本時の授業やゲストティーチャーの話が生きてくる。課題把握の段階で子どもの疑問を引き出し、子どもの意欲を喚起する工夫、展開段階で子どもの疑問を生かした課題追究のための声掛けの工夫、まとめの段階で子どもの疑問に応じたまとめ方の工夫などが随所にみられる授業であった。主体的な学習が保障された活動であった。社会科教師が目指す公民の育成につながる授業づくりとして非常に提案性のある授業であった。

実践の振り返り 授業者 秋山 遥（札幌市立中央中学校）

本実践では、アフリカ州の地域的特色を知り、子どもがアフリカ州の現状や将来について考え、諸課題を解決していこうとする態度を養うことをねらいとした。子どもは単元の導入では「アフリカ＝ゾウ、砂漠」という自然環境に関するイメージをもっていたが、授業を重ねるごとにアフリカ州の抱える諸課題を知り、つながりを見出すことができた。ウェビング図を構築することで、諸課題が関連したり循環したりしていることに気付き、「何を優先して解決すべきか」という問いに「どれも解決しなければいけないけれど、根本的な原因は何か？」と真剣に考察することができた。子ども自身が、自分の生活とのかかわりを理解させること不十分であったが、ゲストティーチャーの話を聞くことで、自分たちの考えと実情を比較し、深い学びにつなげることができたと感じている。実践で得た成果と課題、そして分科会でいただいた御意見を参考に、日々の授業を研鑽していきたいと思う。

地理的分野分科会 責任提案

空知地区 単元名「世界の諸地域 ―北アメリカ州―

～ “気づき” をきっかけとして学習を広げる単元構成」

提案者・授業者 福井 雄也（岩見沢市立光陵中学校）



（１）提言の主張点

空知社会科教育研究会では、『空知の恵みを糧に主体的・創造的に社会にかかわろうとする子どもの育成』をテーマとし、とりわけ『未来を切り拓く資質・能力を育む社会科学習』に重点を置いて、授業研究を進めている。具体的には、単元や教材の中で、どのようにして子どもたちが「社会とのつながり」をもち、その社会がもつ“良さ”“課題”へ気づき、その先を考えていくことができるか？ また、どのように気付く(出会う)か？といった点を大切にいく。授業の中で《問いを生む・探求する・多様な考えをつなげる・見方や考え方を確かにする》場面を明確にし、子どもの「気づき」から確かな社会認識へと発展していく社会科の可能性を広げていきたいと考える。

（２）研究の概要

【研究の柱１ 子どもと社会がつながる教材化と単元デザイン】

社会とつながる = 社会に興味をもつということであり、今回の研究では、当たり前だと感じている身のまわりの環境とは異なる状況に出会った瞬間や印象的な気づきこそ、一番大切にしなければならないポイントと考え、単元構成するよう心掛けた。単元を通して、＜結果から原因を考える＞という地理的分野特有のベクトルを念頭に置き、あえて何も知識を獲得していない状態から、アメリカ合衆国の地図・グラフ・写真など各種資料（＝結果）を大量に提示し、生徒自身が好きに選別し、どのような特色があるのか（＝原因）を分析していく取組を軸とする。そのなかで、「身近な社会とのつながり」に気付く瞬間やそこに至るまでの思考の過程を大切に、「子どもと創る授業」の在り方にも迫っていく。

【研究の柱２ 社会認識を深めるための１時間の構成】

今回は、「アメリカ合衆国の農業」についての学習を取り上げる。《問いを生む・探求する・多様な考えをつなげる・見方や考え方を確かにする》ための具体的な授業の仕掛けとして

つながりの発見→違いに気付く→課題の設定→自ら選ぶ→自分ごとへの昇華

という５段階の用意を行うことで、子どもの「気づき」が徐々に焦点化されていく展開になるよう工夫した。

【研究の柱３ 社会参画につながる新たな価値を創造する１時間にするための具体的方策】

地図帳のイラスト（挿絵）比較から、我々の認識では「当たり前」だと思っているような農家の像と大きく異なることに気付かせ、子ども自身の意見をつなぎながら、アメリカの農業の印象や特色を各学級ごとで１つのイメージマップに落とし込む。イメージマップから、それぞれが自分でキーワードを選んで本時の課題を設定。各自が資料を選別・活用しながら分析結果をスライドにまとめ、最終的には、自らが住む北海道や岩見沢市の農業に生かせる可能性について考えることで、学習の地域素材化、【目の前の学び×目の前の日常】をリンクさせている。

(3) 成果と課題

○5学級の実践から、5種類のイメージマップが作成できた中で、当然、同じ気付き項目も多く挙がった。しかし、その気付きにさらに一步踏み込んで問うと、「どう考えたか」という根本の認識に大きな違いがあった。一答で終わるのではなく、丁寧に広げながら、「気付き」の面白さを実感させてあげることが社会科そのものへの意欲喚起につながると再認識できた。

●「資料読み取り」以上の「資料選別」が求められるようになり、多様な“見方・考え方”を育むためには、教員サイドの入念な準備が欠かせない。今回、設定した課題に正対するまとめを子どもが作成する段階で、活用できそうな資料が少なく、悩む者もいた。(逆に、こうして解決できなかった課題を、新たな「問い」として利用することも、また一つ。)

○この学習内容では、地域素材には直接的にふれることができていない。しかし、ここで、得た知識・概念を、最終的に「日本の諸地域-北海道-」の農業分野で、「自分事」に置き換えられるようにするための比較材料(きっかけ)として、生徒に位置づけることを意識できた。もちろん、北海道の農業および岩見沢市の農業を正確に捉えられているわけではなく、感覚での回答にすぎないが、次年度へ向けた授業のつながりづくりとしては、一定の成果を得られたようには感じる。

(4) 本時の指導案

段階	教師のはたらきかけ	生徒の活動	仕掛け・評価
課題	1. 「アメリカが生産量1位の農作物クイズ」を数問出題する。 2. 「各国の食料自給率の比較グラフ」を提示する。	○アメリカの農業のイメージを大まかにふくらませる。	仕掛け1 ～発見～
	3. 「カリフォルニア農家と日本農家の比較イラスト」から、疑問を抽出。 ○イメージマップを活用して、意見をつなぎ、より細かなイメージ構築。	○1・2の取組によって生まれたイメージをもとに、具体的資料からアメリカ農業に対する「気付き」を数多くあげる。 →ペアでの交流・全体共有。	仕掛け2 ～気付き～ □アメリカの農業について、資料をもとに、比較・関連させながら、特徴をとらえることができる。 【主】
説明 まとめ	4. イメージマップ内のキーワードをもとに、課題を作成する。 5. アメリカ合衆国の「適地適作」について、地図を用いながら紹介・説明。 6. 教科書や資料集に掲載されているアメリカ農業に関する写真や資料を数多くロイロノートで配信する。 →回答共有・交流タイム →ロイロノートで提出された各々の分析を画面にも表示しながら、全体への問い返しなども行っていく。	○自らの興味や疑問を再度踏まえ、課題を設定する。 ○アメリカ農業の基本的事項について認識する。 ○タブレットに配信された写真や資料から課題解決に適するものを選び、そこから読み取れたことをもとに、アメリカの農業カードを作成する。	仕掛け3 ～課題設定～ 仕掛け4 ～選択・活用～ □アメリカの農業について、自らキーワードを絞って課題を設定し、資料を選んで解決に向かうことができる。 【思・判・表】
	7. 【理解深化】の問題の提示。	○深化問題に取り組む。	仕掛け5～昇華
北海道の農業(岩見沢の農業でもOK)に取り入れられそうな アメリカ農業の技術や取組は？			
深める	→北海道の農業との類似点(土地の広さや適地適作、活用技術など)を補足。	→「自分ごと」として、今後の学習へつながるきっかけをもつ。	
振り返り	8. 本時の振り返りを記述させる。	○学習を振り返り今後につなげる。	

地理的分野分科会 責任提案

十勝帯広地区 単元名「世界の諸地域—アジア州—」

提案者・授業者 松林 一彦（更別村立更別中央中学校）



（１）提言の主張点

①単元を通した学習課題を設定し、探究課題に向かう道筋を示すこと

②パフォーマンス課題を設定し、課題解決に向け既習事項を活用し、説明や発表する活動を取り入れること

これらの２点を行うことで、生徒がより主体性をもち、学習に向かうことができるようになるのではないかと。また、より効果的な方法などがあるのではないかと。

（２）研究の概要

【研究の柱１ 子どもの主体性を高める学習問題と教材化】

本単元では、単元を通した課題を解決するため、生徒自身が自ら学習に取り組めるようにパフォーマンス課題を設定した上で、１時間単位で学習課題を設定し、学習し考えを整理するためのワークシートの工夫やパフォーマンス課題をまとめるための ICT 機器の活用場面を毎時間設定した。

特に本時では、パフォーマンス課題に取り組ませることで、これまでの既習事項を整理整頓し、スライドを作成し、交流する中で、生徒の主体性がより高まり、に学習に向き合うようになるであろうと考えた。

【研究の柱２ 「見方・考え方」が働く学習展開】

本単元では、単元を通し、パフォーマンス課題を設定した。生徒自身が主体的に学習を進めたうえで、学んだことを生かし、生徒同士で発表し自身で修正する場面を単元の中に設けた。

また、パフォーマンス課題に取り組むために授業ごとに新聞の記事やコラム等を使用し、政治分野や自身の好き嫌いで選択するエリアが偏ることのないように、工夫をした。また、級友の意見を聞き、考え方を見つめ直すことで、より、見方・考え方が働くであろうと考え実践を行った。

（３）成果と課題

①単元を通した学習課題を設定し、探究課題に向かう道筋を示すこと、②パフォーマンス課題を設定し、課題解決に向け既習事項を活用し、説明や発表する活動を取り入れることにより、生徒一人一人が主体性をもち、１時間ごとの授業に取り組むようになったと感じる。

また、学習する前の予想は、単元を学習後に生徒自身の最初の考えとの違いや、最初の考えにより知識の厚みをもたせることができたと感じられ、より効果的であった。

最初の思考と比較でき、次の学習に繋げていくことができるため、アジア州以外の他地域でも主体性をもち取り組むことが期待できる。

授業を行っていく上で、新聞の記事を１時間に最低１記事を目安に配布した。政治的な友好関係や生徒の印象（好き・嫌い）などを限りなく少なくしようと考え、経済の視点を中心とした新聞を選択した。

記事は、毎時間読む時間を確保するのではなく、自分がパフォーマンス課題を解決する上で、必要だ

と感じるものを取捨選択できるよう、補助的な役割を目的として配布した。

本時の中で、自分の意見を級友に話し、フィードバックをもらう展開を作ったことで、第三者の視点が入る又は、自分の意見が他者のアドバイスとなるという活動は、生徒の気づきと主体性を高められた。

(4) 本時の指導案

7. 本時の指導＜8時間目＞

(1) 本時の目標

- ・アジア州において急速に経済が成長してきた理由や課題について多面的・多角的に考察し、具体的に表現している。【思考・判断・表現】
- ・自らの学習を振り返りながら、粘り強く考察することを通して主体的に探究課題を追究し、パフォーマンス課題に取り組もうという態度を示している。【態度】

	学習活動	教師の支援	評価
導入 5分	○アジア州の地形の問題を出し合う。 指示（3分 5人 3問）	孤立するような生徒への声かけ	
展開 35分	○本時の目標の提示 アジア州各地域の訪問でどこの地域から回るべきかを提案しよう ○既習事項を整理し、記入させる ○パフォーマンス課題の提案を作成させる ・自分の意見を記入（入力）させる ○自分の作成したパフォーマンス課題の意見を級友にプレゼンテーションし、意見を求める。 （1人2分×3回） ○もらった意見を基に、自分のパフォーマンス課題を修正させる	資料読み取りの苦手な生徒への声かけ、見とり	ワークシート 【思考・判断・表現】 ワークシート 【態度】 ワークシート 【態度】
終末 5分	○修正したパフォーマンス課題を発表させる （2～3人程度）		

司会者 渡辺 智広 (札幌市立開成中等教育学校 教諭)
提言者 空知社会科教育研究会
福井 雄也 (岩見沢市立光陵中学校 教諭)
十勝帯広社会科教育研究会
松林 一彦 (更別村立更別中央中学校 教諭)
助言者 東海林 裕子 (札幌市立北陽中学校 校長)
関口 祐太郎 (北海道教育庁石狩教育局 指導主事)
記録者 今 直道 (札幌市立信濃中学校 教諭)



＜討議の柱＞

子どもたちが未来を志向していたのか / 研究主題や副主題に迫る授業であったか

空知地区から

空知社会科教育研究会では、『空知の恵みを糧に主体的・創造的に社会にかかわろうとする子どもの育成』をテーマとし、『未来を切り拓く資質・能力を育む社会科学習』に重点を置いて授業を進めている。特に、子どもの気付きを通じた実生活と学びの関係性、社会的事象と出会いに力を入れて授業づくりを推進してきた。今回は世界の諸地域の中の北アメリカ州を扱い、とりわけアメリカ合衆国の農業の授業において、子どもたち自身の気付きから問いを生む場面、ペアワークやグループワークを通して多様な考えをつなげる場面、見方・考え方を確かなものにしていく場面を明確化し、子どもの気付きを確かな社会認識へと発展させていく授業づくりを進めてきたことが主張された。

子どもの「気付き」を
きっかけとした授業構
成と実践

岩見沢市はスマート農業の先進地であり、近くに岩見沢農業高校もある。農業の漠然としたイメージは子どもの中にあるが、米国との比較を通して自分たちのイメージや思い込みとのずれを大事にし、地図帳の活用や効果的な資料提示を通して、米国の農業の特色や疑問に自分たちで気付けるような工夫を図った。特に、個人での思考や協働的な学習を通してイメージマップを作成し、板書として視覚化することで、一人一人の気付きを学級全体で共有しながら気付きのレベルを向上させていくというねらいも主張された。例えば、カリフォルニアの農地の中になぜ飛行場があるのかという気付きから、その飛行場の利用目的や輸送される農作物などへ関心を広げていくことができたという効果があったと報告された。

参会者からは、何をもって「自分事」として子どもが捉えたのかを判断することが難しいという意見が出る一方、アメリカの農業と自分たちの地域の農業との関わりを捉えながら自分事に昇華する場面は非常に参考になったという意見もあった。また、資料の取捨選択に関する話し合いの中で、授業者が意図的に複数の資料を配付する理由について質問が出され、地区からは枚数を多くすることで資料に一瞬でも触れさせるきっかけにしたいという説明があった。話し合いの中では、イメージマップの作り方についても多くの意見が交わされた。

十勝帯広地区から

十勝帯広地区社会科教育研究会では、「自ら参画し、郷土から次代を担うたくましい子どもの育成」をテーマとし、研究副主題に『見方・考え方を鍛え、『資質・能力』を育む社会科授業』と設定し研究を進めている。副主題を授業で具現化する視点として、「子どもの主体性を高める学習問題と教材化」、「『見方・考え方』の働く学習展開」を設定していることが主張された。今回は、世界の諸地域におけるアジア州を中心に授業づくりを進めた。本時では単元を通して学んできたことを活用し、パフォーマンス課題に取り組む構成となっている。また、パフォーマンス課題にはルーブリック評価を用いたことが報告された。

子どもの主体性を高める学習問題と教材化

参会者からは、パフォーマンス課題について多くの意見が交わされた。どの国との友好関係を重視するのかという課題内容に対して、地理的環境よりも政治的・経済的側面から判断する子もいるのではないかという指摘もあった。それに対して、政治的な視点を可能な限り排除し、地理的・経済的な視点に関わる資料を意図的に配付したこと、友好関係を築く国を選択する際に根拠が示されていれば問題ないと考えていることが説明された。資料の選定や提示の仕方の工夫も含めて、前時までの準備がいかほど大切であるかということも話し合いの中で確認された。また、パフォーマンス課題に対する評価に関して、意見や質問が出された。特に、ループリック評価について、どのような記述があればA評価やB評価になるのか判断が難しいという意見もあった。それに対して、今回のパフォーマンス課題においては、基本的には学習過程の中でB基準を全員が目指せるような評価基準を設定したこと、そして、パフォーマンス課題を交流する前にあらかじめ生徒に取り組ませ、パフォーマンス課題を協働的に取り組んだ後に再度提出させる方法をとったことが説明された。そうすることで、交流前後でどれだけ思考の違いが生まれたかを見取ることにつながった。パフォーマンス課題のループリック作成に関しては、難しい部分もあるので、各地区での協議が必要であることが確認された。

助言者より

〈関口 祐太郎 指導主事〉

1点目は、構造的な単元の設計が重要である。単元全体の課題設定、課題把握、課題解決という学習過程を毎時間の中で意図的に設定していくことが求められる。教師にとっては授業のねらいが明確になり、生徒にとっては学習の方向性が確認できることにつながる。

2点目は、見方・考え方が働く課題の設定が重要である。課題や問いを設定する前に、教科の目標を確認することが大切になる。問いと目標のずれが生じていないか改めて見直してみしてほしい。

3点目は、学習評価の工夫が重要である。生徒が課題を追究したり解決したりする活動を支える推進力となるのは主体的な学びである。生徒自身が学習の方法を振り返り、次の学習につなげていくことができるような学習活動を設計することが必要である。学習したことが社会や日常生活で役立つことを実感できるように、学習活動や教材等を工夫し、学んだことの知識の再生ではなく、未知の内容に対応できる力を育成していけるような授業づくりを進めてほしいと考える。

〈東海林 裕子 校長〉

授業者から提示される問いだけでなく、子どもたちが問いを自分自身で作り続けるたびに、学びの歩みを自覚し、自分の生き方を形づくっていくことにつながる。社会科における問いを形成する力は、一人一人の子どもが社会的事象に積極的に関わって課題を見出して、課題に対して事実即した自分なりの考えと方法をもって取り組んでいき、その過程・結果を広い視野から分析・統合しながら自分を高めていくことで身に付けていくことができると思う。そうすることで、社会的事象を自分との関わりで捉えることができる、解決の視点を設定することができる、課題解決に対してより適した方法を選択することができる、仲間と共に協働して学習を進めることができるなどの子どもの姿が期待できる。

歴史的分野研究推進委員会 授業記録（6／8時間）

単元名 「近代国家への歩み～北海道と近代化の波～」

授業者 野々川 華奈（札幌市立新琴似中学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	○既習事項を振り返る。 ・ 前は北海道の開拓について、学習しましたね。	
5	○明治初期開拓初期における北海道各都市の人口について考える。 ・ 明治初期の北海道の各都市で、人口が多かったところはどこだろう？ ・ 当時、最も人口が多い都市は、函館でした。でも、開拓使が置かれた都市はどこでしたか？ ・ では、なぜ（人口が多かった函館ではなく）札幌が北海道開拓の中心になったのでしょうか？	・ 「やっぱり札幌じゃないかな。」 ・ 「海沿いの小樽の方が発展していたんじゃない？」 ・ 「函館が一番発展していると思うから……。」 ・ 「人口が多い函館じゃなかったんだ。」 ・ 「開拓使が置かれた場所は、札幌だったはずですよ。」 
なぜ、明治政府は札幌を北海道開拓の中心地にしたのだろうか。		
15	○グループごとに、資料から中心課題の解決に迫る。 資料：地図帳 141～142 ページ 北海道の開拓に関わる画像資料 ・ 地図帳から、北海道や札幌周辺の様子がわかりますね。 ・ 資料にある人物は、お雇い外国人です。みなさんが知っているクラークもいますね。 ・ グループで出た考えは、ジャムボードで共有してください。 	 ・ 札幌はロシアから遠くて、本州から離れすぎではないところにあるね。 ・ 札幌は海が近くて、幌内炭鉱から石炭を運ぶルートにあるよ。 ・ どうしてクラークは日本にやってきたんだろう？

3 5	○グループごとに、考察した内容を発表する。 - 各グループから出た意見を、それぞれ発表してください。  ○発表された意見を整理しながら、北海道開拓にとって札幌が重要だった理由をまとめる。 - 札幌は、ロシア対策という国外政策の側面からちょうど良い位置にあったんだね。 - 札幌は、海が近く平野が広がっているため、まちづくりしやすい場所にあったんだね。 - 資源が確保できる炭鉱近くに位置していることで、国内政策の側面からも札幌が開拓の中心になったんだね。 明治政府は、ロシアへの対策など国外に向けた政策や、石炭が採れる幌内炭鉱に近く、その運搬など資源確保の側面、石狩湾が近く平野が広がる町づくりの側面から、札幌を北海道開拓の中心地とした。	- 札幌は、根室に比べてロシアから遠く、防衛のために良い位置だったと思います。 - 幌内炭鉱で採れた石炭を、鉄道で札幌まで運ぶことができたので、資源が確保できました。 - 札幌は平野にあったので、まちづくりに便利だったと思います。 - 札幌はアメリカに近い気候だったので、クラークは農業を教えに来ました。 
4 5	○本時の学習内容を、ワークシートに自分の言葉でまとめる。 今日の授業でわかったことを、ワークシートに書いてみましょう。	

<板書>



歴史的分野研究推進委員会 授業分科会記録と実践の振り返り

司会者 長井 竜太（札幌市立柏中学校 教諭）
授業者 野々川華奈（札幌市立新琴似中学校 教諭）
助言者 千葉 敏雄（札幌市立新琴似中学校 校長）
富久尾 崇（北海道教育庁空知教育局教育支援課
義務教育指導班 主任指導主事）
記録者 成田 芳（北海道教育大学附属札幌中学校 教諭）



生徒が学びをつなげ 深めるための、学習問 題の設定

生徒が主体的に学習に取り組むために、学習問題の設定は重要な位置づけとなる。本時の学習問題「なぜ、明治政府は札幌を北海道の中心にしたのだろうか」について、非常に興味をもてる問題設定であるとの声をいただいた。言うまでもなく、教師の側において興味をもつことのできる問題や内容でなければ、生徒の主体的な学びを推進することは難しい。しかし、一方で今回の学習問題に取り組む生徒の姿から、生徒にとって難しすぎる設定になっていたのではないかと指摘もあった。学習問題の設定に向けて活用した 1920 年の函館、小樽、札幌の人口資料についても有用であったと言えるが、どの年代の資料を、どのように提示するのが適切か、また、札幌以外の都市の利点などを正しく整理することなど、今後の課題が示されたと言える。授業の中で最後に問題について振り返らせる場面は、とてもよかった点として共有された。

本時においては既習事項と別の情報による「なぜ」の発見を意識する流れであったが、学習活動の中では、他都市に考えを集中する生徒がいるなど、札幌が中心になったのはなぜかという学習問題について思考を深め切れていない様子も見られた。より、生徒が意欲的に学習問題に取り組むためにも、既習で何をどこまでおさえるべきか、各都市の特色等をどこまで確認し学習問題の解決に取り組ませるかなどを、生徒の実態を踏まえ整理しておくことの重要性が確認された。

社会認識を深めるた めの焦点化

本時では北海道の開拓という小学校においても学ぶであろう領域について、歴史的分野の日本の近代化に関する単元に位置づけていくことで、近代化政策の内政面、そして国境確定に関わる外政面の両面において札幌が重要な位置づけであるという深い理解をねらった。そのためにまずは生徒の手持ちの資料である教科書や地図帳を活用させたが、社会認識を深めるために、事前に想定していた“気づいてほしい視点”に向かうように補助資料も用意した。生徒は資料をじっくりと読み込もうとし、想定していた視点に気づくグループも見られた。生徒の思考を促していく意味でも資料は重要な要素である。しかし、せっかく用意した資料は思考を促した側面もあったが、逆に生徒の思考を拡散させた要因ともなった点が指摘された。討議の中では概ね焦点化をもう少しすることで生徒の思考をより深めることができたのではという指摘がなされた。ただし、今回の題材においてお雇い外国人（クラークなど）を資料として提示する面白さなど、既存の資料の位置づけを見直すことにもつながった。

社会認識を深めることを目指す上で、「北海道の開拓」を考えるのか、「開拓使の置かれた札幌」を考えるのか、考える足元をより明確にしていく必要性も浮かび上がった。教材研究にもつながることであるが、開拓使がいつ、どこに、どのような経緯で置かれたのか。事前に“開拓”はどのようなイメージとして生徒に共有されていたのかなど精査して臨む必要があった。足元が明確になるからこそ、社会認識を深めた生徒の姿も明確になると言えるだろう。

分野間の接続に関わ って

歴史的分野の授業であるが、地図帳をはじめとした地図資料の活用についても話題にあがった。どのような見方・考え方を働かせるかを考える上で、本時の授業では地理的な見方・考え方を働かせる場面があった。そのためには、地理の学習においてどのくらい伏線をはっておくか、事前の地理の指導も重要となる。つまりは、単元構成や配列の見通しをもって授業を構想する必要がある。情報過多になる恐れもあるが、地理の資料集をあえて歴史の授業で活用する可能性もあるだろう。分野ごとの学習の柱は大切にしながら、分野間を接続する学習についても、様々な場面で構想していくことが今後は求められるかもしれない。

助言者より

<富久尾 崇 主任指導主事>

まずは学習指導要領を読み込むことが大切。歴史の学習と考えると、政府の要人がなぜそう考えたか、というような立場で迫るとよかったのかもしれない。一方、歴史的分野において、地図の活用は大変重要である。

学習活動において、ICTの活用は効果的である。考察に苦しんでいたグループが他の考察を参照できるのはよい側面。研究の手立て2については、内政面、外政面、2つの側面の設定はよかった。生徒に多面的・多角的に思考させようとするのは大切だが、「明治政府が」という主語などが不明瞭になってしまった。取り上げる題材は身近なものはよいとされるが、視野が狭くなりがちなので、明治政府を意識するような資料があるとよかった。資料の読み取りは技能面で、そこからの考察を主に教師が行っていた。生徒自身が考察に取り組むような学習を山場にできるとよい。思考を促すために、あえてキーワードに即して分けさせてあげる方法もあっただろう。ワークシートの活用については一度教師が模範解答を書いてみるとよい。導入における人口の予想もよい効果だった。ただし、前半部は子ども主体の活動が多かったが、終末部では教師主体の時間が多くなり、タイムマネジメントは重要となるだろう。

歴史の学習を通して、主権者教育の重要性が指摘できる。例えば、当時の社会的課題を解決するために、当時の人々がどのような解決をしたか、こういったことを考えるのが未来志向になるのではないか。今後、ますますティーチングからコーチングに向かっていってほしい。

<千葉 敏雄 校長>

学級閉鎖などある中、授業の準備など進めていただきよかった。授業においてよかったことは、行き詰ったらここに戻るということが明確だった点。ただし、課題について、機会を見てもっと戻しながら進めることができれば、水資源やアイヌとの関わりなどの他の側面が出たのかもしれない。何よりも社連の良さは、今回の授業を見て、それぞれの先生が自分事で授業を捉えていること、これが素晴らしい点であると言える。

実践の振り返り 授業者 野々川華奈（札幌市立新琴似中学校）

授業実践全体を通して、子どもたちが提示資料に熱心に見入る様子が印象に残っている。実際に授業検討において一番頭を悩ませたのは、生徒に提示する資料をどれにし、どこまで詳しく載せるのか、といったことであった。歴史的分野の授業ではあったが、子どもたちが地理の授業で慣れ親しんだ北海道地図を使用したり、歴史的事象を読み解いたりする作業に授業の大部分を割くことになったのは、資料の精選が必要であったと感じている。

資料を読み解く技能は達成されても、その先に自分たちで分類しまとめるという、思考の作業まで到達させられなかったことは、今後の課題としていきたい。

今回の授業は、到底授業者一人では成し遂げられなかった。歴史部会をはじめとする多くのみなさんと、この機会を与えていただいたことに感謝したい。ありがとうございました。

歴史的分野分科会 責任提案

胆振地区 単元名「民主政治と政治参加」

提案者 高橋 孝平（登別市立西陵中学校）

授業者 高橋 孝平（登別市立西陵中学校）



（１）提言の主張点

胆振社会科教育連盟では、「自分事として社会を見つめ、考え、進んで社会に関わろうとする子を育てる」ことをテーマとし、地域のまちづくりについて調べ、考える授業づくりの実践を図った。具体的には、これまでの自分の暮らす地域のまちづくりがどのように行われてきたのかについて調べ、現在のまちづくりを進める上で必要なことを考え、今後のまちづくりの在り方を考える授業の具現化である。これらを通して、主権者として必要な姿勢を養い、未来を志向する生徒の育成を目指した。

（２）研究の概要

【研究の柱１ 子どもが社会とつながる教材化とデザイン（道社連の手立てⅠ）】

教材化の視点として、自分たちの住む街のまちづくりを題材とすることで、子どもと社会的事象の距離を近づけるようにした。実際に登別市において、税金がどう使われ、どのように政策・取組が決められているかを取り上げた。「登別市のまちづくりを覚える」ことが目的ではなく、「将来、登別市に住んでいても、住む街が変わったとしても、住民として判断できること」を目指したものである。

【研究の柱２ 社会認識を深めるための１時間（道社連の手立てⅡ）】

地方自治を学ぶ小単元のうち、とくに前半の各時間で社会認識を深めさせるようにした。「ごみ処理は全国各地で行われているのに、なぜ登別市独自のデザインがごみ袋に描かれているのか」、「社会に必要な法律が国全体で決められているのに、なぜ登別市独自の決まりがあるのか」、「平成の大合併が進んだのに、なぜ登別市は他市町村と合併することにならなかったのか」などの問いを各時間で追究する上で、地方自治のはたらきやしくみ、財政、課題などの社会的事象について捉えていく。自分のくらしが「政治」とどのようにつながっているのかについて、各時間を通して認識を深めさせた。

【研究の柱３ 社会参画につながる新たな価値を創造する一時間（道社連の手立てⅢ）】

単元前半で学んだ知識・技能を活用し、単元後半において、「登別市のまちづくり」という３時間を計画し、社会参画に目を向けさせる展開とした。具体的には、市のまちづくりがどのように進められてきたかを調べる１時間、続いて、市民の立場から多面的・多角的にまちづくりを捉えて社会参画に必要なことについて考える１時間（次頁にて指導案を示す）、最後に市長（行政）の立場になって将来のまちづくりに必要な政策を想像し、予算編成の在り方について考える１時間を構成した。これらを通して、自分がどのように政治に関わることができるのかについてまとめさせた。

（３）成果と課題

身近なまちづくりを題材に、現実に行われた選択・判断から学び、将来の在り方を考えさせる授業を開発することができたので、一層、実践を重ねていく。また、地区の協議で、地域の課題や実際に生じている切実な問題を題材にしてもよいのではないかと意見もあったので、今後の研究に生かしたい。

(4) 本時の指導案

<单元名> 民主政治と政治参加 ― 「登別市のまちづくり②」

<本時のねらい>

登別市のまちづくりについて多面的・多角的に考える活動を通して、立場によって意見や要望が異なることに気づかせ、民主政治の推進に必要な姿勢について捉えさせる。また、地方自治に主体的に取り組む意識を醸成させ、社会参画に必要なことについて自分の言葉でまとめさせる。

<本時の展開>

	◆…主な学習活動 ○…予想される生徒の反応や意識
導 入	◆前時の学習（登別市のまちづくりの様子の変化）について振り返り、内容を思い出す。 ○人口増加とともに必要な施設がつくられていった ○経済面の現状をふまえ、まちづくり計画と対をなす財政計画が考えられているようだ
展 開	登別市のまちづくりを進める上で、どの取組を優先させるべきか？ ◆中学生の自分の思いとして、まちづくりの取組のうち、どれを優先してほしいか考える。 ○自分は商店街の活性化がされるといい ○今の自分には関係のない取組が多い ◆世代や職業の異なる立場にたって、その人が優先順位をどのように考えるか想像する。 ○若者の世代の願いは何か ○観光業活性化のために必要な政策を多くすべきだ ○高齢者が住みやすい町にするためにどの政策がいいだろう ◆担当した立場ごとに集まったグループで意見交流し、ランキングと理由を考える。 ◆グループごとに考えた内容を、全体に発表する。 ○立場ごとに大きく異なる！ ○多くの世代から支持されている取組を優先すべき？ 選ばれていない取組があるが、それは本当に必要がないのだろうか？ ◆選ばれていない取組やランキング下位の取組について注目し、全体で意見を交流する。 ○自分に関係がないと思うものでも必要とする人はいる ○市として理念をもって取り組んでいる内容について市民も知る必要がある ○この取組をすると、将来、市の税収が増えるかもしれない まちづくりを進めるために市民（主権者）として考えるべきことは何か？ ◆主権者としてどのように考えるべきか考える。 ○自分とは異なる立場の人がいることを考える必要がある ○地域の問題を知る必要がありそうだ ○必要な取組を考えたら、行政に伝える
終 末	◆本時の学習を振り返り、考えたことを自分の言葉でまとめる。 課題解決をした生徒の姿・・・様々な立場や面から登別市のまちづくりについて考えることを通して、よりよい政治を実現するために、自分ごととして政治に関わることや多くの人が納得するような解決を導くことを捉え、地域の課題を捉えて考える必要性に気づき、積極的に参画していく意識をもつ（高める）ことができた。

歴史的分野 責任提案 分科会 記録

司会者 長井 竜太（札幌市立柏中学校 教諭）
提言者 胆振社会科教育連盟
高橋 孝平（登別市立西陵中学校 教諭）
助言者 千葉 敏雄（札幌市立新琴似中学校 校長）
富久尾 崇（北海道教育庁空知教育局教育支援課
義務教育指導班 主任指導主事）
記録者 吉田 篤史（札幌市立福井野中学校 教諭）



<討議の柱>

「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」を実現するために、どのような授業づくりを行ったのか

胆振地区の実践から

胆振社会科教育連盟では、研究主題を「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」と設定しており、公民的分野「民主政治」単元開発に力を入れている。自分ごととして社会を見つめ、考え、進んで社会に関わろうとする子を育てるためにということを基本的な考えとし、地域のまちづくりについて調べ、考える学習を行っている。今回は、市のまちづくりを題材とし、「政治について関心を高めるために」「主権者であるという自覚を深めるために」「多面的・多角的な考察、構想のために」という視点から、生徒が住む市町村が将来のまちづくりをどのようにすべきかを考えさせる授業実践を行った。

市民の立場、市長（行政）の立場からアプローチすることで多面的・多角的に考える活動や、自分の言葉でまとめて表現するという活動を通して、地方自治を自分ごととして考えられるという教材化の工夫が報告された。

多面的・多角的な見方・考え方を養うための工夫

今回の実践を通して、成果として挙げられた点は、展開において、「中学生の立場」で考えさせた後、「異なる他人の立場」で考えさせることで多角的な思考を促し、様々な立場の人がいることをふまえて自分ごととして政治について考える姿勢を養うことができたという点、問い返しの発問によって、生徒の思考にゆさぶりをかけることができたという点、思考・判断した内容の視覚化について板書の工夫をし、また ICT を活用して他者と協働しながら思考を働かせることができたという点である。今後の課題として挙げられた点は、さらに切実性をもった課題にするためにはどうすればよいか検討する必要があるという点、実際に議論となっている社会的問題を題材にすることでより身近に感じられる授業にしていくことで合意形成をして多様な立場の考えを1つに擦り合わせるなどの経験をさせていくという点である。今回は、公民的分野を通して、「社会参画」を意識させる授業実践を行ったが、地理的分野や歴史的分野でも「社会参画」を意識した授業実践を考え、郷土を題材にした教材開発にこだわっていきたいという報告がなされた。

自分ごとにしていくための教材化

参加者からは、生徒自身がどのくらい登別市の政治について自分ごととして考えることができているのかという質問があった。これに関しては、政治についての興味・関心は薄く、市の歳入で大型商業施設を作ってほしいなど他者ではなく自分中心に考えてしまっている生徒が多かったという。しかし、この授業を通して政治を身近に感じることができ、授業後はほとんどの生徒が選挙に参加したいと答えたという成果が報告された。

また、今回の実践では授業者が準備にとっても時間をかけており、他者が実践する場合にはいろいろな難しさがでてしまうという指摘もあった。これに関しては、授業者によるアプローチだけではなく、NPO 法人など外部人材の活用も視野に入れていくという方法もあるという助言もあった。

さらに探究を深めるために、署名を集めて条例案を地方議会に提出しても良いのではないだろうかという助言もあった。

司会者からは、文部科学省の調査官が全国中学校社会科教育研究会で、身近な教材を積極的に活用すべき、そして原点は教科書ではなく学習指導要領であると助言されたことを挙げ、今回の実践はそのような事が十分意識された授業であるという感想が述べられた。

ご助言の先生から

〈富久尾 崇 主任指導主事〉

身近な社会的事象を取り扱い、主権者として考えさせる手立てがある良い実践である。考察し、構想するというのは、社会と関わることを選択し判断することであり、その場面を意図的に位置付けることが大切である。今回の実践では、いろいろな立場から、その人にとって大事なことは何かを考え、構想する力を高める学習活動であった。

また、今回のように授業後に授業の改善を考える場合、徹底的に生徒たちの学習成果に着目し、ねらいとする資質・能力を身に付けられたかということの評価することも1つの方法である。

市長として考えるという活動を学習指導要領から振り返ってみると、地方自治では住民としての自治意識の基礎を育成することに重きを置いて授業づくりを行うべきである。「まちづくり」ではなく「自治とはなにか」ということを考えさせたり、「国政」と「地方自治」は何が違うのかという視点で、地方自治は自分の意見が反映されやすいということに気付かせたりすることができれば政治への参加に意欲的になる生徒が増えていくはずである。

私たちが目指すところは、生徒の資質・能力の育成である。繰り返し、社会的な見方・考え方を働かせる意図的な工夫をしていくことが大事であり、なにより現場の授業を大切にするという教師自身の姿勢が重要である。

〈千葉 敏雄 校長〉

地方自治の分野において、「まちづくり」を教材として扱うことは教師、生徒ともに楽しく行うことができる。しかし、どこに視点を置き、汎用性が高い授業にするかが重要だと考える。例えば防災の観点から考えると、中学校で経験した授業が生徒自身にとって、将来どの場所に居住するのかということを考えるきっかけにもなる。このように、生徒たちの将来的な思考に根をまけるような授業を計画し、実践していくことが大切である。

公民的分野研究推進委員会 授業記録（6／7時間）

単元名 「私たちの暮らしと経済～これからの暮らしと経済～」

授業者 川股 直樹（札幌市立羊丘中学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	○前時の振り返りを行い、札幌市が札幌ドーム維持のために税金を投入していることを捉えさせる。また、それはどうしてかを問う。 	○前時の振り返りを行い、なぜ札幌市が札幌ドーム維持のために支援しているのかを考える。 ・建設費が 422 億円、土地代と合わせて 537 億円かかっている！ ・札幌市は札幌ドームのために、毎年十数億円を投入している。 ・経営を維持するためにみんなの税金を使っている。
	赤字経営なのになぜ、税金を使って札幌ドームを維持しようとするのか？	
10	○『オクリンク』を活用し予想させる。また、検証するにあたって、どのような資料があればよいのかを社会科班で吟味させる。 ○資料集から資料を収集し、社会科班ごとに調べるように指示する。他に資料が必要な場合は、クロームブックから探させる。  	○オクリンクを開き、課題に対しての予想を考える。また、予想を検証するためにはどんな情報があれば良いのか、社会科班で交流する。 ・札幌ドームがあることで、儲けが出るからかな。 ・札幌ドームがスポーツの他に何に使われているのか知りたいな。 ・地域住民の声があったら聞きたいな。 ○札幌ドームに税金を投入する理由について必要な資料を集め、資料を用いて説明するために交流する。調べたことを班ごとに Y チャートにまとめ、発表し、交流する。 ・イベントなどを行うと、地下鉄やホテル、飛行機などを利用するため、経済効果が高まる。 ・飲食店は札幌ドームがあることで儲けることができる。 ・地域の安全、安心を守るための取り組み（豊平警察署との連携等） ・町内会や町づくり協議会の活動への参加 ・ゆきひろば（冬季の敷地開放事業）を実施している。 ・大規模災害時の避難場所となっている。 ・健康、体力づくりが行え、超高齢社会において、健康寿命を延ばす役割がある。 ・スポーツの国際試合などが行われている。

3 5

札幌ドームはスポーツだけの施設ではなく、地域活性化を根ざしていたり、経済効果の高まりや社会資本としての役割を担っていたりしている。

○札幌市が札幌ドームに税金を使っている資料から、自分たちの税金が札幌ドームの価値を支えていることにながっていることに気付かせる。

○身の回りの赤字経営について触れ、社会資本の重要性を促す。
東豊線が赤字となっている資料を提示する。



○札幌ドームを支えている税金を納めているのは自分たちであることを捉え、自分たちも札幌ドームを支えている一員であることを掴む。

・いろいろな価値がある札幌ドームを支えているのは自分たちの税金なんだ！

○身の回りの赤字経営について理解し、社会資本の重要性を捉える。

・地下鉄の東豊線や JR 北海道も赤字経営だったんだ。でも、もしなくなってしまうたら困るな。
・赤字経営でも残すことで、自分たちの生活を支えてくれているんだ！

4 5

○振り返りシートを書くように指示し、数名発表させる。



○ワークシートに振り返りを記入し、数名発表する。

<板書>



公民的分野研究推進委員会 授業分科会記録と実践の振り返り

司会者 西澤 英剛（札幌市立向陵中学校 教諭）
提言者 小林 弘明（札幌市立厚別南中学校 教諭）
助言者 佐藤 雅哉（札幌市教育委員会 指導主事）
工藤 真嗣（札幌市立星友館中学校 校長）
記録者 本間 大輝（札幌市立中島中学校 教諭）



社会とのつながりを 実感できる教材化

本単元は、私たちの生活が、市場経済の仕組みだけではなく、国や地方公共団体が整備したり提供したりする社会資本や公共サービスによって成り立っていることを理解すること、そして、社会の変化に応じて、限られた財源をどのように配分するかを考えることで、主権者としての資質・能力を育成することを目的としている。しかし、社会資本は子どもたちにとって考えることが難しい事象であるため、社会とのつながりを実感するには身近でタイムリーな題材を教材化することが必要だと考えた。そこで、今回の実践では、今年度札幌市の財政の中でも話題になり、事前の子どもたちへのアンケートでも身近な存在であった「札幌ドーム」を取り上げることとした。実際の授業においても、子どもたちが社会とのつながりを実感しながら考えていきやすい教材であった。

参会者からは、社会資本の価値を捉える際に、「自分にとっての価値」と「誰かにとっての価値」のどちらを見出すことを目的としていたのか、そして、大人の中でも札幌ドームの在り方について結論が出ていないのに、子どもが自分事として捉えるのは少々難しいのではないかという指摘がなされた。

授業者からは、今回の授業は札幌ドームの今後を考えるのではなく、札幌ドームを通して、社会資本の重要性に気づくことを目的としていること、「自分にとっての価値」ではなく「誰かにとっての価値」を見出すことで、札幌ドームには様々な価値があることを多面的に理解するとともに、札幌ドーム以外の社会資本も同様であることに気付くという狙いがあったことが説明された。

また、授業の冒頭に授業者から札幌ドームの維持管理にかかる 90 億円があれば、札幌市の小中学校の全教室にクーラーが設置できると説明があり、子どもたちに問いかけると「クーラーの方がいい」という発言があった。参会者からは、この発問を授業の最後にもう一度することで、子どもたちの社会資本についての考えの変容を見取ることができたのではないかという指摘があった。

子どもが、学びをつな げ深めるための教師 の関わり

本時の展開では、「赤字経営なのになぜ、税金を使って札幌ドームを維持しようとするのか？」という学習課題に対する予想を立てさせ、交流をしたうえで、予想を検証するためにはどのような視点で考えたらよいかを子どもたちに問いかけ、「社会資本」「経済」「地域」の視点を設定した。その後、課題を解決するための調査活動の場面では、設定した3つの視点に基づき授業者が作成した資料集から資料を選択し、思考ツールのYチャートにまとめていた。

参会者からは、視点を3つ立てることで、子どもたちが見通しをもつことができたこと、そして思考ツールのYチャートを用いたことで、子どもたちの考えが構造化されたことを評価する声があった。

また、3つの視点については、子どもたちの発言をもとに設定したものだが、予め授業者が決めていたものだったのか、他の視点が出てきたらどうする予定だったのかという質問がなされた。授業者からは、1年生の時から授業を通して立場や視点を意識させながら授業をしており、そうした日常の関わりから子どもたちの発言を授業者が予想することができたため、事前に用意していた視

点と相違なく授業を進めることができた」と説明がなされた。

また、授業者が作成した資料集についても議論が多く交わされた。提示された資料が多く学習活動が難しかったのではないかという指摘や、挙げられた資料は肯定的な資料が多く、否定的な資料も入れたらよかったのではないかという指摘については、授業者から、資料を取捨選択する技能も身に付けさせたいこと、資料が多いからこそ、資料同士のつながりや視点同士のつながりをつかみ、多面的に考察することにつながると考えたことが説明された。

加えて、子どもたちにとって身近な札幌ドームであれば、初めから資料を用いずとも、教師が子どもたちに「札幌ドームと地域の間には関係性がないだろうか」と問いかけることで、視点のうちの1つである「地域」については考えを導き出すことができたのではないかという指摘もあった。

<佐藤 雅哉 指導主事>

助言者より

羊丘中学校の生徒にとって身近である札幌ドームを教材として取り上げ、単にスポーツ施設ではなく、避難場所やまちづくり活動への貢献など、多様な側面に気付かせるような資料の工夫が図られていた。Yチャートの活用では、生徒が分析的に情報を整理する中で、1つ1つの情報をつなぎ合わせ、札幌ドームが持つ多面性に気付かせるような工夫が活きていた。また、構造的な板書を通じて、生徒の考えをまとめるだけでなく共通理解を促すという工夫も見られた。学習課題を提示した際にも、子どもたちの頭の中で課題が明確に理解され、答えのすぐに見つからない、考える価値のある問いであるという意識が生まれていた。一方で、今回の授業では、金額には表すことのできない価値に生徒自身がどう気づいていくのかがポイントであった。そのため、資料を読み取る学習活動の中で「資料にこう書いてあるから、こういう価値がある」で留まらず、その情報に加えて、自分自身は札幌ドームにこうあってほしい、あるいはこうあるべきだという子どもたち自身の思いや願いも踏まえた授業展開にしていくとさらに深まりが生まれたのではないかと感じる。

<工藤 真嗣 校長>

赤字経営を抱えながらも社会資本を存続させなければならないという状況は、どの地域においても起こっている事象である。この事象を子どもたちが考えやすい身近な札幌ドームに置き換えて教材化を行ったが、この実践は、札幌ドームを他の社会資本に置き換えることで、どの学校でも実践可能であるため、非常に提案性の高い授業であった。財政においては、福祉サービスなど生活に直接関係のあるものだけでなく、社会資本などさまざまなことに支出していくことが必要となる。そのことに子どもたちが気付くことができるような授業実践が出来ていくとよい。また、ICTを活用して行う「調べる」「交流する」「まとめる」という授業の流れの中で、考えをより深化させるために子どもたち同士の「練り合い」を行っていくことが大切である。

実践の振り返り 授業者 川股 直樹（札幌市立羊丘中学校）

「見えないものを見えるように」。私は今回の授業を通して、掲げていたスローガンである。表面的な部分のみならず、そこから派生する見えない部分（側面）に気付かせたいという思いから授業がスタートした。羊丘中学校の校区に隣接する地域にある札幌ドームを題材としたのは、日ハムが移転したことによって生徒自身が、地下鉄が混まなくなって良かったと発言していたことが始まりである。

授業実践を振り返ると、授業を構築していく上で大切にしていたねらいがおおむね達成された。生徒の振り返りから、単なるスポーツだけの札幌ドームではなく、社会資本の側面や経済の側面、地域の側面に気づく生徒や、これからの札幌ドームをどうしていけばよいのかを話している生徒がいた。札幌ドームを学ぶことによって社会資本があることによる影響を生徒が概念的にとらえることができた。

今回の実践を通し、「生徒の実態（自分事）」「学ぶ価値」の2点が授業を作る上で大切であることを再認識できた。今後も本実践での学びが土台になり、様々な場面で生きて働く実践を行っていきたい。

公民的分野分科会 責任提案

旭川地区 単元名「市場のしくみとはたらき」

提案者 庭瀬奈穂美（旭川市立春光台中学校）

授業者 吉田 健太（旭川市立春光台中学校）



（１）提言の主張点

旭川市教育研究会社会科研究部では、「7年間の学びを通して、様々な立場・広い視野で「世界」を見ることができる子どもの育成」を研究主題とし、研究を進めてきた。その中でも、『「学習問題の吟味」を切り口に、課題（問題）解決的な学習過程の充実を図る』を副主題とし、「課題をつかむ段階」に重点をおいてきた。「課題をつかむ段階」の指導の工夫や資料の工夫、さらに単元全体を見通したり、他分野との関連を意識したりして単元を構成することが子どもの主体的な問題解決に繋がると考え、研究を進めてきた。

（２）研究の概要

【研究の柱１ 子どもと社会がつながる教材化・単元デザイン】

価格という生徒の身近なものを教材として取りあげた。また、価格が変動するという事実そのものは、地理的分野で既習の内容であるが、どのように変動するのかといったメカニズムは理解していない。そこで、実際に体験している社会的事象のメカニズムを追究することを通して、「価格の変動」という社会的事象を多面的・多角的に捉えさせることができると考えた。

【研究の柱２ 社会認識を深めるための１時間】

人間の営みを通して社会的事象の意味を考えることに着目し、消費者として生徒自身が日常から経験している行動を切り口に、他の視点からも社会認識を深められると考えた。また、旭川市教育研究会では、他単元や他分野とのつながりを重要視し、研究を進めている。そのため、1単位時間の中では完結していないが、これをきっかけとして単元全体を通して、日常生活の人間の営みの意味を複数の立場や視点から考察したり、他単元で学習したこととつなげたり、深めたりすることが社会認識を深めることに繋がると考えている。

【研究の柱３ 社会参画につながる新たな価値を創造する】

価格の変動メカニズムについての理解を基盤として、消費者として社会にどのようにかわるかという視点を加えることによって、社会参画の意識の醸成にもつながると考えている。例えば、本単元の学習と、企業の果たす役割や経済主体の理解といった、他単元での既習内容を関連付けて考察させたい。そのことによって、消費者としての行動をどのように選択するのかの判断を問う学習を検討している。

（３）成果と課題

本研究の成果として、①価格決定ゲームによって、生徒に“実感”をもたせながら、学習を進めることができた。②身近な例を用いたことが、学習内容を“つかませる”ことにつながった。③“つかむ”を充実させたことで、その後の展開が効果的であった。身近にある“ものの価格”の決まり方に

ついて、自分の言葉で説明できた生徒が多かった。の3点が挙げられる。特に、日常生活と密着しているところから、導入の“つかむ”段階につながったことは、生徒が主体的に学んだり、考察したりするうえで効果的であったと考える。

課題としては、①生徒たちに実際の社会的事象との関連をより実感させるとともに、より多面的・多角的な思考に接続するために、ゲームを改善したり、ゲームと学習内容を関連付けたりすることが必要である。②今回は、単元の導入段階として実施したが、単元の学習の最終段階の部分に重点をおき、消費者としての行動と社会的事象の関連に着目させることで、社会参画につながる視点を身に付けさせるといった改善が可能である。の2点がある。

(4) 本時の指導案

6 本時の授業構成

(1) 目標

価格の決定(変動)には、消費者の需要量と生産者の供給量が影響していることを説明できる。

【知識・技能】

(2) 展開

	学習活動	教師のはたらきかけ	・留意点 ⑤評価
つかむ (10分)	①前時までの復習(口答) ②流通の過程で、ものの価格が決まることを確認する。(既習事項) ③本時の目標を確認する。 <本時のねらい> 価格決定までの流れについて知ろう! ④身近なものの価格について、実際の例をもとに考える。 ※りんごの価格推移をグラフから読み取る(変動している)。 (ワークシートに個人記入→共有) ⑤本時の課題を把握する。 <本時の学習課題> 価格決定に影響を与える要因は何だろうか。	※生徒とのやりとりの中で既習事項の確認をする。 ※ワークシートを配付する。 ※もう一つの例として、サンマの価格推移を示したグラフを提示する。資料1 発問1 なぜ価格は変わっているのか。 ※学習課題の提示	・グラフを読み取る際の視点を明確に示し、短時間の活動にする。
	⑥価格決定に影響を与える要因について話し合いを行う。 【価格決定ゲーム】 ○6~7人班を構成する。 ○班内で消費者と生産者の役割を分担する。 ○消費者側の設定は4人家族。 ※スーパーにお刺身を買って来た。 ※所持金は3,000円。 ○生産者側は在庫4点抱えている。 ※すべて売り切る前提。 ※原価は500円。 ○ゲーム開始。時間は3分。 ○3分経過後、閉店セール開始。 ⇒生産者の「売り切りたい」という思いと消費者の「安く買いたい」という思いが一致することで、価格が決定する...という方向にいきたい。 ○5分経過後、ゲーム終了。 ○ゲームの最中にワークシートを記入しておく。	※活動内容をPPTで提示する。 ※消費者側に配付する指令書 ①購入予定品は生鮮食品 ②所持金は3,000円 ※生産者側に配付する指令書 ①在庫は4点 ②売り切れなければ自分で購入 ③原価は500円 ④開始前にスタート時点の価格を決定すること ※ゲームの過程で生じた売値が変わる流れと、変更の理由を記録できる枠をワークシート内に準備しておく。 ※ゲーム終了後、机を元に戻す。 発問2はゲームの結果をもとにした個人思考とする。 発問2(ゲーム終了後) 売値は何円になったか? 価格決定までの流れは??	・価格の決定(変動)には、生産者と消費者の関係が影響していることを理解させたい。 ・消費者と生産者の関係性で価格が変動し、調整された結果、価格決定に至るという“過程”に着目させることをゲームの主目的としたい。
考える (30分)			

⑦板書で重要語句を確認する。	※黒板に重要語句を整理する。	
⑧需要曲線と供給曲線の意味を理解する。	※売りたい価格と買いたい価格が一致したときにものの価格が決定することを図で理解させる。	
⑨本時のまとめを自分の言葉で書き、交流する。	※まとめの前に、本時の目標と学習課題を振り返る。	⑤価格の決定(変動)には、消費者の需要量と生産者の供給量が影響していることを説明できる。 【知識・技能】
⑩まとめの例から、本時の学習内容を振り返る。	<まとめの例>「消費者」「生産者」「価格」 ものの「価格」は「生産者」の供給量と「消費者」の需要量の関係で変動し、両者が一致したときに決定する。	
⑪需要と供給の関係で価格が変動する具体例を知り、理解を深める。 (質問から具体例を引き出したい)	質問 需要と供給の関係で価格が変動する例は他にないか?	
⑫既習事項として高原野菜の例があることを知る。 (2学年地理的分野【中部地方】)	※クリスマス時期のいちご、母の日のカーネーション、コロナ禍のマスク... ※時期による価格の変動を示すグラフの画像(資料3)を提示し想起させる。	
⑬価格が変動しない例について確認する。	※流通の学習をした際に提示した【お茶の価格】はあまり変動しないことを確認し、次時以降につなげる。	・需要と供給が安定している商品については価格も安定することを確認したい。

振り返る
(10分)

公民的分野分科会 責任提案

釧路地区 単元名「民主政治と日本の政治」

提案者 齋藤 政人（釧路市立幣舞中学校）

授業者 兼平 瑛斗（釧路市立鳥取中学校）



（１）提言の主張点

釧路地区では研究主題を「世界の今と未来をみつめ、持続可能な社会を創造する子どもの育成」とし、副主題「主体的に課題を追求し、協働的な活動を通して社会参画の基礎を育む社会科教育」と設定して今年度の研究を進めた。研究主題の「世界の今と未来を見つめ」とはVUCA（ブーカ）時代を生き抜くために、現代社会の課題と向き合い、よりよい社会を描くビジョン（視点）を養うことを念頭に置き設定したものである。「持続可能な社会を創造する子ども」とは、よりよい社会の実現に必要なのは「対話」であり、児童生徒、教師、地域の人たちと一緒に考え、話し合うことのできる子どもをイメージしたものである。

（２）研究の概要

【研究の柱１ 社会に開かれた「教材化」】

課題解決的な学習を進めるときの教材は必ずしも「すでに解決済み」であるとは限らない。また、その課題解決に中学生だけで取り組む必要性もない。課題解決に向けて尽力している人物、企業、行政、NPO 等が存在している。彼らにフォーカスを当てることで、より問題が具体化され、クリアすべき障壁が浮き彫りになってくる。教師が語らずとも、生徒は自然と「何が問題なのか」「どうすればよいのか」を考え始めるであろうと考えた。一方で、「政治」を扱う場面では特定政党による偏った政治的メッセージとならないよう配慮しなければならない問題があり、この場合はどのような立場の方に協力をお願いすべきか悩むところではあった。

【研究の柱２ 知識と技能を活用する「単元構成」】

単元構成を考える上で重視したことは「繰り返し」「資料の読み取り」「表現する場の設定」の３つである。「繰り返し」とは、単元の導入で扱った内容や資料が再び使われることや、歴史・地理での既習事項を単元の中に登場させること、「資料の読み取り」とは、グラフ・表などの資料を精査し気づきや疑問をもつ契機を多く持つことを意図的に組み込んでいくこと、「表現する場の設定」とは、単元で学習した内容を様々な方法で表現する場を必ず設定することを意味している。

【研究の柱３ 児童生徒が主体となる「本時の授業」】

本時の授業では教師が話す部面を可能な限り減らし、生徒が資料を活用しながら、何を使い、どの項目に着目し、どこまで追求するか選択・判断する場面、生徒の個性や感性を生かした協働的な学びの場面を設定した。

（３）成果と課題

成果としては、単元の導入でしっかりとした課題意識をもたせることができたことである。これは学年全体で実施した事前アンケートや、使用する資料を精査して生徒に提示できたことが大きい。ま

た、単元の課題に向かう推進力が生まれ、単元全体をスムーズに進めることができた。これは単元の導入でしっかりと見通しをもたせることができたためだと考えている。課題は単元や本時の課題設定については賛否が分かれるところであり、研究部としても苦心したところである。また、生徒主体の授業を実現するためには社会的な見方・考え方を働かせる「問い」が重要であること、そして「問い返し」の準備とスキルにはどのようなものが必要かを今後検証していきたい。

(4) 本時の指導案

過程	主な学習活動	教師の働きかけ	留意点
導入 10分	○3つの資料を見ながらグループでどんな資料なのか相談する。	○黒板に資料を掲示する ○有権者の割合、投票率を示す	◆事前にロイロノートを起動させておく
	本時の課題 約半数の投票率で日本の政治は上手くいっているといえるのだろうか？		
展開 30分	○投票率を調べる ○アンケート結果に関する意見を交流する。 ○気づいたことを交流する。 ○気づいたことを交流する ○鳥中のアンケート結果と比較する。 ○政治内容に関する10枚のカードから、関心が高いと思われるものを5枚選び、さらに順位付けする。	○鳥取中学校で行った資料5「18歳になったら選挙に行きますか」のアンケート結果を掲示する。 ○「年代別投票率」のグラフを示す。 ○2022年意識調査アンケートの結果を示す。 ○「選挙に行かない・あまり行かない」と答えた人のアンケート結果を示す	◆ディスプレイに映す ◆黒板に資料を掲示する ◆黒板に資料を掲示する ◆ディスプレイに映す ◆自由な交流を促す ◆ロイロノートで作業
	景気対策 コロナ対策 年金 子育て・教育 雇用対策 財政再建 消費税 防衛・外交 エネルギー・原発 防災対策		
まとめ 10分	単元の課題 国民の積極的な投票を実現するには何が必要か？		
	○今日の課題に対する自分の意見と「必要な情報」「疑問点・不明点」をまとめる。 ○グループ内で交流する	○ロイロノートのカードで今日の課題と単元内で解決する課題や疑問点を整理させる。 ○グループ内で交流させる	

公民的分野 責任提案 分科会 記録

司会者 西澤 英剛（札幌市立向陵中学校 教諭）

提言者 旭川市教育研究会社会科学研究部

庭瀬奈穂美（旭川市立春光台中学校 教諭）

吉田 健太（旭川市立春光台中学校 教諭）

釧路地方社会科教育研究会中学校部会

齋藤 政人（釧路市立幣舞中学校 教諭）

兼平 瑛斗（釧路市立鳥取中学校 教諭）

助言者 工藤 真嗣（札幌市立星友館中学校 校長）

佐藤 雅哉（札幌市教育委員会学校教育部 指導主事）

記録者 宮武 基理（札幌市立琴似中学校 主幹教諭）



〈討議の柱〉 「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」
～見方・考え方を鍛え、確かな社会認識をもとに未来を志向する社会科の学びとは？～

旭川地区の提案授業 の「つかみ」の重要性

旭川市教育研究会社会科学研究部（以下旭川）の責任提案は、公民的分野「市場のしくみとはたらき」～主体的に考え社会に参加しようとする生徒を育む学習～であった。まず、今回の旭川の研究と本大会の研究内容について、研究内容Ⅰと「社会的事象と子どもの距離を近付ける手立て」研究内容Ⅱと「人物の営みを通じて社会的事象の意味を考える本時場面の設定」との関連性について説明があった。旭川は研究主題を「7年間の学びを通じて、様々な立場・広い視野での『世界』を見続けようとする子供の育成」とし、今回の研究の重点として、「課題をつかむ」段階の充実を掲げた。次に、「市場のしくみとはたらき」の4時間構成の単元で、1時間目「価格はどうのように決定するのだろうか」の授業実践が紹介された。学習課題「価格決定に影響を与える要因は何だろうか」の下、生徒を生産者と消費者に分け、刺身の売買交渉をする「価格決定ゲーム」に取り組むものだった。この実践の成果は、①生徒に「実感」をもたせながら、学習を進めることができたこと。②身近な例を用いたことが、学習内容を「つかませる」ことにつながったこと。③「つかむ」を充実させることは、その後の展開に効果的であり、身近にあるものの「価格」の決まり方について、自分の言葉で説明することにつながったこと。改善点としては、①多面的・多角的に考察する手立てとして、（一面的な傾向が強い）価格決定ゲームをどう改善していくか。②消費者の行動が社会に与える影響について考えを深めさせる手立ての工夫、であるとした。参加者からは、商品が刺身にした理由、売れ残った場合や生産者が価格を固定する場合等、価格決定ゲームの詳細についての質問を中心に、質疑応答がなされた。

釧路地区の提案 ファシリテーター役 になる教師

釧路地方社会科教育研究会中学校部会（以下釧路）の責任提案は、公民的分野「民主政治と日本の政治」～民主政治と政治参加における現代社会の課題の学習を通じて～であった。まず、釧路では研究主題を「世界の今と未来をみつめ、持続可能な社会を創造する子どもの育成」副主題を「主体的に課題を追求し、協働的な活動を通じて、社会参画の基礎を育む社会科教育」とした。本大会の研究内容との関連では、Ⅰ社会に開かれた「教材化」Ⅱ知識と技能を活用する「単元構成」Ⅲ児童生徒が主体となる「本時の授業」とした。次に、公民的分野の民主政治の実践では、これまでの傾向として「教員の上から目線」「説教くさく、説明過多」になってしまったという反省をふまえて、今回の「民主政治と日本の政治」6時間構成の単元で、単元の課題「国民の積極的な投票を実現するには何が必要だろうか」の下、1時間目「約半数の投票率で日本の政治は上手くいっているといえるのだろうか」の授業実践が紹介された。「18歳になったら選挙に行きますか」という生徒に対する事前

アンケートをきっかけに、年代別投票率、投票するときに優先項目についての各世代別意識調査等の資料を提示しながら、本時の授業を展開した。この実践の成果は、①単元の課題をしっかりと意識させることができたこと。②学びに向かう推進力が生まれ、単元全体をスムーズに展開することができたこと。改善点としては、①単元の課題や各時の課題が適切だったのか②授業をファシリテートするには、教員の事前準備と生徒への「問い返し」のワードセンスが必要なこと。③生徒の考えやアイデアを分かりやすく「可視化」する工夫が必要であること、が報告された。参会者からは、生徒に「自分事」に感じてもらう手立てとして、他学級のアンケートを活用する、授業の最後で改めてアンケートを取り直して変化を見るのはどうかという意見、地域の選挙管理委員会の協力を得て投票箱を教室に持ち込んで模擬投票をさせた例の紹介があった。また、世代別に異なる棄権の理由も資料として有効であること、留意点として「政治的中立」には配慮が必要という発言もあった。

助言者より

〈佐藤 雅哉 指導主事〉

旭川の提案について、生徒は消費者の立場では考えやすいところだが、消費者側の思いだけではなく、生産者の立場にたって考えると、より学びが深まる。また、需要曲線、供給曲線を理解する手立てとしての「価格決定ゲーム」は有効だろう。昨今の国際情勢、国内の人手不足や記録的猛暑などを背景に、日本国内の物価上昇のことにもつなげていくこともできるのではないか。本時の学びに留まらず、ぜひ、次の場面や授業展開へつなげてほしい。

釧路の提案について、単元の課題や発問は効果的であった。特に、年代別の資料が効果的で、これは、地理的分野（人口の年齢構成）や歴史的分野（これまでの経緯）と関連させることもできるのではないか。

公民的分野では社会参画につながる「合意形成」の場面や、年代別に意識の違いが生まれる場面などがあるが、「対立から合意へ」のプロセスを学ぶことが重要であり、ぜひ「自分事」でとどまらずに、自分たちの手で世の中をよくしていくという社会参画へつなげてほしい。

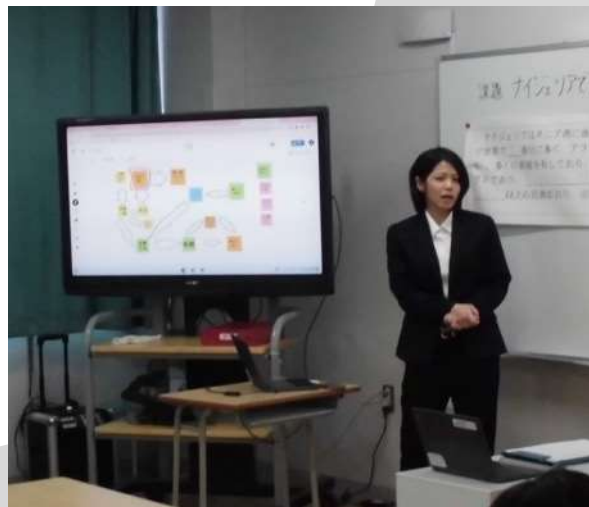
文部科学省からも、社会科でも分野間の関連、他教科・他領域と関連させた授業展開を意識してほしいとの要請があり、主権者教育の充実と合わせて、取り組んでいきたい。

〈工藤 真嗣 校長〉

旭川の提案について、価格の決まり方は様々な要素があるので、理解するのが難しいところである。今回は、まず市場価格のことを理解して、そのことを土台にして、今後、他の価格の決まり方へとつなげていくという、その方向での展開を期待したい。

釧路の提案について、「社会に開かれた教材化」に関連して、企業についてどこまで扱うのかは工夫が必要。また、政党については、政治的中立の観点と、政治的な教養として、政党名や主義・政策を紹介するまではよいと思うが、その良し悪しについては触れることはできない。教師がファシリテーター役になることについて、子どもたちが主体的に活動するためには、授業のねらいや見通しを、生徒にあらかじめ提示する必要があるのではないか。釧路では、義務教育学校への移行が予定されていると聞いている。小中の連携、社会科の教科としての「小中一貫した教育」について、（先進地域として）今後も、情報提供していただきたい。

大会スナップ



第78回 北海道社会科教育研究大会札幌大会

第50回 札幌地区社会科教育研究大会 指導講評記録

『見方・考え方を鍛え、確かな社会認識をもとに未来を志向する社会科の学び』

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 小倉 勝登氏

はじめに

まずは、本大会が開催されることを、心より嬉しく思っております。そして、その会の仲間にいていただいたことに感謝いたします。先生方から熱い提案を受けましたので、私からは、昨年の振り返りも行いながら、昨今の研究のこれからについてお話していきたいと思います。今後の研究の発展に向けて確認したいことがいくつかありますので、お伝えしていきます。

1. 昨年の全小社研北海道大会を振り返って

(1) 学習指導要領を読む

今回の大会でも教材化についての話がありましたが、人を登場させ、人の働きを共感的にとらえること。これがすなわち社会参画のモデルとなるという話でした。北海道ですと大切にされていることだが、これらの教材化を行うとき、学習指導要領ときちんとすり合わせるということがやはり大事であると考えます。わくわくするような熱い教材化を進めていただいているけれども、ぜひ、学習指導要領をしっかり読み込み、理解してほしいと思っております。「本当にそうなのか？」を考えて教材化を行えば α を行うことに意味があります。それができると、「何について調べるのか。」「何について考えるのか。」「最終的に理解することは何か。」を整理し分析する力が身につくようになります。

(2) 単元を通して考える

問題解決型の学習の充実をはかるには、単元で考えることが大前提になります。小学校であれば、単元で考え、45分の授業に位置付けることが大切です。学習問題を設定するということは、単元を通して追究していく大きな大きな問題を考えることです。追及を通して、特色や意味を考えたり、社会とのかかわり方を選択・判断したりします。こういう学習を指していると考えています。新たな教材と出会い、問いが生まれ、さまざまな方法で追及していく。そこで、新しい問いが生まれたり、よりよい社会について考えたりする。こういうプロセスで単元を作っていくとすると、教師はあらゆる場面で仕掛けを作っていくことができると思います。トピック的にせず、パフォーマンス的にせず、単元を通して考える設定にしていきたいです。

(3) 他大会での研究概要と合わせて

私たちの目的は、授業改善をすることではなく、子どもの資質能力を育成することです。資質能力を育成するために授業改善が必要だ、という意識をもつことが大切です。資質能力の育成のために、主体的・対話的で深い学びがあり、そのために、個別最適な学習や、学びの一体化や、GIGAスクール構想があるのです。ややもすると、個別最適な学習やGIGAスクール構想が目的になってしまいうことが少なからずあります。そうではなくて、私たちが目指すところはあくまで資質・能力の育成であり、その大きな構想の中にGIGAスクール構想が組み込まれているということを大切にしたい、というものでした。これらの話は、北海道大会の提案とも共通する部分があると思います。

2.北海道の皆さんと共有したい学び

(1) 社会的事象の見方・考え方(社会的な見方・考え方)

小学校社会科の見方・考え方とは、「社会的事象の見方・考え方」のことです。

位置や空間的な広がり・時期や時間の経過・事象や人々の相互関係などに着目し、(視点) 社会的事象を捉え比較・分類したり統合したり地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること(方法)を指します。

小学校社会科においては、「社会的事象の見方・考え方」を働かせ、学ぶことを重視する必要があります。社会的事象の特色や意味などを考える、社会に見られる課題を把握して、社会への関わり方を選択・判断するために、あくまでも、**子どもたちが働かせるもの**なのです。学習指導要領には「何を考えるか。」は書いてありますが、「どのように考えるか。」は書いていません。解説には、それが書いてあります。

(2) 主権者として求められる資質・能力を育む教育の推進

主権者に関する教育の目的とは、単に政治の仕組みについて必要な知識を習得させるにとどまらず、社会を生き抜く力や地域の課題解決を社会の構成員の一人として主体的に担うことができる力を身に付けさせることです。教育を推進していく上でのポイントは、正解が一つに定まらない論争的な議題に対して、児童生徒が自分の意見を持ちつつ、異なる意見や対立する意見を整理して議論を交わしたり、他者の意見と折り合いを付けたりする中で、納得解を見出しながら合意形成を図っていく過程が重要となります。

主権者教育における各教科等の位置づけの理解

○日本国憲法の基本的な考え方や、政治、経済等に関する知識

○社会的事象等について調べまとめる技能

○社会的事象について(多面的・)多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて**選択・判断したりする力**

○思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力

○社会的事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度

(3) 個別最適な学びと協同的な学びの一体化

一人一人の学びを支えるために、問題解決的な学習過程の中に位置づいていることが必要です。

個に応じた指導、指導の個別化と学習の個性化、協働的な学び、を学習者の視点から整理すると、

○個別最適な学び 「個別最適な学び」が進められるよう、これまで以上に子どもの成長やつまづき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子どもが自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくこと

○協同的な学び 「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子ども同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協同的な学び」を充実すること

このような内容になります。大切なことは、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善をすすめること。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実すること。つまり、問題解決的な学習過程の充実をはかり、その中で考えることが大切なのです。

最後に

平成20年度小学校学習指導要領版による授業実践実施状況調査によると、子どもたちは社会科について、「役に立つとは思っているけど、あまり好きではない」との回答をしています。これは、子どもたちからの宿題です。先生方には、これからも現場の一日一日の授業づくりを大切に続けていってほしいと願っております。

第78回北海道社会科教育研究大会アンケートから

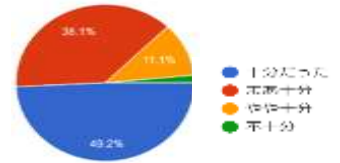
北海道社会科教育連盟 情報交流部

1) 公開授業について

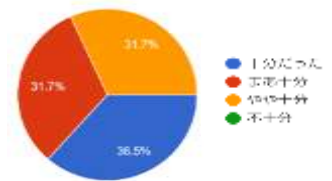
公開授業が研究主題「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」に迫るものであったかという問いに対しては、90%近くの方から「十分」「まあ十分」との評価をいただきました(図1)。

副主題「見方・考え方を鍛え、確かな社会認識をもとに未来を志向する社会科の学び」については65%近くの方から「十分」「まあ十分」と評価をいただきました(図2)。「授業観を変える新たな提案だった。」「子どもたちの発言の随所に未来志向が感じられる内容があった。」という御意見が多く、3か年研究の1年目として提案性のある授業を公開できたことは成果であると考えます。一方、「やや不十分」という評価を30%近くの方からいただきました。「価値を創造する子どもの姿」「未来志向に迫る子どもの姿」に関する御意見が多く、次年度以降の研究の中で明確にしていく必要があると考えます。

(図1) 主題に迫っていたか



(図2) 副主題に迫っていたか



2) 今年度の重点である「見方・考え方を鍛え、確かな社会認識をもとに未来を志向する社会科の学び」について

90%近くの方から「十分」「まあ十分」との評価をいただきました(図3)。成果として、

- ・学習をこれからにつなげていこうとする姿が授業の中で見ることができた。
 - ・社会的な認識を深めるだけでなく、未来に向かう問いがあり、子どもがそこに向けて学びを広げ深めていく姿が見られた。
 - ・子どもたちが将来自分はどう参画していくかを見据えることができていた。
- という御意見をいただきました。

一方、課題として、

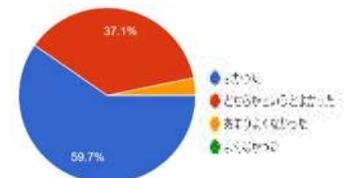
- ・確かな社会認識を積み重ねることで「自然と」未来志向の姿が引き出されるはずだと思うのです。

という御意見もありました。「未来を志向する」ために、本時だけではなく日々の授業や単元でどのような力を子どもたちに身に付けさせていくかを追究する必要もあるのではないかと考えます。

(図3) 今年度の重点



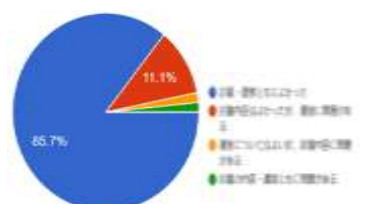
(図4) 責任提案



3) 責任提案・分科会について

責任提案は、96%の方から「よかった」という回答をいただきました(図4)。各地区の特性を生かした教材化の工夫、日々の研究の積み重ねが伝わる場となりました。分科会については、85%の方から「討議・運営どちらも良かった」という回答をいただきました(図5)。各分科会で活発な討議が行われたことが伺えます。しかし、討議の時間が短いといった御意見が多く、今後も同様の時間で行うのであれば、話し合う内容を厳選することも検討すべきと考えます。

(図5) 分科会



3か年研究スタートの全道大会。授業・責任提案・分科会・運営すべてに成果が感じられた大会となりました。アンケートへの御協力ありがとうございました。

開催御礼

はじめに、第78回北海道社会科教育研究大会札幌大会 兼 第50回札幌地区社会科教育研究大会(以下、「本大会」)が、関係する全ての皆様の御理解、御協力の下、無事に開催できましたことに対し心より感謝を申し上げます。

また、講演会の講師をお願いいたしました小倉 勝登 様(文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官)、全体会場や授業会場に御臨席賜りました6名の顧問(歴代委員長)の皆様、御助言をいただきました7名の主査や指導主事(北海道教育委員会4名、札幌市教育委員会3名)の皆様など、多くの方々から御指導を賜りましたことに、心よりお礼申し上げます。

さらに、御多忙のところ授業会場校を快くお引き受けいただいた北九条小学校、伏見小学校、円山小学校、緑丘小学校、中央中学校、新琴似中学校、羊丘中学校の校長先生はじめ教職員の皆様に感謝申し上げます。

本大会は、3か年継続研究の1年次として、研究主題「社会とつながり、価値を創造する北国の子の育成」及び研究副主題「見方・考え方を鍛え、確かな社会認識をもとに未来を志向する社会科の学び」の具現化に向け、開催地区である札幌市社会科教育連盟が真正面から取り組まれました。トンネル工事における“先進導坑”の役割を確かに自認するとともに、今回で50回という節目となる地区研究大会のこれまでの開催実績を生かし、子どもの姿を通して参会者の皆様に強く主張する実践公開をしていただきました。

また、各地区組織による責任提案では、短い準備期間であったにもかかわらず、地域素材の価値を再認識する実践、国際社会の現状の解決を志向する実践、現代の教育課題の解決に挑戦した実践など、いずれもわたしたちの“社会科魂”に火を付ける、魅力十分な提案内容でした。

大会運営において札幌市社会科教育連盟は、電子チケットシステムを用いた参会者情報の一元管理、研究紀要データのダウンロード配付など、運営業務全体の効率化(DX化)にも取り組んだことで運営担当者の負担軽減を図ったように、今後、各地区組織での研究大会開催に向けてのヒントを提供していただきました。

繰り返しとなりますが、多くの方々の御理解、御協力を賜り、研究大会開催の“バトン”を函館地区(令和6年度)、旭川地区(令和7年度)へとつなぐ最高のスタートを切っていただきましたことに対し、改めまして感謝を申し上げます。

北海道社会科教育連盟事務局長 石川 円
(札幌市立発寒南小学校長)

発 行 令和 6 年 (2024 年) 2 月

発行者 北海道社会科教育連盟 (<http://www.school-ed.jp/do-sharen/>)

委員長 千 葉 一 博

札幌市立三里塚小学校

札幌市清田区里塚 2 条西 6 丁目 7 — 1

TEL (011) 881-2437 FAX (011) 881-3760

事務局 札幌市立発寒南小学校内

事務局長 石 川 円

札幌市西区発寒 2 条 4 丁目 1 — 1

TEL (011) 662-2012 FAX (011) 661-3130

大会成果号に関する御意見・御要望は下記へお願いいたします。

札幌市立ノホ口の丘小学校

編集部長 岩 淵 啓 佑

札幌市厚別区上野幌 2 条 4 丁目 5 - 1

TEL (011) 893-5055 FAX (011) 893-3537